# もし、一日前に戻れたら…

## 私たち（被災者）からみなさんに伝えたいこと

『一日前（いちにちまえ）プロジェクト』エピソード集

平成23年3月

内閣府
（防災担当）

# はじめに

平成18年度にスタートした『一日前プロジェクト』は、自然災害に見舞われた方々や災害対応に従事した方々から当時の様子や感慨などを聞き取り、短い物語（エピソード）に仕立てる取組を続けてきました。

平成22年度までに生まれた500を超す物語の中には、「自分だけは大丈夫」とわけもなく思い込んでいた人が、「まさか」の被災者になってしまったほろ苦い体験談が数多く含まれています。

本エピソード集では、今年度新たに作られた物語と平成18年度から21年度の間に生まれた物語、合わせて105編を紹介しています。中には必ずしも正しい行動とは言えないものもありますが、教訓を秘めたものも多く、地域や職場、学校等で防災について考える際の一つの材料として活用いただければ幸いです。

なお、本プロジェクトにおいて作成された全ての物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」に掲載されています。これらの物語・イラストは、非営利の目的であれば、どなたでも自由に使うことができますので、広報誌やパンフレットなどにも是非利用してください。

今後、皆さん自身による「一日前プロジェクト」が実施され、地域の防災力の向上につながることを期待しています。

内閣府（防災担当）

災害被害を軽減する国民運動のホームページ：http://www.bousai.go.jp/km/

# 「一日前プロジェクト」エピソード一覧

| 年度 | ページ | 災害種別 | タイトル | 地　域 | 場　面<br>（主なもの） | 災　害 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 18 | 1 | 地震・津波 | 被災直後の気分で来るのは「ちょっと待って」 | 中　部 | 地域・ご近所 | 平成16年(2004年)新潟県中越地震<br>（平成16年10月） |
| | 2 | | ボランティアとの世間話が元気の素 | | | |
| | 3 | | 欲しかった通信手段 | | | |
| | 4 | | 実は無かった非常食の備蓄<br>～自分たちで最低のものは備えておかなきゃ～ | 九　州 | 地域・ご近所 | 福岡県西方沖を震源とする地震<br>（平成17年3月） |
| | 5 | | やっときゃ良かったメーリングリスト<br>～仲間の安否確認に四苦八苦～ | | 企業・職場 | |
| | 6 | | 繁華街のビル見て地震の怖さ実感<br>～オフィスの中もバラバラ～ | | | |
| | 7 | 風水害 | 水は山からやってきた | 中　部 | 家庭 | 平成16年7月新潟・福島豪雨<br>（平成16年7月） |
| | 8 | | 聞いて良かったアドバイス<br>～水害でも必要な水のくみ置き～ | | | |
| | 9 | | 「模造紙とマジック持ってきて」<br>～ボランティアセンターの運営がスムーズに～ | | 地域・ご近所 | |
| 19 | 10 | 地震・津波 | 水の中をくるくる転がった | 四　国 | 家庭 | 南海地震<br>（昭和21年12月） |
| | 11 | | 津波の第2波が来る前に逃げた | | | |
| | 12 | | ドレッサーが3mも吹っ飛んだ<br>～かっこう悪いと言われても、サイドボードにはガムテープ～ | 東　北 | 家庭 | 宮城県北部を震源とする地震<br>（平成15年7月） |
| | 13 | | 家がゆがんで、サッシ戸飛び出す | | | |
| | 14 | | 梅酒、マムシ酒も上からガシャン<br>～重いものは高いところにおかないようにしました～ | | | |
| | 15 | | マスコミ対応におおわらわ | | 行政 | |
| | 16 | | 何かの下に隠れる余裕もなかった | 中　部 | 家庭 | 平成19年新潟県中越沖地震<br>（平成19年7月） |
| | 17 | | すぐ外に出てヒヤリ | | 企業・職場 | |
| | 18 | 風水害 | 上からと下からの水が鉢合わせ<br>～あっという間に水位上昇～ | 四　国 | 地域・ご近所 | 平成16年台風第23号<br>（平成16年10月） |
| | 19 | | 家を選ぶときは地形に注意 | 関　東 | 家庭 | 平成17年台風第14号<br>（平成17年9月） |
| | 20 | | 外出時もご近所の電話番号を携帯 | | 地域・ご近所 | |
| | 21 | 火山 | 避難所の消灯時間早く困った試験勉強 | 九　州 | 家庭 | 雲仙岳噴火<br>（平成2年11月～<br>平成8年6月） |
| | 22 | | 商店が元気出そうと「元気市」<br>被災者とはげまし合い | | 地域・ご近所 | |
| | 23 | 災害共通 | 反省をふまえて要援護者リスト作りが進んだ | 近　畿 | 行政 | 平成16年台風第23号<br>（平成16年10月） |
| 20 | 24 | 地震・津波 | 重装備にマスクで通勤<br>～大変だったお父さん～ | 近　畿 | 家庭 | 阪神・淡路大震災<br>（平成7年1月） |
| | 25 | | 駅前にワゴン車持ち出し町内の対策本部<br>～有効だったホワイトボード～ | | 地域・ご近所 | |
| | 26 | | 避難所に電気マット持ち込み、何度も落ちたブレーカー | | | |
| | 27 | 風水害 | 会社の前のパレット見あたらず<br>～倉庫の中はグシャグシャ～ | 近　畿 | 企業・職場 | 平成16年台風第23号<br>（平成16年10月） |
| | 28 | | データの復旧がクリスマスプレゼント<br>～水害から2カ月で～ | | | |
| | 29 | | 保険は絶対必要<br>～見積り中で、間に合わず～ | 九　州 | 家庭 | 平成17年台風第14号<br>（平成17年9月） |
| | 30 | | 子供の頃の写真も、卒業写真もなくなった | | | |

# 「一日前プロジェクト」エピソード一覧

| 年度 | ページ | 災害種別 | タイトル | 地　域 | 場　面（主なもの） | 災　害 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 20 | 31 | 風水害 | 山道の運転は命がけ<br>～のんきな自分にあきれる～ | 中　部 | 家庭 | 平成18年梅雨前線による豪雨<br>（平成18年7月） |
| | 32 | | 立入禁止でも危機感なく<br>～ズボンの裾まくり水の中を自宅へ～ | | | |
| | 33 | | 消防団員の従業員に特別休暇 | | 企業・職場 | |
| | 34 | 風水害<br>（竜巻） | 頭の中に要援護者名簿<br>～すばやく一人暮らしのおとしよりの安否確認～ | 九　州 | 地域・ご近所 | 平成18年台風第13号<br>（平成18年9月） |
| | 35 | 風水害 | 10分たらずで床上138センチ<br>～助けたのは愛犬だけ～ | 中　部 | 家庭 | 平成20年8月末豪雨<br>（平成20年8月） |
| | 36 | | 交差点で車が水泳 | | 地域・ご近所 | |
| 21 | 37 | 地震・津波 | 屋根瓦、雨のように落ちてきた | 中　国 | 家庭 | 平成13年(2001年)芸予地震<br>（平成13年3月） |
| | 38 | | 地震で上に何かあったら下へ、高潮で下に何かあったら上へ<br>～隣接の7自治会で助け合い～ | | 地域・ご近所 | |
| | 39 | | 「ここにいるよ！」と笛をひと吹き | 東　北 | 家庭 | 平成20年（2008年）<br>岩手･宮城内陸地震<br>（平成20年6月） |
| | 40 | | 縦揺れでストンと落ちた窓ガラス | | | |
| | 41 | | 経験活かして事前準備<br>～すぐに役立った応急危険度判定用紙～ | | 行政 | |
| | 42 | 風水害 | ちょっとの手助けきっかけにみんなが動き出す | 中　国 | 地域・ご近所 | 平成11年6月末梅雨前線豪雨<br>（平成11年6月） |
| | 43 | | こういう時に避難させてええんかどうか<br>～難しい自治会長の立場～ | | | |
| | 44 | 風水害<br>（高潮） | まるでドラマの水攻め<br>～天井まで数十センチでストップ～ | 中　国 | 家庭 | 平成11年台風第18号<br>（平成11年9月） |
| | 45 | | 犬は冷蔵庫の上、ネコはタンスの上 | | | |
| | 46 | | 前日の注意呼びかけ記事も切迫感なし | | 企業・職場 | |
| | 47 | 風水害 | 竹やぶの水止まったと思ったら、家の前に土石流 | 中　国 | 家庭 | 平成21年7月中国･九州北部豪雨<br>（平成21年7月） |
| | 48 | | 自分の捜索願いに驚く | | 地域・ご近所 | |
| | 49 | 火山 | ひとりに畳1枚の支給に喜ぶ<br>～避難先で郷里を案ずる毎日～ | 北海道 | 地域・ご近所 | 平成12年(2000年)有珠山噴火<br>（平成12年3月） |
| | 50 | | 避難所の自治会を組織<br>～ご近所の小グループの話し合いでルール作り～ | | | |
| | 51 | | 助かった1日前の避難勧告の事前情報<br>～道路規制前に移動終える～ | | 企業・職場 | |
| | 52 | 災害共通 | 体育館の避難所は問題山積<br>～高齢者に苦痛な和式トイレ、消灯すると真っ暗～ | 北海道 | 地域・ご近所 | 平成12年(2000年)有珠山噴火<br>（平成12年3月） |
| | 53 | | 人の目が負担だった避難所生活 | 東　北 | 地域・ご近所 | 平成20年(2008年)岩手･宮城内陸地震<br>（平成20年6月） |
| 22 | 54 | 地震・津波 | ゲーム機、気になり、自宅に向かう<br>～ビー玉転がし異変知る～ | 中　国 | 家庭 | 平成12年(2000年)鳥取県西部地震<br>（平成12年10月） |
| | 55 | | 段ボールの切れ端片手に近所の安否確認 | | 地域・ご近所 | |
| | 56 | | 仮設のご近所がシルバー人材仲間に | | | |
| | 57 | | 家のことは二の次、消防団活動 | | | |
| | 58 | | 教習所のマイクロバスで温泉送迎<br>～できる範囲で地域貢献～ | | | |
| | 59 | | すごかった6年生<br>～下級生守り、先生励ます～ | | 学校 | |
| | 60 | | 学校中に明かりつけ、地域の目印に | | | |

# 「一日前プロジェクト」エピソード一覧

| 年度 | ページ | 災害種別 | タイトル | 地　域 | 場　面（主なもの） | 災　害 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 22 | 61 | 地震・津波 | 友だちにはビデオメッセージ<br>～休校中に児童を訪問～ | 中　国 | 学校 | 平成12年(2000年)鳥取県西部地震<br>（平成12年10月） |
| | 62 | | おじいちゃんと一緒に笑顔の女児<br>～ポスターで地域励ます～ | | | |
| | 63 | | 化粧鏡の前で大揺れ<br>～割れずにけがせず良かった～ | | 企業・職場 | |
| | 64 | | 車がみんなでダンスを踊っているよう | | | |
| | 65 | | Yシャツ姿でつるはし、スコップ<br>～一気に仮復旧し、翌日営業再開～ | | | |
| | 66 | 風水害 | 博多駅前は一面の泥の海<br>～通勤客は靴を片手に、水の中を歩く～ | 九　州 | 企業・職場 | 福岡水害<br>（平成11年6月） |
| | 67 | | アクセル踏みつづけ、必死の運転<br>～車はマフラーに水が入ったらおしまい～ | | | |
| | 68 | | 大雨の中の運転はプロでも命がけ<br>～経験と判断で身を守る～ | | | |
| | 69 | | 前の晩「おかしいね」と言いながらいつものように就寝 | 中　部 | 家庭 | 東海豪雨<br>（平成12年9月） |
| | 70 | | おばあさんが備えておいた缶詰で助かる | | | |
| | 71 | | 水害はドロの災害<br>～後始末に四苦八苦～ | | | |
| | 72 | | 女性が一番困ったのはトイレ | | 地域・ご近所 | |
| | 73 | | 水没した車に当たりながら進んだ救援ボート | | | |
| | 74 | | 小学校へ避難途中に福祉施設へ緊急避難 | | | |
| | 75 | | 災害時の助け合いは普段のつき合いがあってこそ | | | |
| | 76 | | 地域で緊急避難場所の提供を考えよう | | | |
| | 77 | | 必死で喫茶店のゴミ出し、清掃<br>～水害後13日ぐらいで店再開～ | | 企業・職場 | |
| | 78 | | 網の目フェンスにゴミが詰まって水はけず<br>～まるでビーバーのダムみたい～ | 九　州 | 地域・ご近所 | 福岡水害<br>（平成15年7月） |
| | 79 | | 流れの速い川には近寄るべからず<br>～消防団員の経験から言っておきたいこと～ | | | |
| | 80 | | 消火栓でヘドロを洗い流す<br>～二次災害防止で分団と地域が決断～ | | | |
| | 81 | | 地域に頼られる消防団<br>～これからは若い人の力にも期待～ | | | |
| | 82 | | 土のう積みは消防団が災害出動。片づけは住民の手で<br>～役割分担を理解して～ | | | |
| | 83 | | 100メートル以内、すぐに行ける避難場所が欲しい<br>～近くのアパートやビルを事前に指定～ | | | |
| | 84 | | 止水板でどうにか被害食い止める<br>～4年前の水害の経験生かし早めに準備～ | | | |
| | 85 | | 地下浸水防止は地域ぐるみで<br>～駅周辺のビルと連携、訓練も～ | | | |
| | 86 | | 地下鉄入口の止水板設置のタイミング<br>～お客さまに不便をかけたくないと悩む～ | | 企業・職場 | |
| | 87 | | ボランティアを受け入れてもらうのも大変<br>～お年寄りの警戒心高く～ | 中　国 | 地域・ご近所 | 平成17年台風第14号<br>（平成17年9月） |
| | 88 | | 高校生を話し相手に笑顔のおばあちゃん<br>～集落総出でボランティア～ | | | |
| | 89 | | 入れ歯流され、体調こわすお年寄り<br>～同じ目線で気持ち汲みとる～ | | | |
| | 90 | | 「避難勧告」発令で、企業の社宅に避難<br>～地域応援協定がさっそく生きた～ | 関　東 | 地域・ご近所 | 平成19年台風第9号<br>（平成19年9月） |

# 「一日前プロジェクト」エピソード一覧

| 年度 | ページ | 災害種別 | タイトル | 地　域 | 場　面<br>（主なもの） | 災　害 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 22 | 91 | 風水害 | 「とりあえずの避難」 でも、必需品は持参して<br>～夏でも必要だった毛布～ | 関　東 | 地域・ご近所 | 平成19年台風第9号<br>（平成19年9月） |
| | 92 | | 「避難勧告」を知らせても、誰も避難しなかったアパートの住民 | | | |
| | 93 | | 「避難勧告」ってどこから来たの？<br>～情報の出所わからず、どうしてよいか迷う～ | | | |
| | 94 | | 避難の経験が地域の人を結びつけた<br>～若いお父さん、お母さんも地域の活動に参加～ | | | |
| | 95 | | 前もって避難の方向を決めていた<br>～山崩れに迷わず避難、命助かる～ | 中　国 | 家庭 | 平成21年7月中国･九州北部豪雨<br>（平成21年7月） |
| | 96 | | 受話器を置いた途端にまた電話<br>～1本の木が倒れても何件も通報～ | | 企業・職場 | |
| | 97 | | 「来る、来る、来る」路地はまるで川のよう<br>～川の氾濫の大変さ実感～ | 中　国 | 家庭 | 平成22年梅雨前線による大雨災害<br>（平成22年7月） |
| | 98 | | 「休んでね」と言ってる自分が休んでない<br>～ボランティアもスタッフもついつい熱中しがち～ | | 地域・ご近所 | |
| | 99 | | 軽装での復旧作業は危険がいっぱい | | | |
| | 100 | | ボランティアの健康管理にひと役<br>～災害支援ナースは、被災者にも勇気を～ | | | |
| | 101 | | マンホールに片足バコーン<br>～泥水で蓋が浮いているのに気づかず～ | | | |
| | 102 | | 重い長靴を引きずって歩く<br>～軽い長靴、あったらいいな～ | | | |
| | 103 | | 紙おむつがプカリプカリ<br>～水の浸入防ぎきれず～ | | 企業・職場 | |
| | 104 | | 経験踏まえ、復旧業者を早めに手配<br>～従業員のケアも忘れずに～ | | | |
| | 105 | | 1 階のお年寄りはゆっくり2階へ<br>～情報収集して早めの判断～ | | | |

## 被災直後の気分で来るのは「ちょっと待って」

（小千谷市 50代 男性）

最近、震災直後のボランティアさんと、復興に向けていくときのボランティアさんの気持ちというか、質が変わってほしいと思うようになりました。

震災のときのままの感じで来られると、せっかく前に向いているものが、また後戻りするみたいな感じになってしまう。確かに後戻りしなくてはいけないときもあると思うんですけど、今は、前に行くことのほうが大事なんじゃないかなと。

困っているときに一生懸命家の片づけをやってくれたり、食事の支度を手伝ってくれた人たちには、ことばで表せないほど有り難く思っています。だけど、身勝手かもしれませんが、地震が起きた時の話をいつまでも引き合いに出されると、正直、「ちょっと待ってくれよ」と、うんざりする部分があるんです。

2年以上たった今、私たちには、「1歩前に出たんだよ」という気持ちがある。やっと自分の中にしまいはじめたのにまた引っ張り出されると、ちょっと参るな。

# ボランティアとの世間話が元気の素

（小千谷市 50代 男性）

避難している間、体育館の中では調理できないので、外にテントを建ててそこで全部煮炊きをして、食事をつくりました。

最初、村のお母さんたちが中心にやっていたところへ、ボランティアさんがどんどん来てくれたわけです。お母さんたちが、これをしてくれ、あれをしてくれ、食事ができたら配ってくれ、終わったのは洗ってくれとか言って、そういうやりとりの中でボランティアの人たちとだんだん打ち解けていきました。

1日限りでなくて、何十日もいてくれた人もいっぱいいました。食事の作業が終わると、火を切らさないように外の焚き火にどんどんマキをくべて、みんな一緒に暖をとりながら世間話をする。知らない人だから気楽に話せるってこともありますよね。

特にお年寄りたちは、知らない人たちといろんな話をすることによって、恐怖心が徐々に消え、元気が出てくるようでした。とにかく、人がいっぱいいると賑やかなんですね。そんなこと、都会では当たり前かも知れないけれど、山間地はふだんあまりひと気がないわけなんです。

## 欲しかった通信手段

（小千谷市 50代 男性）

うちの地域はそれこそ、災害なんていうのは考えてもみない状況の中で起きて、子供さんが3人亡くなりました。みんなで救出作業をやりながらも、もっとけが人なんかが出たらどうしようということで、私ともうひとりが小千谷までの15キロぐらいの道を徒歩とバイクで、救急車をよこしてくれるよう頼みに行きました。

何だかんだ、行き着くまで2時間ぐらいかかったのかな。村を朝の8時ごろ出て10時ごろ着いて、連絡が終わってまた引き返してお昼ちょっと過ぎに帰ってきました。そういった経験をした中で、ほんとうは、市から何キロ範囲には直結の防災無線があるということになればいいなと思いました。

電話は全くだめで、携帯電話はつながると思っていたけれど、NTTのアンテナが倒れて使えませんでした。

自分が対策本部のある市役所に行ったときに、山古志地域の状況が全然把握できないと言われました。自分が行った時が初めてだというふうに言われたんです。足でそこまで行かなかったら情報が全然届かないわけなんです。

# 実は無かった非常食の備蓄

～自分たちで最低のものは備えておかなきゃ～

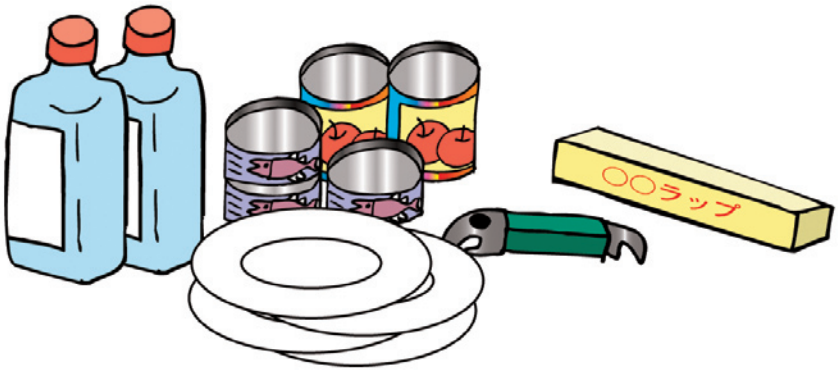
（福岡市 60代 男性）

防災訓練の時に、「おかゆ」とか「乾パン」が参加者に配られたんです。そうするとわれわれは、どこにでもそういうものが用意してあると思ってしまったんですね。だから、地震のときには、当然、配られると思っていた。そうしたら無い。

区役所の人たちに聞いてみたら「区役所にはそういう備蓄はありません。消防が持っているはずです」と。

で、消防の所長さんに尋ねてみると「いやぁ、消防にそんなものはないですよ」と。それには、参りました。

やっぱり、自分たちで最低のものは備えておかなきゃならないんだなと思いました。



# やっときゃよかったメーリングリスト

～仲間の安否確認に四苦八苦～

（福岡市 40代 男性）

出張先の東京で地震のニュースを聞き、とんぼ返りで福岡に戻ってきたのは、午後4時ぐらいでした。私は青年会議所*の理事長という立場にありましたので、パソコンや携帯メールを使って、メンバーの会社の状況がどうなのか、けが人はいないのか、家族はどうなのかということを専務理事と手分けして片っぱしからきいていきました。とにかく、メンバー全員の情報を取りたいと思ったのです。

しかし、このメンバーの安否確認というのは、困難を極めました。300名のメンバーひとりひとりに連絡をとることは容易ではありませんでした。

そのとき、情報を一斉に配信する手だてをもっと早く講じておけば良かったと痛切に感じましたので、地震のあと、さっそく、メーリングリストの導入を検討しました。何といっても災害時は、情報共有が一番ですからね。

＊青年会議所は、40歳以下の青年経済人によって組織されるまちづくりとひとづくりの団体です。

# 繁華街のビル見て地震の怖さ実感

～オフィスの中もバラバラ～

（福岡市 50代 男性）

日曜日ですから、寝ていましたよ。まあ、幸い自宅のマンションは、新しかったし、岩盤のかたいところに建っていたからほとんど被害がなかった。で、かみさんがいたんですけれども、ほったらかしてすぐ家を飛び出しました。

とりあえず社に駆けつけたということなんですけど、途中で、ビルのガラスが割れているところに遭遇しましたし、確かに驚くような揺れだったんですけれども、現実にまちの様子を目の当たりにして、大変なことが起きたという認識をもちました。

会社に着くと、全員集合をかけていたので、もう何人かは出てきていましたけど、まだ部長が出てきていなかったので、結局最初は私が指揮するという形になりました。

オフィスのテレビは落っこちているし、ロッカーは倒れているし、かなりの惨状でした。

まず何をやったかといえば、連絡をきちんととって、だれがどこにいるかというのを把握して、出てこられないやつはそこで取材せよという、人の配置でした。

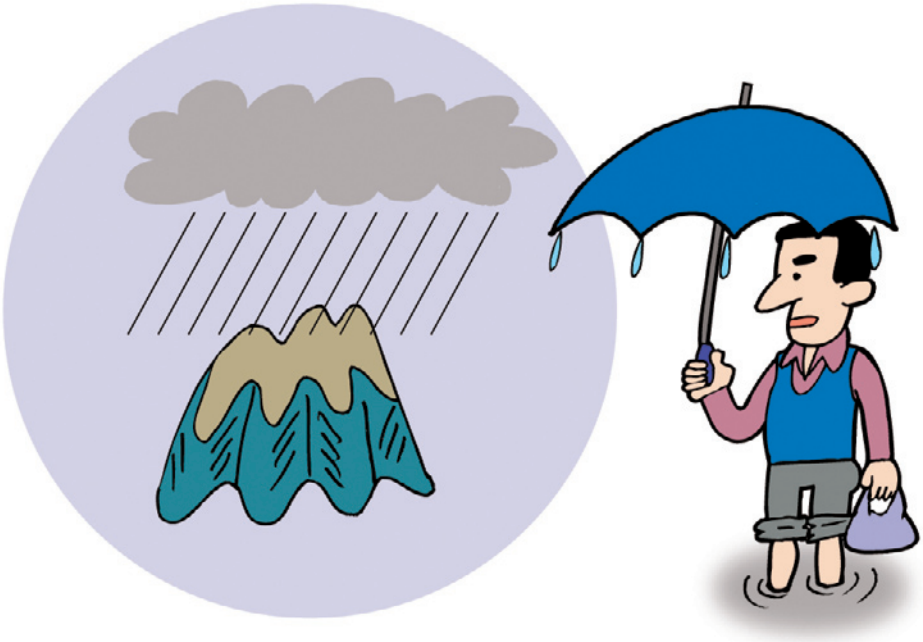
## 水は山からやってきた

（三条市 40代 男性）

7月13日に川が決壊したのですが、あの年はカラ梅雨で、あんまり雨が降らなかったんですよ。ずっと雨が降らず、土が乾いているところに、バケツをひっくり返したように雨が降ったのです。急に雨が降ったために、土が水を吸わなくて、みんな表面に流れちゃって、それが排水溝に流れたためにひどくなったのではないかと言われています。

今思えば、その少し前、7月10日に三条市のこの地域でかなりの雨が降りました。13日は、主に川の上流、山のほうで雨がたくさん降りましたが、この地域で雨がひどかったのは、ほんの2時間ぐらいだったのです。

想像つかない場所で水がたまっていたのだと思うけど、私たちの目には見えない。こっちのほうはそれほどじゃなかったから、危機感が薄かったのだと思います。



# 聞いて良かったアドバイス

～水害でも必要な水のくみ置き～

（三条市 40代 女性）

隣の奥さんから、「とにかくお風呂にいっぱいお水をためて、ふたして、きれいなお水にしておくんだよ」って言われました。「えっ、じゃあ、掃除しておかなきゃ」なんて言って、一応ためました。あとで断水したら困るからなんですね。じゃあ、お湯も必要になるなと思って、やかんにいっぱいお湯を沸かして、ありったけのポットにお湯を詰めました。水は午前中のうちに止まっちゃって、子供たちが順番にトイレに入っていくごとに、「流れない、流れない」って。それで、お風呂の水で流しました。

それから、「ご飯もとにかく、朝食べちゃったなら、炊きなおしなさい。めいっぱい炊いておくんだよ」と言われて、「えっ、そんなに要らないじゃん!」って言ったけど、「保温をきかせておかなきゃだめだよ」って言われて、朝9時前にお米をといで、ごはんを炊いて保温にしておきました。お昼頃おにぎりを作って、ポットなどをもって2階にいました。

子どもに食べさせていたら、ひとりで留守番をしているお向かいのお子さんが、うちの子に「お腹がすいた」ってメールしてきたので、2階の屋根から、「これ、食べなさい」って、おにぎりを投げてあげました。

# 「模造紙とマジック持ってきて」

～ボランティアセンターの運営がスムーズに～

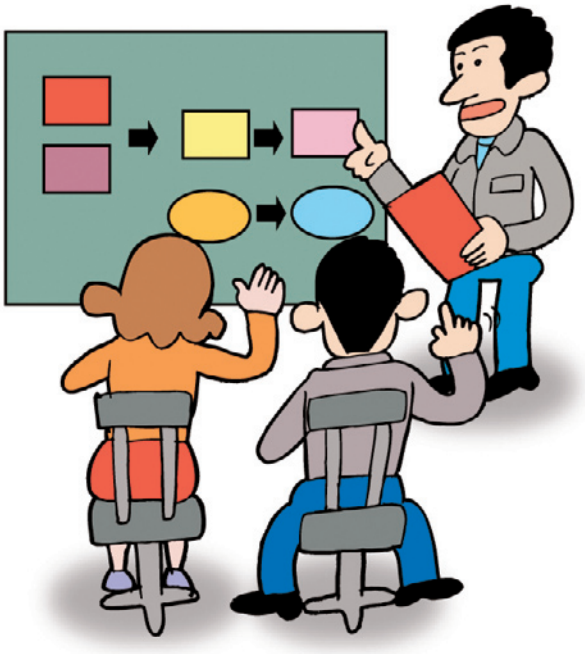
（三条市 40代 男性）

水害のあとかたづけのボランティアのために、ボランティアセンターを作りました。センターでは、毎日の活動の進みぐあいや翌日の予定を話し合いました。

会議をスムーズに進める方法の一つに、ファシリテーション・グラフィックという技法があるんです。これは、会議に参加していない人でも、後から見ればわかるし、会議におくれてきた人でも参加できるというもので、模造紙にマーカーでわかりやすく書いてあげることによって、その人の発言をちゃんと聞いたよと示すことができ、同時に情報の共有と保存もできます。

よくボランティアセンターの終了ミーティングがめちゃくちゃ長かったという話を聞きますが、この手法を使ったので、私たちの終了ミーティングは短くて済みました。長くても1時間、ふつうは30分を目標にしていましたが、目の前の模造紙に書いていくことで情報共有がしやすいことと、模造紙に向かって話をするから個人の意見の対立にはなりませんでした。

当事者の議論は後ですることにして、その場は報告のみで議論はしないという前提で進めると、報告事項をあげてもらうだけですむのでとてもスムーズにいくのです。今まで、まちづくり等でこの手法を使ってきたことが活かされたかなと思います。



## 水の中をくるくる転がった

（徳島県海部郡 70代 女性）

大きな揺れのあと、家の中まで波が押し寄せてきたので、家族4人が、「早う、早う」と言いあって、逃げました。でも、横からも後ろからも来る波で足をとられ、なかなか歩けませんでした。

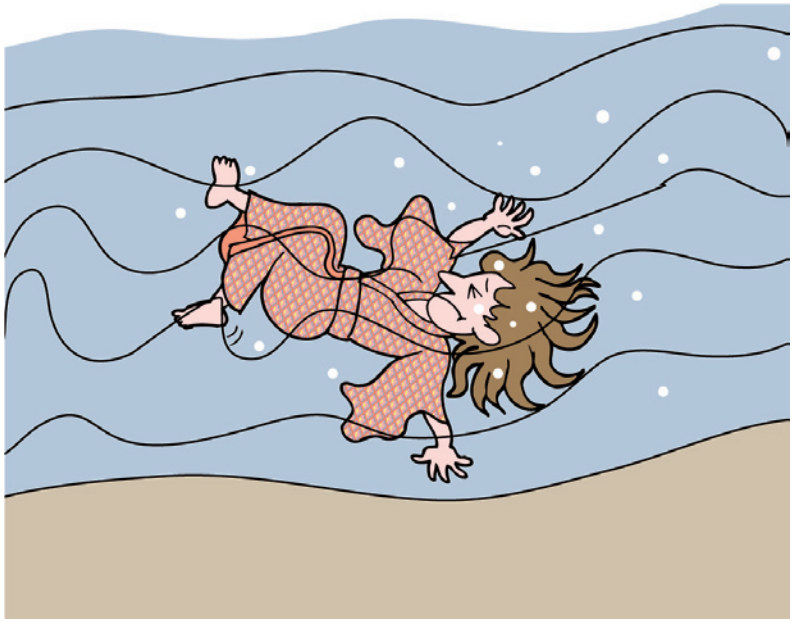
そうしているうちに、4人ともあっという間に大きな波にさらわれてしまったのです。私は、まるで洗濯機の中にいるように水の中をくるくる転がって、潮を何回も飲みました。

息苦しくて、どうにかして頭だけでも波の上へ出さなかったら、死んでしまう。私の命ももう終わりだと、そんなことばかり頭にありました。

それが、どうしたものか、頭を波の上へ出すことができたのです。「ああ、よかった、生きとる。これで息ができる」と思いました。

しばらくして、何か木のようなものが手にさわったので、それをパッとつかみました。足が地面についていないものだから、手が痛くてね。でも、これを放したら、またどっかへ流される。そうしたら今度は命がないと思って、必死でした。

少しあたりが明るくなってきて、一体どこまで流されたんだろうとあたりを見回すと、おどろいたことに、私は裏の家の入り口の敷居につかまっていたんです。



## 津波の第2波が来る前に逃げた

（徳島県海部郡 70代 女性）

津波で流されている間は、家族のことは頭に全然なかった。ちょっと薄情なぐらいに。自分が生きよう生きようという気持ちでいっぱいでしたね。

潮も引いて、足も立つようになって、「あ、そうだ、お父さんやお母さんたちはどこまで流されたんだろう」と思いました。「早う探しに行かないかんなあ」と思っていた時に、私が敷居につかまっていたその家の中から話し声が聞こえてきたんです。

「だれかいるん、だれかおるーん?」と2回ほど聞いたら、「おるぞー」という声がしました。お父さんでした。お母さんも姉も中にいて、親子4人が、「命拾いしたなあ」と、肩を寄せて、もう泣くばかりに、喜びました。

だけど、津波って、2回、3回と来ると聞いていたので、「早う逃げないかん」言うて、母は足にケガをして血を流していましたが、姉と私が両方から支えて、みんなで裏山の方に逃げました。

途中、2人ほど、女の人が亡くなっていました。ハッとしました。でも、私はどうすることもできんしね。後ろ髪を引かれる思いで山のすそまで来ると、第2波の津波が押し寄せてきました。

# ドレッサーが3mも吹っ飛んだ

～かっこう悪いと言われても、サイドボードにはガムテープ～

（東松島市 70代 女性）

あの朝、「おばあさん、大変だから早く外に出て!」という孫の声がして起きてきたら、茶の間のサイドボードの扉が開いて、中の瀬戸物なんかが全部飛び出していました。それから、壁のところに置いてあったドレッサーが、3mぐらいはなれたところに倒れていました。テレビはキャスターがついていて倒れなかったけれども、30cmぐらい前のほうに動いていました。とにかく普通の揺れじゃなかったんですよ。

やっぱり「観音開き*」はだめですね。地震の揺れでサイドボードの扉がバーンと開いて、しまってあった茶わんやらグラスやらが落ちて割れてしまいました。

「地震のなごりだから、もう捨てたら?」と言われるけれど、2つ3つ残った半端な食器をなぜか惜しくて捨てられないんです。

で、今では扉が開かないようにガムテープを張っています。「おばあさん、みっともないからはがしてよ」って言うけれど、またいつ来るかわからないから。

＊観音開きとは、中央から左右に広がって開く形式の扉のこと。

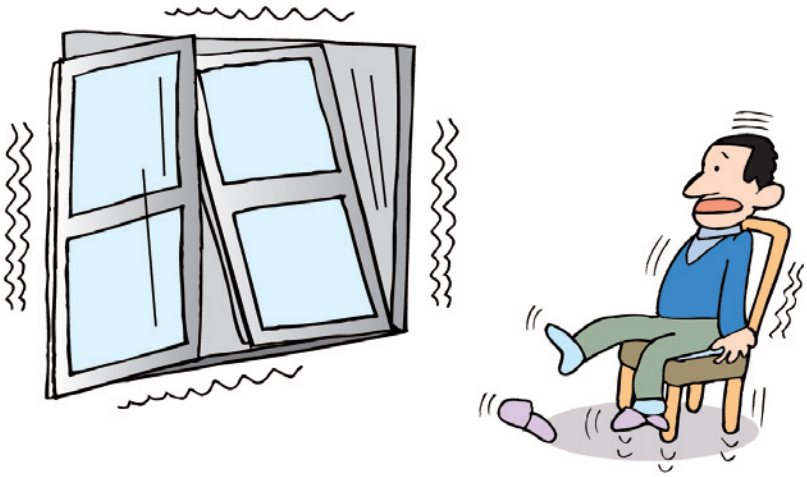
## 家がゆがんで、サッシ戸飛び出す

（石巻市 70代 男性）

朝の7時15分ぐらいに、2度目の地震が来たんです。イスに腰掛けていたら、からだがボン、ボン、ボンとはずみました。上にはずんだ感じでした。

みると、うちの雨戸がわりのガラス戸が、10cmか15cmぐらいバッフ、バッフとあいたかと思うと、あらら、あらら、といううちに、バシャ、バシャ、バシャという音がして、ガラス戸がはずれて外側に倒れました。

それらの戸は、木の枠ではなく、サッシの枠でした。家がゆがんでサッシの戸が外に飛び出すなんて、信じてもらえないかもしれませんが、ほんとうのことなんです。



## 梅酒、マムシ酒も上からガシャン

～重いものは高いところにおかないようにしました～

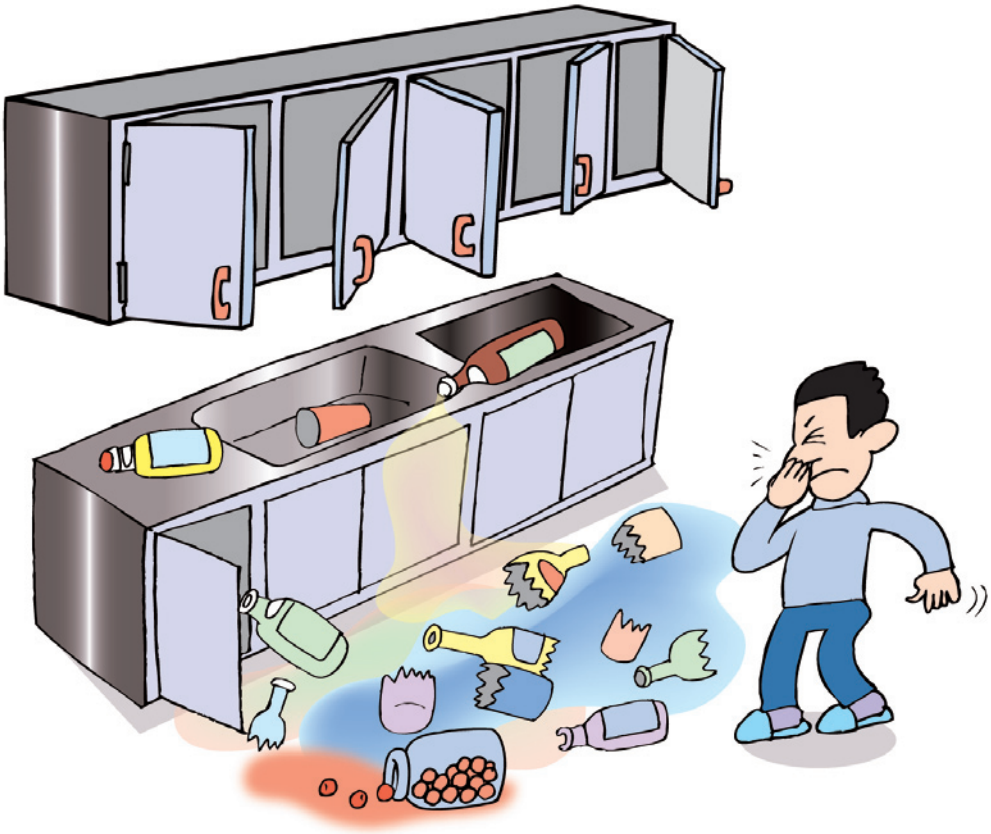
（石巻市 50代 男性）

テレビも吹っ飛ぶぐらいの揺れだったから、台所の冷蔵庫も流しに倒れかかって、中のものがどんと出ていました。

それから、流し台の上に上げていた梅酒とかマムシ酒とかが入ったガラスの容器も全部落ちて、床一面が水浸しになりました。

とにかくどこから手をつけていいのかわからないほどの状況でしたが、一番困ったのが「におい」です。お酒やら食べ物やらいろんなものが混じったにおいは、口であらわせないくらいすごくて、息をするのもやっとでした。

せっかく作ったお酒がなくなってしまったのはちょっぴり残念でしたが、家族がケガをしなかったので、ホッと胸をなでおろしました。あれからはもう、重たいものを上に置くことはやめました。



# マスコミ対応におおわらわ

（宮城郡 50代 女性 行政職員）

一番手間がかかったのがマスコミ対応でした。朝昼晩、それこそ1社、2社じゃないので、「被害は何軒ですか」、「負傷者は何人ですか」といった質問に答えるために、一生懸命データをまとめなければなりませんでした。

マスコミの方々も情報を流さなければいけないんでしょうけど、こちらも同じ条件で情報を流さなければいけないから、何人もでは対応できなくて、1人がマスコミ対応に追われてしまったのです。

「○○時にまたおかけします」と言われれば、その時間までにまとめなきゃいけないわけで、結局、指揮をとるべき総務課長がマスコミ対応に入ってしまったので、命令系統がちょっと大変になって、職員も振り回されたかたちでした。

初めて経験する職員も多く、こちらからマスコミにうまく情報を流してもらうなんてことは頭になくて、聞かれれば答えなきゃいけないという状況でした。

## 何かの下に隠れる余裕もなかった

（柏崎市 40代 女性）

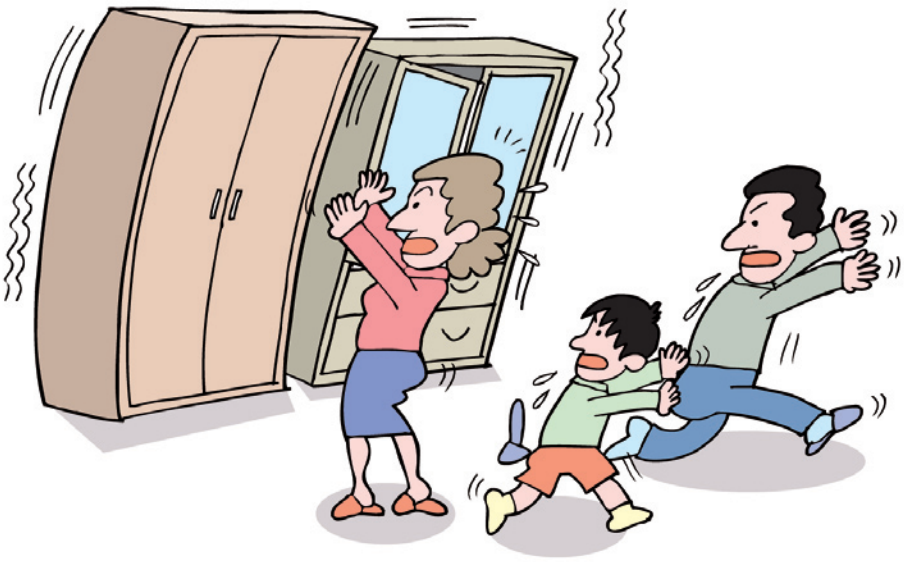
3連休で、離れて住んでいる大学生の子どもも帰ってきて、みんながちょうどうちにいたんですよ。で、午前10時すぎにちょっと遅めの朝ご飯を食べた後に、いきなり揺れだしたのです。

前の新潟県中越地震の時は、食器一つ割れなかったんですが、今回の中越沖地震では台所の食器棚などが、ガシャン、ガシャンとものすごい音をたてて倒れたし、そこら辺にあるものすべてが倒れて、「うちが壊れる」と思いました。

ふつうは何かの下に隠れるとかね、でも、今回はそういう余裕がなくて、自分は記憶にないんですけど、なぜか倒れたタンスのほうにふらふらと歩きかけたみたいです。「あのままだったら、タンスの下敷きになって死んでいたよ」と、あとで子どもに怒られました。

窓のほうを見たら、サッシがグニャグニャになっていたので、「これはもうだめだ、早く外に出よう」と言って、玄関のすぐわきにあった掃き出し窓からみんなで外に出ました。

当時、携帯電話とかは全然つながらなかったので、うちはたまたまみんないたからよかったけれど、家族と離れている人は連絡を取り合うのに大変だっただろうと思います。



## すぐ外に出てヒヤリ

（柏崎市 50代 男性 会社員）

会社は4階建てでして、その日はちょうど3階の製造の現場で新しいラインの工事をやっていたんです。私もその手伝いに来ていて、地震が起きたときは1階で作業をしていました。

かなり大きな揺れだったので、「地震のときは、上からものが落ちてくるから周囲をよく見なさい」とかいう話をよく聞きますが、そのときはとにかく「何が起こったのだろう」と思って、いきなり外に出ちゃったんですよね。

緊急時には必ず駐車場側に集まるということになっていますので、外を回って建物の反対側へ行くと、西側の4階の窓のガラス戸がフレームごと下に落ちて中の棚がガサッと外につきだしていたり、厨房の大きななべが2階から吹っ飛んでいて、ゾーっとしました。

たまたま自分は反対側だったから良かったけれど、場所によっては危なかったと思います。やっぱり、地震のときはあわててすぐ外に飛び出してはいけないと思います。

# 上からと下からの水が鉢合わせ

～あっという間に水位上昇～

（徳島市 50代 男性 消防団員）

このあたりは、上流から水が流れ落ちると同時に、下流から泥水がそ上してくるといった感じ。泥水が上と下両方から鉢合わせして、水位がグーっといっぺんに上がってきたという状況でした。1時間で1mぐらいの水が増えたと思います。

消防団が動き出す前に、「家が床下までつかっているから助けてくれ」という連絡があり、消防局に救助をお願いしたのですが、それからほんの10分ぐらいの間に道と側溝の境がわからないほどに水が上がってきました。きっと消防局の車も帰りは通れなかったはずです。それほど、想像を絶するほどの雨が集中的に降りました。

低い土地では、水位が3m以上になったところもありました。そうなるともう、ボートがなければどうにも動けません。救助はどうしても老人とか災害弱者が優先になりますから、コンビニの店長さんは首まで水につかりながら、長いことがんばっていたという笑えない話が残っています。

## 家を選ぶときは地形に注意

（杉並区 60代 男性）

水害があった後、娘が結婚して家を買うと言うので一緒に行きました。その場所を見てみると、どうも地形がおかしいんです。

不動産屋さんに「地形的に見て、この辺は水が出るんじゃないですか」って聞いたら、「私たちの知っている限りでは災害はありませんけれども」と言ってましたけど。

結局娘はその家を買ったのですが、この間その辺りに水が出たそうです。前の家のところまで水が来ちゃったけど、娘の家はちょっと上がったところに建っていたから大丈夫だったと言っていました。

やっぱり一度水害の現場を見ると、ふだんの生活の中でも、地形を気にするようになりますね。

## 外出時もご近所の電話番号を携帯

（杉並区 70代 女性）

水害にあってからは、以前より雨の量や音を気にするようになりました。ニュースもよくチェックしています。

それと、私は日ごろ外出することが多いので、急に天気が悪くなった時に、自分の家が大丈夫かどうか見てもらうために、近所の人の電話番号を持って歩いています。

天気予報である程度わかっても、果たして自分の住んでいる地域にどれほどの雨が降るかってことは誰も把握できないし、場所によって雨の量が少しずつ違ってきますからね。

1軒や2軒の電話番号じゃつながらないこともあるから、近所のみんなの電話番号を携帯しています。雨が急激に降ってきた時に誰に連絡しようかなんて、あらかじめ準備しておかないと思い浮かばないと思うんです。

## 避難所の消灯時間早く困った試験勉強

（諫早市 30代 女性）

当時、一番困ったのは、避難所の消灯時間が早かったことですね。商業高校に通っていたんですが、毎月のようにある検定にそなえて勉強しようにも、夜の時とか10時に電気が消えてしまい、本を読むこともできませんでした。

仕方がないので、消灯時間前に一生懸命やって、試験の前には、友達のうちに泊まりに行って、勉強させてもらいました。

学校では、避難している子どものほうが少なく、宿題も差別することなく同じように出ていたので、きちんとしないといけないと、わたしなりにがんばりました。

避難所の生活は、とにかく不自由でしたが、家族が一緒にいられたので、子どものわたしは、それほどつらいとは感じませんでした。

# 商店が元気出そうと「元気市」

～被災者とはげまし合い～

（島原市 60代 男性）

大火砕流*で亡くなった方もいらっしゃったので、われわれ商店主も「今年はもう夏の土曜夜市はやめにしよう」っていう感じでした。でも、「やっぱりカラ元気でもいいからやろうよ」ということになり、土曜夜市を「元気市」っていう名前に変えてやりました。「元気を出そうよ!」っていうことでね。

当時、まだ仮設住宅がなくて、せまい体育館におおぜいの人が避難していました。避難所はプライバシーもなくて、みなさんちょっと精神的にきつそうにみえたものですから、いつも売り出しの時に配るお楽しみ券を「気晴らしに町に出てきて、楽しんでくださいよ」って、持っていきました。

お楽しみのなかみは、縁日によくある金魚すくいとかですが、思ったよりたくさんの方が来てくれて、久しぶりに商店街もにぎわいました。

みんなの笑顔を見ていると、「元気市」をやって良かったなあとつくづく思いました。

＊火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。

## 反省をふまえて要援護者リスト作りが進んだ

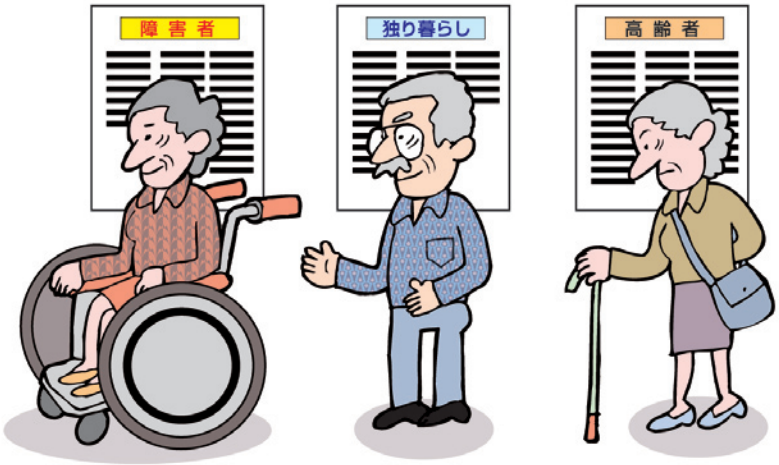
（宮津市 30代 女性）

当時、市でも、高齢者福祉とか障害者福祉という係ごとに分かれておりまして、いわゆる要援護者リストというものが、きれいに整理できていない状況でした。

幾つの人だったら、障害何級の人だったら「要介護」という把握はできていたんですが、どういう生活をしておられて、どういう支援が必要かというところまで整理できていないというのが現状でした。反対に、社会福祉協議会(社協)*は、民生委員*を通じてひとり暮らしの方の名簿は持っているけれど、「要介護」のところはわからない。それぞれにデータを持っているところがバラバラだったんです。

ということで、あの時、主要機関のネットワークや災害時の要配慮者のデータベースがあったら、もっとスムーズな対応ができたんじゃないかということに。みんながそれに気づいたので、今では社会福祉協議会が中心となってネットワーク体制が作られています。

＊社会福祉協議会とは、福祉サービスの提供やボランティア活動の支援など、地域の福祉の向上に取り組んでいる非営利目的の民間の組織です。
＊民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



# 重装備にマスクで通勤

～大変だったお父さん～

（神戸市 20代 女性 学生）

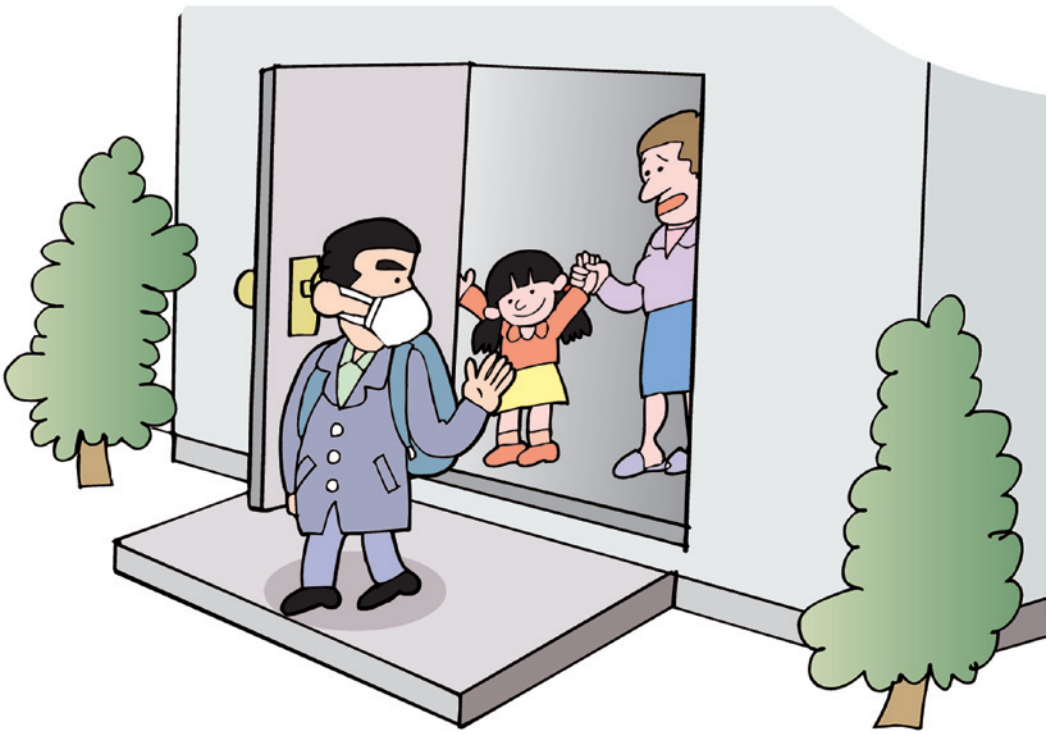
地震からしばらくすると、お父さんがこれまでと違う格好で出かけるようになりました。重装備でリュックをしょって、ごついマスクをかけていました。

町はまだ、煙とかガレキのホコリとかがひどくて、マスクをせずに歩ける状態ではなかったようです。途中でマスクを配っていたところもあるとかで、毎日いろんなマスクをして出かけていました。

それまでは、給食当番がつけるような普通のマスクしか見たことがなかったから、仮面ライダーみたいな形をしたマスクを見た記憶が強烈に残っています。

お父さんはそれまでは電車で通勤していたけど、駅がやられていたから、途中から歩きとバスで行っていたようです。私は小さくて詳しい事情はわかりませんでしたが、「お父さんって、大変なんだな」と思っていました。





# 駅前にワゴン車持ち出し町内の対策本部

～有効だったホワイトボード～

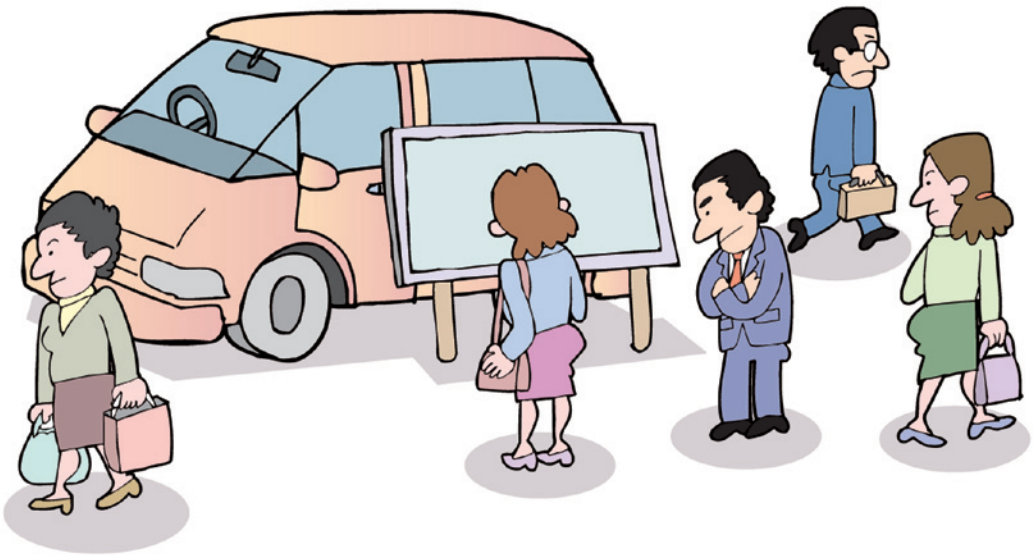
（神戸市 70代 男性）

地震の日の夕方、駅前に行くと、「自治会長、ここ、対策本部にします」と言われて、びっくり。見ると、「震災復興対策本部」とダンボールに書いたワゴン車が停めてありました。近くの商店街の果物屋さんのワゴン車でした。

地域の若いもんが、地元のFMラジオから安否情報や被害情報などがどんどん入ってくることに目をつけて、車を対策本部にしようと思いついたようです。「対策本部なんて、神戸市よりも早いんやないか」って話したことを覚えています。

それから、仲間のひとりが、「これ、使ってくれ」と言って、商売道具のホワイトボードを3枚持ってきてくれたんですよ。それを我々の対策本部のワゴン車のすぐ近くと駅のまわりに置いたら、通りがかりの皆さんが、連絡先などを書いていくので、あっという間に埋まりました。あれはほんとうに有効でしたね。





## 避難所に電気マット持ち込み、何度も落ちたブレーカー

（淡路市 50代 男性）

冬の寒い時期だったから、避難所になった町民センターも底冷えがしていました。床が冷たいので、みんな新聞を敷いて、その上に毛布を重ねて敷いとったけど、「冷たい、冷たい」って口々に言っていましたね。

そのうち、救援物資の入っていた段ボールの空き箱を敷く人も出ました。それでも寒いので、家から電気マットを持ってくる人もあらわれました。

電気は通じていたから、みんなもマネして電気マットを持ってきてね。「落ちるよ、落ちるよ」と言っても聞かないから、よく、電気のブレーカーが落ちて、町民センターが真っ暗になりました。

地震のショックもあって、あの時の寒さはこたえましたね。

# 会社の前のパレット見あたらず

～倉庫の中はグシャグシャ～

（豊岡市 50代 男性）

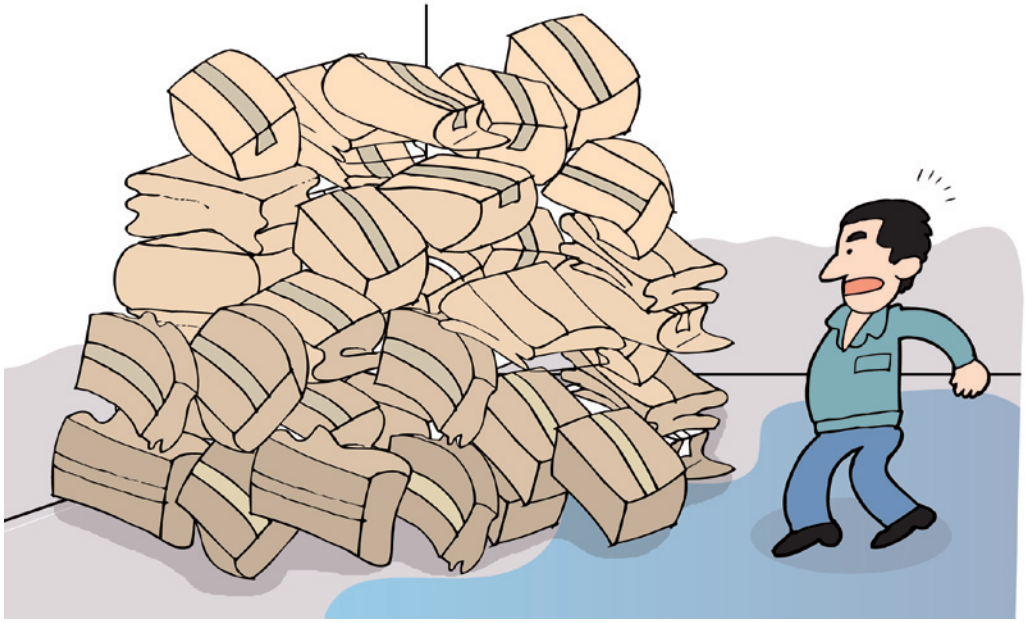
雨もかなり強くなってきたということで、社員を早めに帰し、自分も午後6時ぐらいには自宅に帰りました。帰った時点では何ら問題はなかったんです。

ところが、ものの10分もしたら、家の前に水がドードーと流れてきたんですよ。急いで情報をかき集めると、古い橋が流されて、それが橋に引っかかって、ダムみたいになってそこから水があふれ出したということでした。

30分ぐらいで、もう膝の高さぐらいまで水が来ました。車を高いところに移動させ、いざ家族で避難しようとしたときには、ものすごいスピードで水が流れてくるので、家の真向かいにある避難所の小学校までも行けなくなってしまったんです。

翌日、会社のほうが心配になって朝早めに家を出ました。会社に着くと、玄関前に積んでおいたパレット*が見あたらない。カギをあけて中に入ると、60センチぐらいのところまで水が来たような跡がありました。それから、生地とか、製品を入れる倉庫がちょっと低くなっているので、気になって見に行くと、もうグシャグシャでした。積み上げていたダンボールが水を吸って、すべて倒れてしまっているという状態でね。すぐに従業員を集めようにも電話が不通になっていて、手をこまねいているだけでした。

＊パレットとは、輸送や物流などに使う、荷物を載せる台になるすのこ。



# データの復旧がクリスマスプレゼント

～水害から2カ月で～

（豊岡市 50代 男性）

1階はすべてだめになっていましたから、とりあえず、先に出荷できそうなものだけを分別して、あとは順番に捨てて、その後にミシンなどの機械類を購入しました。それから、工場が水に浸かっていますから、後でカビが出ることが心配で、すべて室内の塗装をやり直しました。そんなこんなで、1カ月ぐらい、全然操業していませんでした。

お得意さんには、納期がこういう事情でおくれますということを伝えました。待っていただけない場合はキャンセルしていただくということでしたが、8割方は待っていただけて、ありがたいことだなと思っていました。

一番の被害は、パソコンです。すぐにハードディスクを引っ張り出して保管していたんですけれども、日本ではデータがとれないということで、結局、それをアメリカに送りました。それが帰ってきたのが水害から2カ月後の12月25日。まるでクリスマスプレゼントみたいで、それをもって全面復旧ということで、翌年の1月5日からスタートしたという形です。

あれ以来、会社の2階と、私の自宅と2カ所でデータをバックアップしています。

# 保険は絶対必要

～見積り中で、間に合わず～

（宮崎市 60代 男性）

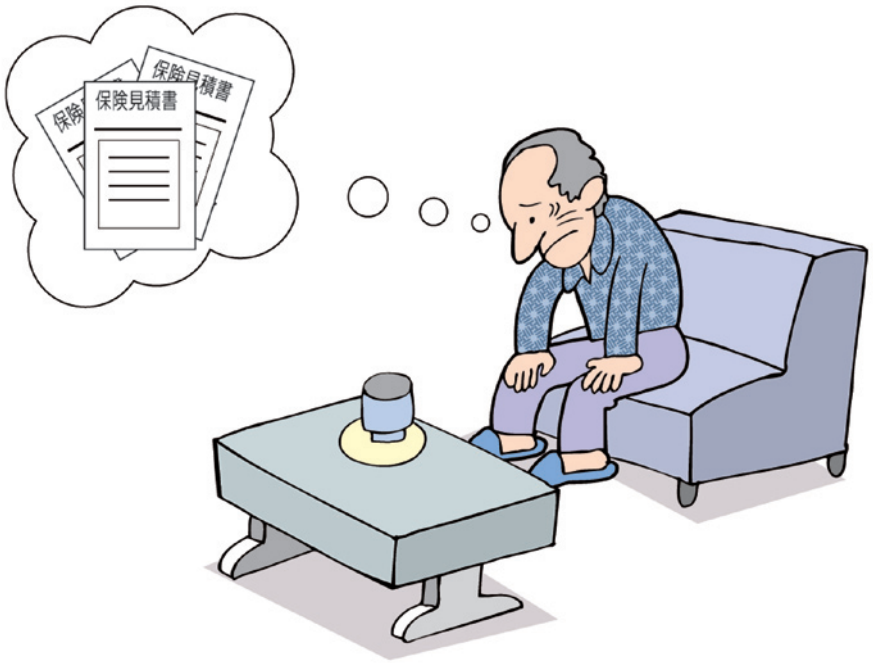
定年になって40年ぶりにふるさとに帰って、家を新築したのはいいけれど、たった9カ月でこの水害にあい、泥水につかった家は、新しくそろえた家財道具もろとも、使いものにならなくなりました。

家を建てるときは、この土地は昔から水害が多いということで、1メートル50センチぐらいかさ上げをしました。「これだけ上げたら大丈夫」と思っていたのに、あれよあれよという間に水が押しよせてきて、それこそ、女房と2人で貴重品と毛布だけを持って逃げるだけで精いっぱいでした。

結局、床とか壁は全部とり替えましたから、老後の資金にと残しておいたお金の半分を使わなければならなくなりました。

私も長い間仕事をしてきて、保険の大切さは分かっていたんですよ。だから4社ぐらいから見積をとっていて、どれが有利かよく勉強して、年末までにどの保険に入るか決めようと思っていた矢先でした。「早く保険に入ってさえいれば」と落ち込みましたが、運がなかったからだと、あきらめました。





## 子供の頃の写真も、卒業写真もなくなった

（宮崎市 20代 女性）

父親が大事にとっていた写真とか、ビデオが全部やられちゃって、それを片づける父親の姿を見るのが辛かったですね。

私の家は平屋なので、全て水につかってしまいました。だから、私の卒業写真とか成人式の写真とかも今はもうありません。泥水をかぶった写真は、表面がペラペラっとはがれてしまって、どうにもならない状態になってしまうんです。

やっぱり、みんな、最初は生活の場をつくるための片づけで手一杯なんですよね。ちょっと落ち着いてアルバムの整理をしようとするときには、紙が水をたっぷりすってしまっているから、どうしても手遅れになってしまうんです。

私が一番残念なのは、幼いころの写真がなくなってしまったことですね。「結婚式の自己紹介に使える写真がないのは困るな」なんて、冗談めかして言っていますが。

# 山道の運転は命がけ

～のんきな自分にあきれる～

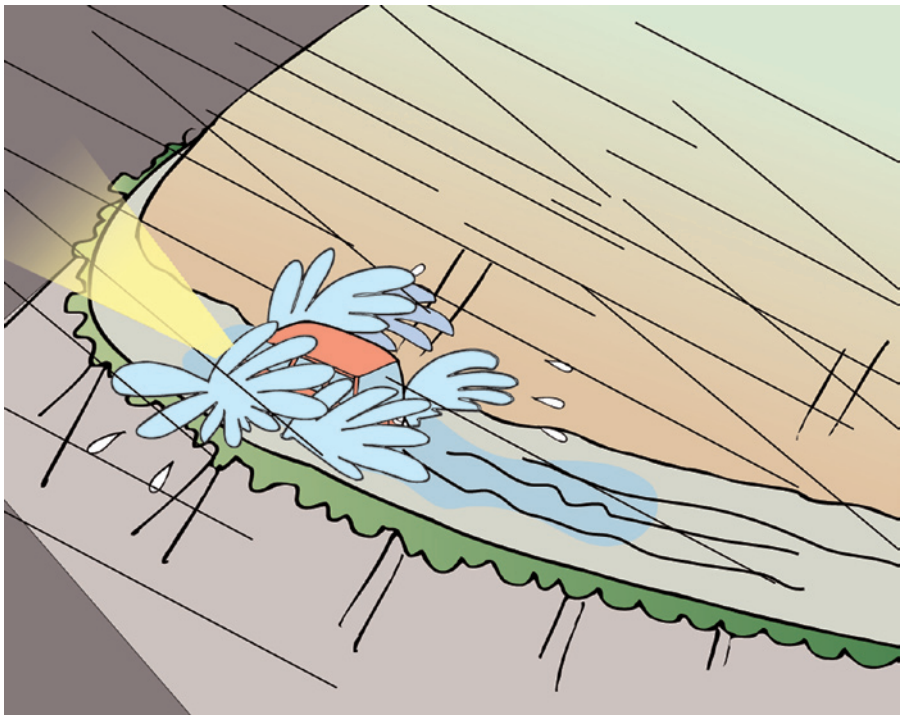
（下諏訪町 20代 男性）

学校の終業式の日、友達と羽目を外して、夜中の2時ごろに山道を運転して帰る途中であの豪雨にあいました。

途中の峠を越える時には、まるで遊園地のアトラクションみたいに、水たまりの上を走るたびに、ビシャッーっとものすごい水しぶきがあがるのです。最初のうちは、友達と「すげぇー」なんて、おもしろがっていましたが、そのうちに、前が完全に見えなくなるぐらいの水しぶきが10秒間ぐらい続くので、笑い事ではなくなりました。

「これはおかしいぞ」と思いはじめましたが、山道で引き返すこともできず、スピードを落として走りましたが、正直、ちょっと怖かったです。いつもはトラックが多く通る道ですが、運良く対向車が来なかったから助かりました。

今思うと、無謀だったなと。気象情報をまったく気にすることもなく、のんきに夜の山道を車で行くなんてね。



## 立入禁止でも危機感なく

～ズボンの裾まくり水の中を自宅へ～

（諏訪市 30代 女性）

当日は、会社から帰って、水害で浸かったあたりで飲んでいました。会社から帰る時点で大雨だという連絡はあったんですが、飲みに行くころには普通だったので出かけていました。家に帰るときには、既に50センチくらい水が上がっていて、道路一面は海原のような状態でしたが、ズボンをめくって、わざわざその中を帰ったんです。帰る途中、マンホールの周りに「危ない」という標識が立っていたのはとても印象強く覚えていますが、その時点では水が透き通っていたから、そんなに危機感もなく帰りました。

考えてみると、家って人が絶対帰る場所なんですよね。今、携帯で当時の写真を見たら、立入禁止って書いてあるんですよ。でも、私はそれを越えて家に帰っているから、人ってどんなに家が危ないときでも、家に向かってしまう習性があると思うんです。危ないときには、家じゃないところに行くという習慣をつけておかないと、すごく怖いなと思いました。

## 消防団員の従業員に特別休暇

（諏訪市 30代 男性）

本社の横にある会社の体育館は、市との協定で災害時の緊急避難場所になっています。

今回の水害でも、市役所から「もしかしたら開放をお願いするかもしれない」と電話があったので、毛布を出して準備はしていました。

結局、そこを使うことはなかったんですけれども、水害の直後は、行方不明の方もおられたので、消防団をやっている従業員は、特別休暇ということにして、そちらに協力してもらいました。

従業員の中には、週末に地域の片づけを手伝いたいというものがいましたので、会社の防災備品のスコップとか、そういった道具を使ってもらいました。職場の仲間が被災した地域でもあったので、お手伝いにいきたいという気持ちが自然とでてきたんでしょうね。

かなりの人数がボランティアに集まったようです。会社としても地域のために何かしたいという従業員をできる範囲で応援したいと思っています。

## 頭の中に要援護者名簿

～すばやく一人暮らしのおとしよりの安否確認～

（延岡市 60代 男性）

竜巻が起こったあと、一目散に一番高齢のひとり暮らしのお宅に向かいました。長靴にカッパという出で立ちで、下を向くとポタポタと汗がしたたり落ちるほど、猛スピードで走りました。

玄関の戸を開けると、その方はそれこそ怖いような顔をして座っていました。「大丈夫かい」と声をかけたら、か細い声で「はい」と。あまりのおそろしさに、声も出ないようでした。髪の毛はボサボサですし、足には小さいガラスが刺さって、そこから血も流れていたんです。

2階へ上がってみると、雨戸を突き抜け、ガラス窓を割って、外から飛び込んできたカワラが何枚も部屋の中に重なっていました。ほんとうに信じられない光景でした。

幸い、大したケガもなくてすみましたが、もし、そのカワラが頭に当たっていたらと思うと、ゾッとしました。

# 10分たらずで床上138センチ

～助けたのは愛犬だけ～

（岡崎市 70代 男性）

異変に気がついたのは夜の11時ごろでした。外はものすごい雨と雷で、飼っていた犬が雷をこわがってあまりに鳴くものだから、かわいそうになって玄関へ入れてあげたんです。

それからしばらくたって、午前1時ごろだったか、何か変な音がするものだから「何の音かな」と思って、ひょいと玄関を見ると、ドアの下、戸のすき間から水がプチュプチュと入ってきていました。

「これは大変だ。戸をあけたら、水がダッーと家の中に入ってくるぞ」と思い、寝ていた家族6人をおこすと、犬をかかえて、すぐ2階へあがりました。そのころには、もう、畳が床下からくる水の力で浮きはじめていました。

結局、10分たらずで、床上138センチまで水に浸かってしまいました。1階はほとんど全滅で、パソコンやテレビ、エアコン、衣類や書類、アルバムなど、すべてがだめになってしまいました。助けることができたのは犬だけでしたね。

パソコンに入れておいた年賀状の住所録が消えてしまったのがすごく残念だったので、今は、大雨が降るたびに、パソコンを2階に持っていくんです。

## 交差点で車が水泳

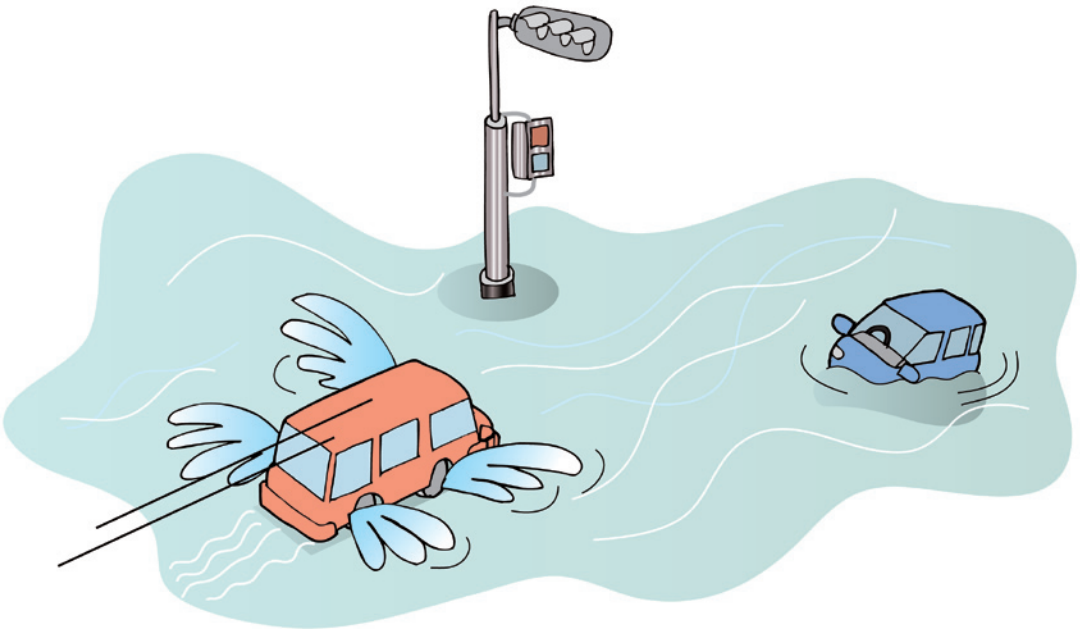
（名古屋市 60代 女性）

その交差点はすごく排水能力が低いところなんですよ。マンションの窓から見ていると、雨がどんどん降るにつれ、いろいろなところから流れ込んできた水がたまって、まるでプールのようになっていました。

そこを2000ccクラスの大きな車が通ると、大きな波が立つから、真ん中で信号待ちをしている軽自動車が浮かんでゆらゆらと動いているんです。まるで、「オリンピックは終わったのに、今度は車が水泳をやっているな」という感じ。乗っている人たちは生きた心地がしないだろうなと思いながら見ていました。

途中で引き返してきて歩道を走って避難する車もかなりいましたね。水っていうのは、ほんとうにあっという間に増えてくるので、「道路がちょっとでも冠水してきたら、車は運転しない」ということを水害対策の1つに入れてほしいなと思います。





## 屋根瓦、雨のように落ちてきた

（呉市 50代 男性）

当日は、妻と二人でおやじの墓参りに行っていました。ちょうどJR呉線のすぐ近くを歩いていたときに地震があって、最初はガタガタガタって音がして、「えらい呉線、音たてながら走ってくるな」と思っていたら、急に揺れが始まって、そこら辺の屋根の瓦が雨のように落ちてきたんです。私たちは高架の下に入って、立っておられんからしゃがんで揺れが収まるのを待ちました。

家の近くまで帰ってくると、近所の人に「大変よ」と言われたので、家を見たら、裏の石垣がいっぱい落ちてきて、八畳間がつぶれてたんです。部屋の中には石がごろごろしていて、庭には割れ目が一直線に入っていました。長女は自宅の2階にいたので、怪我も何もなかったんですが、おふくろは普段その八畳間にいたんですよね。ちょうど外に出ていて助かりました。

家の中の皿とか食器とかは何ともなくて、そのまんまなんですけど、ボール転がしたらコロコロという感じで、家全体が傾いているのが気持ち悪かったです。

## 地震で上に何かあったら下へ、高潮で下に何かあったら上へ

～隣接の7自治会で助け合い～

（呉市 50代 女性）

私らの地区はこういう急傾斜地なんですけど、下の地区は平地なので被害が全然なかったんです。被害がないところって、あんまり情報がないんですよね。ボランティアさんが下の地区で、「被害のひどい地域には、どこから行くんですか？」って聞いたときに、「知らん」って言われたそうなんです。ボランティアさんは「なんと変な街だな。冷たい街やな」って思ったみたいなんですけど、被害のあったところと、ないところでは、必死さが違っていて、下の方は「知らんわ」で済んでいたんですね。

それをすごく感じたので、地震の後で、自主防災組織を立ち上げるときに、私は「7自治会そろわんと自主防災組織は立ち上げない」って頑固に言いました。「一緒に立ち上げましょう」ってね。だって、下の地区は海が近くて、高潮が来た場合には浸かるんです。だから、高潮のときは、私らの地区へどうぞって言える仕組みを作りたかったんです。上で何かあったら下へ、下で何かあったら上へ、って7自治会の中で助け合いができればいいなと思って。

## 「ここにいるよ！」と笛をひと吹き

（栗原市 60代 男性）

地震で道路が割れて、運転していた軽トラックもろとも横転してしまい、何とかかんとか車からはい出して、一応安全かなと思うところに逃げ込んだんですが、余震が来て、また道路にひびが入ったんですね。

怖かったけれど車に戻り、靴を山用に履き替え、リュックを持って、車から離れた広いところへ避難したんです。山岳救助隊の隊員でもあるので、私のリュックにはいろいろなものが入っているんです。で、「さあ、どうするか」ですよね。歩いて山を越えたとしても、自分の住む地区も多分山が崩れているだろうし、山岳会では「何かあった時は動くな」というのが鉄則ですから、その場でじっと動かずに待っていました。

1時間ぐらい経ったころ、地元の人たちが見回りに来たらしく話し声が聞こえてきたのです。「おおい！」と呼んでも答えがないから、今度は笛を吹きました。すると、すぐに区長さんが来てくれて、「とにかく避難所に行きましょう」と。

笛というのは、200メーター、300メーター先まで聞こえますからね。持っていてほんとうに良かったなと思います。

## 縦揺れでストンと落ちた窓ガラス

（栗原市 80代 男性）

朝ご飯の支度をしている時に地震が起きて、湯立ったなべが飛んできて体にぶつかりました。飛び散ったお湯が首もとにかかりましたが、幸い首の長い服を着ていたので事なきを得ました。歳をとると、やっぱり若い人のようにパッっと体が動かないんですよね。

あの時、あたり一面、頭の裂けるような、ものすごい音がしました。「何が起きたんだろう」と思って、揺れが止まってから家の外へ出てみると、裏のほうが真っ赤に染まって見えました。山が崩れて、そこにあった杉の木が根もとから全部落っこちちゃって、赤い土がむき出しになっていたからなんです。

揺れ方も場所によって全部が全部一様じゃなかったみたいです。私のところはまさに直下型。いきなり縦にガタッと来て、上下に激しく揺れました。だから、窓ガラスは割れないで、戸を外すみたいに窓枠ごと全部ストン、ストンと下に落ちていました。不思議ですよね。

## 経験活かして事前準備

～すぐに役立った応急危険度判定用紙～

（栗原市 40代 男性 建築士）

役所の人たちも今までの経験から、地震の時には何をしなきゃいけないかというのがけっこうわかってきているんですね。

今回、被災した建物を調査して、余震などによる倒壊の危険性や外壁・窓ガラスの落下、付属設備の転倒などの危険性を判定する『応急危険度判定』のお手伝いをしたのですが、行政の方で、判定に使う緑と黄色と赤の紙をあらかじめ何枚も印刷して段ボールに詰めていたのです。

「地震なんてほんとうに来るかどうかわからない。そんなのは無駄な経費だ」と言った職員もいたということですが、担当課の人は、「これだけは用意しておいたほうがいいんだ」と言って、ゆずらなかったそうです。

結果的に、どこよりも早くとりかかることができたと評判になりました。その担当者に「動きが速かったですね」と言ったら、「経験者ですから」って笑っておられました。やっぱり事前の備えは大切だなと思いました。

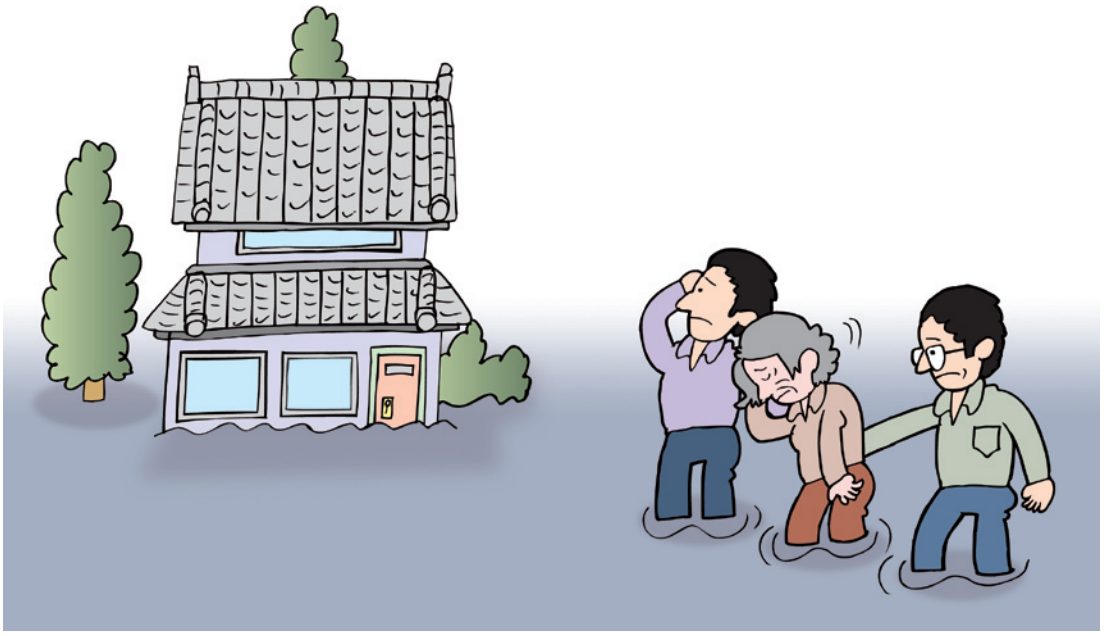
## ちょっとの手助けきっかけにみんなが動き出す

（呉市 70代 男性）

豪雨災害のときに、うちの下の家に土砂が「ダーッ」と流れこんだんですが、翌朝見ていても、家の人が土をどけようとしなかったんですね。息子二人とおふくろさんがいるのに、皆しょげてしもうとるんです。

私は、会社で働いていた頃、何がなんでもやっちゃると思った仕事を、一人でやり始めたら自然と「手伝いましょう」って来てくれた人がいたんです。そのことを思い出して、下の家の人も「わしが手伝う」って言わんと、こりゃ動かんぞと思ってね。

それで、「やろうや。今から土のけようや」って言ったら、その家の人も動き出しました。誰かがちょっと手助けしたら動き出すんですよね。災害の後というのは、いつもと違って誰も何にもしようとせんから、きっかけが必要なんだなと思いました。



## こういう時に避難させてええんかどうか

～難しい自治会長の立場～

（呉市 60代 男性）

土砂に流されて亡くなった方の中には、家の中にずっとおれば、被害にあってないかもしれない方がいるんですよね。自治会の相談役ともいろいろ話したんですが、こういう災害が起きる時に、避難させてええんかどうかの判断は難しいなと思うんです。自治会長から避難してくださいとか言うルールを作るわけにもいかんし、なかなか結論は出んのです。

避難場所もルートも決まっていますが、そのルートというのが、坂道で水がドードー流れて、石もたくさん流れるところなんです。そこから避難場所まで避難する間に、石に当たって倒れる可能性があるものですから、このあたりの判断を、ちょっと勉強せないかんなと思ったり、通報があっても個人の判断に頼るしかないかなと思ったりするんです。

# まるでドラマの水攻め

～天井まで数十センチでストップ～

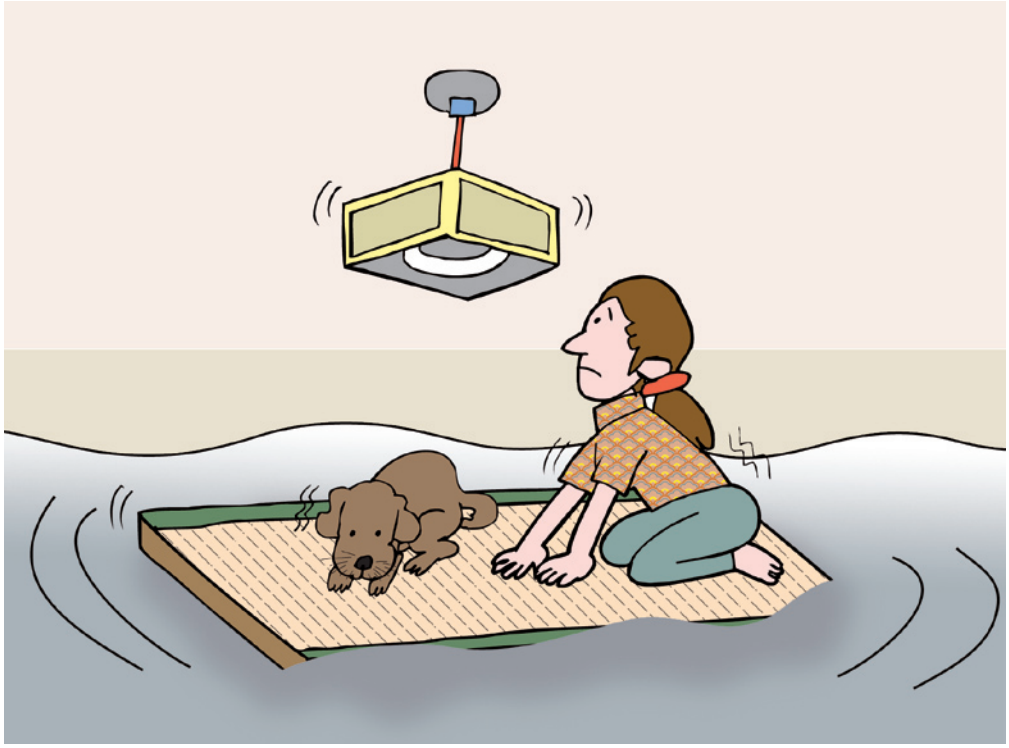
（宇部市 30代 女性）

うちは板間の上に畳を置いているようなつくりだったので、畳は浮いても下に落ちる心配はありませんでした。畳の上に自分と犬が乗っていました。まるで波乗りみたいに。

でも、どんどん畳が浮いて、だんだん天井が近くなってきたんです。ほんと、これ以上、水が来たら呼吸ができなくなると思いました。まるでドラマとかでよくある水責めみたいな感じでした。

昔の家だから天井が低いんですよ。しかも床を高くしている分、天井との間が狭いんです。「これ以上いったらどうしよう」って言っていると、天井まであと数十センチというところで、少し高潮の水の勢いが止まった感じになりました。

水が引くのがずいぶん遅いように思えました。ようやく落ち着いたところで、畳から下りて、バシャバシャと板の間になっている台所まで泳いで行ってね。家族全員、台所のテーブルの上で、水が引くまでじっとしていることにしたんです。



## 犬は冷蔵庫の上、ネコはタンスの上

（宇部市 60代 男性）

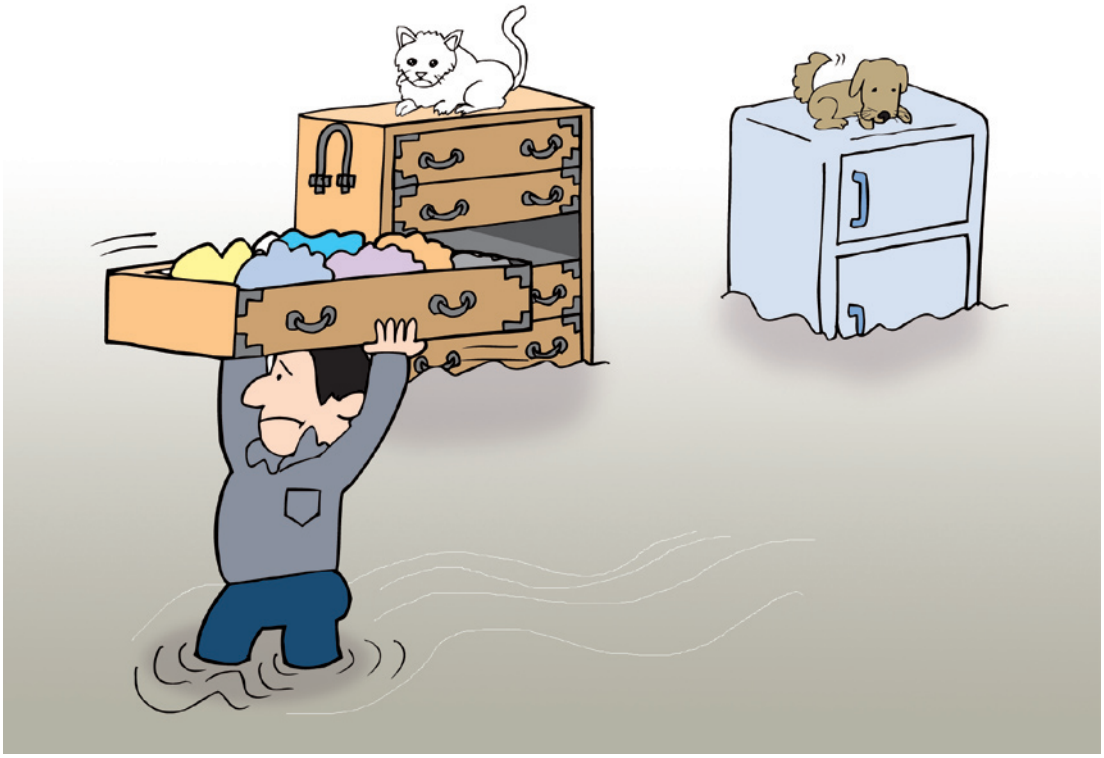
私の家から海まで、直線で2、3百メートルですかね。海のほうがちょっと高くなっています。あの日、家の中にダーッと水が入ってきた瞬間、車庫にある私の車がビーッと鳴り出しました。誰も乗っていないのに、勝手にビーッと鳴るし、バックミラーが開いたり閉じたりして、「亡霊か何かついたんかな」と、一瞬そう思いました。

うちは平屋で2階がありませんから、机の上へ上がろうとしたのですが、のぼれないんですよ。タンスや畳がブワーっとみんな浮いてきちゃって。

私は、家内の着物をぬらしちゃ大変と、必死で和ダンスの引き出しを抜いて高いところに上げました。見ると、犬は冷蔵庫の上、ネコはタンスの上に上がっていました。

家内がさかんに「逃げよう」と言いましたが、過去の経験から、こういう状況じゃ高潮の水に飲まれて流されてしまうと思い、家の少しでも高いところにいようと言い聞かせました。

もうほんと1、2分の間ですね。水の勢いというのはものすごく速いんです。



## 前日の注意呼びかけ記事も切迫感なし

～過去の経験に高をくくる～

（宇部市 50代 男性 記者）

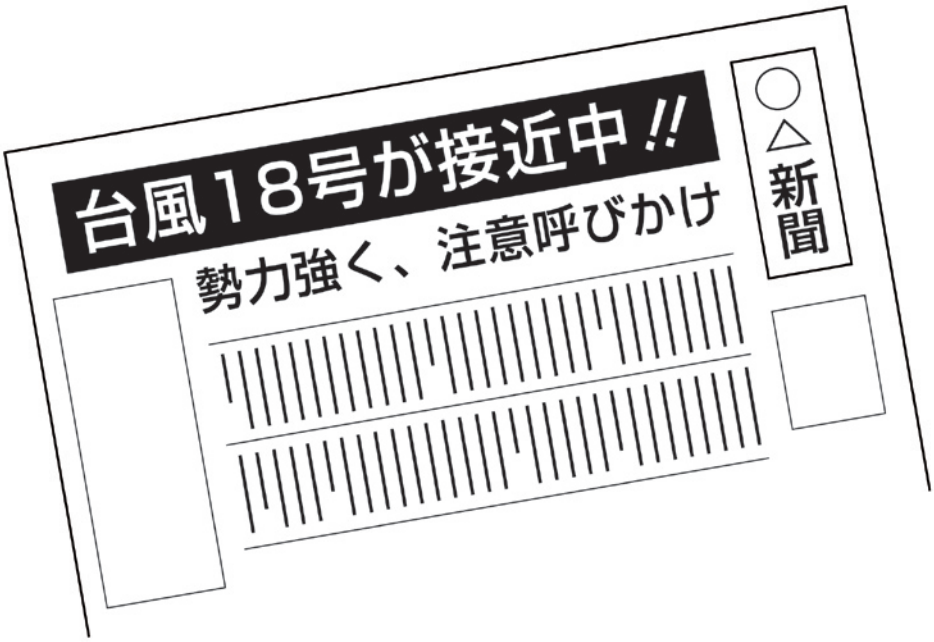
今、当時自分の書いた記事を読み返してみると、「台風18号が接近中です。勢力が非常に強いので注意しましょう」という主旨の内容となっています。

私たちは、今までもりんご台風*をはじめとして、いろいろな台風を経験していますからね。大きくても、直撃してもこの程度だろうというような、何となくそんな思いがあったんだろうと思うんです。

きっと、どこの被災者もそうなんですよね。「今までこのぐらいだったから」と自分なりの基準を作っちゃって、慌てることもない。私自身、そんなに大変なことになっているという認識がなかったから、入社間もない女性記者を現場に行かせたりすることができたんだと思います。彼女は軽自動車に乗って出かけて行きました。

無事に帰ってきたから良かったけれども、後から考えると、ぞっとする話です。それまで災害の真の怖さを知らないで過ごしていたというか、そういう反省は確かにありますね。

＊平成3年台風第19号は、青森のリンゴ農家が大きな被害を受けたことから、通称「リンゴ台風」と呼ばれています。



## 竹やぶの水止まったと思ったら、家の前に土石流

（防府市 60代 男性）

朝起きて見たときには、私の家の西側の竹やぶを水が流れていましたが、1時間も経たないうちに、その水が止まったんですよ。「おかしいな」と首をひねっていると、「家の前がおかしいよ！」と言う家内の声がしました。飛んで行くと、もう家の前は土石と水と砂でいっぱいで、家の中も敷居の高さまで埋まっていました。

東側の農道も一つの大きな川になって、水が流れていましたから、逃げようにも、足をすくわれそうでしたので、消防署へ電話をしたのですが、だれかが先に電話されよったらしくお話中で出ないんですよ。

そのうち、消防署の人が来てくれてね。「家は？」と言うから、「大変なことになってる。家内は足が悪いから、連れて出るのはどうしたらいいかと今考えよる」と言ったら、「私がおんぶして、大きな道路まで出ましょう。おたくは後をついてきてください」ということで、家はがらんとしたまま、避難しました。

今回みたいに、土石と流木がみんな流れ出たということは今まで経験したことがないし、僕らよりはるかに歳とった人でも、「こんな経験したことないぞ」 というようなことでね。だから、家内を含めて家族がケガをしなかった、無事に逃げられたというのが一番の救いだったですね。

## 自分の捜索願いに驚く

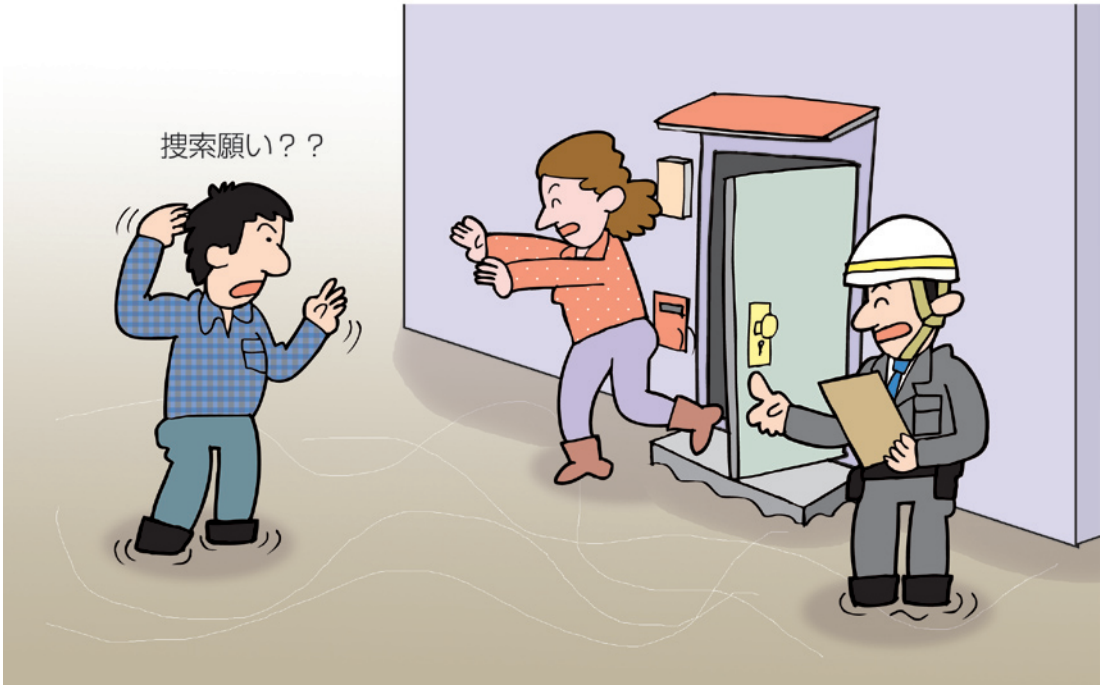
（防府市 60代 男性）

私は自治会の役員で、民生委員もやっています。公会堂が避難場所になっているので、鍵をあけてもらって、避難されるという近所の3、4軒の方の手配をしてから、ひとり暮らしの方がいる下の地区の見回りに行きました。

途中、神社の西側に細い谷川があるんですが、それがもう水が道路を越えるぐらいの勢いで流れていたんです。近所の方に、「こんな状態だから何とかしてくれ」と言われました。一応、下のほうも確認しなければと思いましたが、もう長靴では通れないほどになっていましたので、この状態を連絡せねばと、ぐるりと回って、公会堂に戻ってきたんです。

広場に入った途端に、谷川が切れたのか、ものすごい勢いで水が流れてきました。いったいどうなっているのか確かめようとしましたが、水の勢いがすごくて、どうにも動けないんですよ。みるみるうちに、この近所もみんな水浸しになってしまったのです。

何とか家に帰ると、私の捜索願が出ておりました。うちの女房は、てっきり私が災害に巻き込まれたと思ったんですね。警察の方にお詫びを言って話がついたんですけど、家族との連絡もおろそかにしてはいけないなと反省しました。



# ひとりに畳1枚の支給に喜ぶ

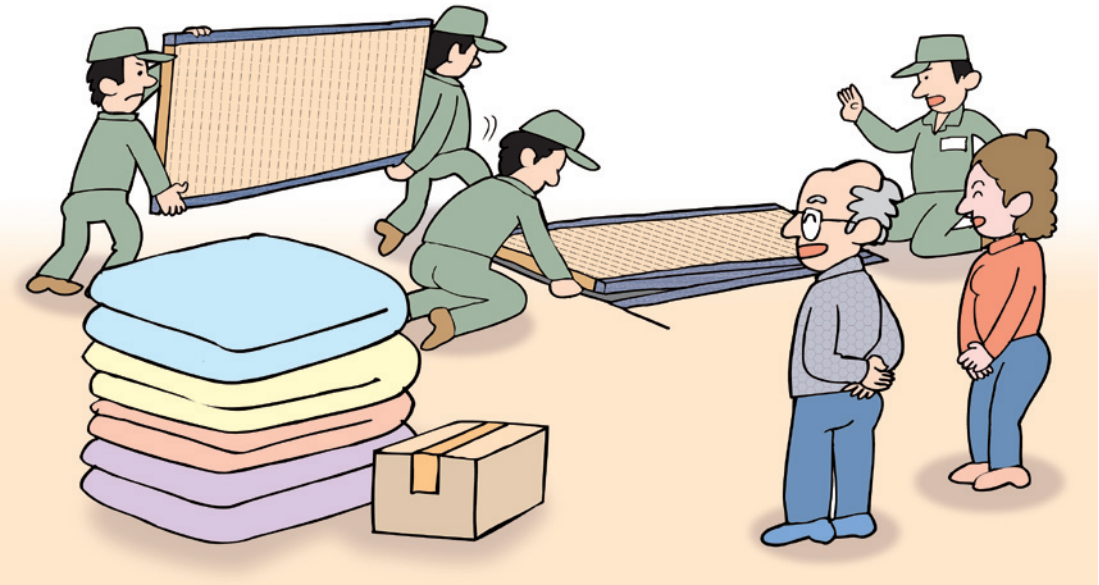
～避難先で郷里を案ずる毎日～

（伊達市 60代 男性）

避難勧告が出て、とりあえず親戚などに避難した人たちも、2、3日すると戻ってくるので、最終的には避難所も9ヶ所にまで増えました。私は自治会長を束ねる役目でもありましたので、避難所1ヶ所に1人ずつ責任者を置いて、その人たちの意見を集めては、行政と連絡を取り合っていました。

31日の午後1時ごろに噴火したと聞き、「これで家に帰れるぞ」と思ったのですが、まだ危険だということで、立ち入りも許されず、避難生活は16日間に及びました。自分たちの地区がどのような状態かが気がかりで、自衛隊が空から撮った映像をテレビで食い入るように見つめていましたが、虫眼鏡で見ないとわからないほど小さくて、はっきりしないのです。空き家にしているから不安でね。もっと情報が欲しいと切に思いました。

唯一喜んだのは、3日目に自衛隊が厚さ3センチくらいの畳を運んできてくれて、1人に対して1枚ずつ交付されたことです。あれにはみんな喜びましたね。それまで板間に毛布1枚か2枚で寝ていたわけで、肌触りだって違うし、やっぱり日本人は畳に愛着がありますから、畳に寝られるということだけで感動しました。



## 避難所の自治会を組織

～ご近所の小グループの話し合いでルール作り～

（壮瞥町 60代 男性）

避難勧告が出るということで、役場に話を聞きにいったところ、できれば避難所の自治会を組織してほしいという要望がありましたので、各自治会の会長さんなどに呼びかけて避難所自治会を組織しました。

いざ避難所での生活が始まると、上げ膳据え膳のような感じで、生活が単調なんです。例えば炊き出しがあると、ちょうど中学校は春休みなもんですから、先生方が来て、全部配膳してくれるんですよね。で、私たちはほんとお客さんなんです。

被災した人はひまで時間をもてあましているんですね。ボランティアとかで支援してくれるのはありがたいのですが、仕事をとられては、畳を見るしかないんです。

それではまずいんでないかと。これから何日続くかわからん避難所生活を自主的に運営しようと、共通の約束をみんなで確認しあいました。それから、避難所にも、畳が入っていましたから、地区ごとで列を作って、さらにその中に小グループをたくさん作りました。

全体で話して物事を進めるのは大変なんですよね。けれども、小グループ単位で話し合いをすると、隣近所同士なものですから、うまくいったなと思います。

# 助かった1日前の避難勧告の事前情報

～道路規制前に移動終える～

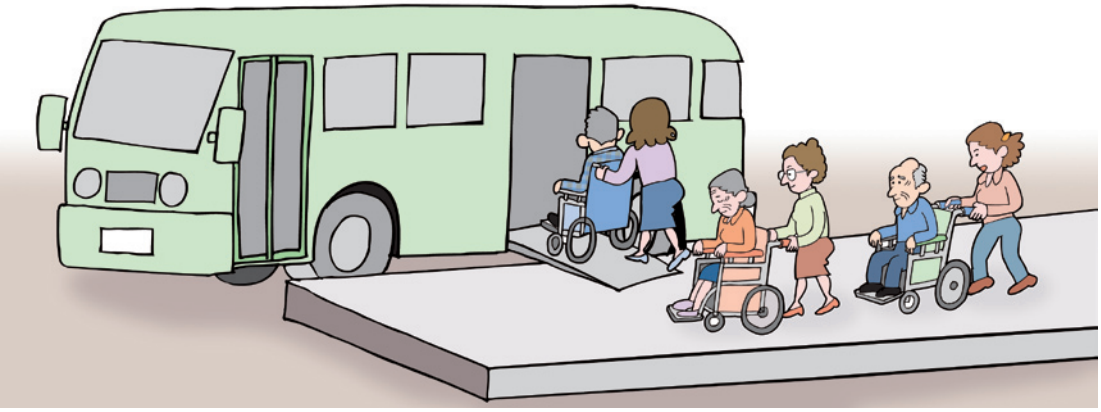
（伊達市 60代 男性）

昼すぎに市の高齢福祉課から「避難勧告が出される可能性がある」というお電話をいただき、避難先はどこにしたいかという問い合わせがありましたので、「サポートセンターひまわりさんにできれば避難したい」というお話をしました。

その日の3時か4時ごろ、「では夕食後、避難してください」という連絡がありました。で、通常6時の夕食を5時に出し、6時に施設を出るという計画を立て、関係各所に連絡をしました。それからは大慌てで、まず職員の非常招集をかけた後、ひまわりさんに行って、どこの場所を使わせていただけるのかの確認をしたりしました。

午後6時に、いろんな方の応援を得て、ショートステイの6名を含む66名の避難を開始しました。避難勧告前なので、まだいつもの交通量でしたが、障害を持たれている方がほとんどで、車いすやストレッチャー等を使っての輸送となりますので、車で15分の距離を2時間半かかりました。到着してからは、すぐに部屋割りや運んでいった寝具等の振り分けを行いました。

町全体に避難勧告が出てからは道路が混み合い、職員が荷物を取りに行くだけで4時間ぐらいかかりました。1日早く避難の情報をいただいて、非常に助かりました。



## 体育館の避難所は問題山積

**～高齢者に苦痛な和式トイレ、消灯すると真っ暗～**

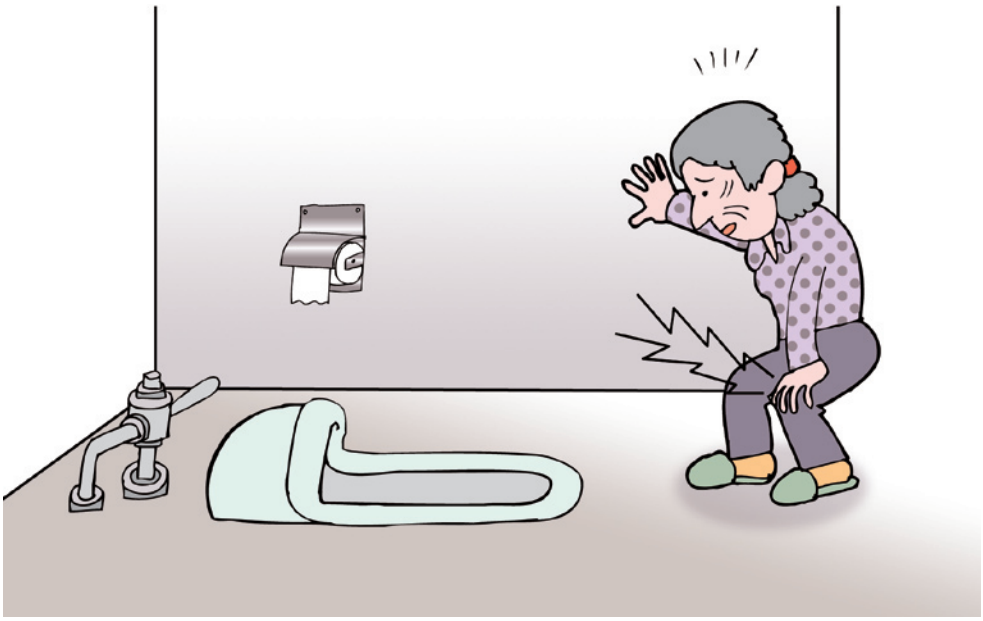
（壮瞥町 60代 男性）

わたしたちの町は高齢者が結構多くて、避難所で生活する上で一番困るのは何かというと、トイレなんですよ。狭いし、まだ当時は和式でしたから、ひざが痛くて曲がらないとかいうお年寄りがたくさんいました。トイレを洋式にといっても、すぐできるわけでないから、和式に簡易式の洋式トイレをかぶせてしのぎました。

それから後で洗濯機とか乾燥機を設置してくれたんですけれども、洗濯しても干し場がないということで、ちょうど春休みだったもんですから、学校の教室を干し場に開放してもらえないかと頼んだりもしました。

何と言っても体育館が避難所なもんですから、電気を消すと真っ暗で、点けると真昼と同じになってしまうんです。だから、電気を消しても、どっかの壁とかを照らす間接照明を用意して、安眠できるような環境をつくってほしいとかいう要望も出しました。

とにかく、体育館での生活にはいろいろ問題があることが、暮らしてみてよくわかりました。



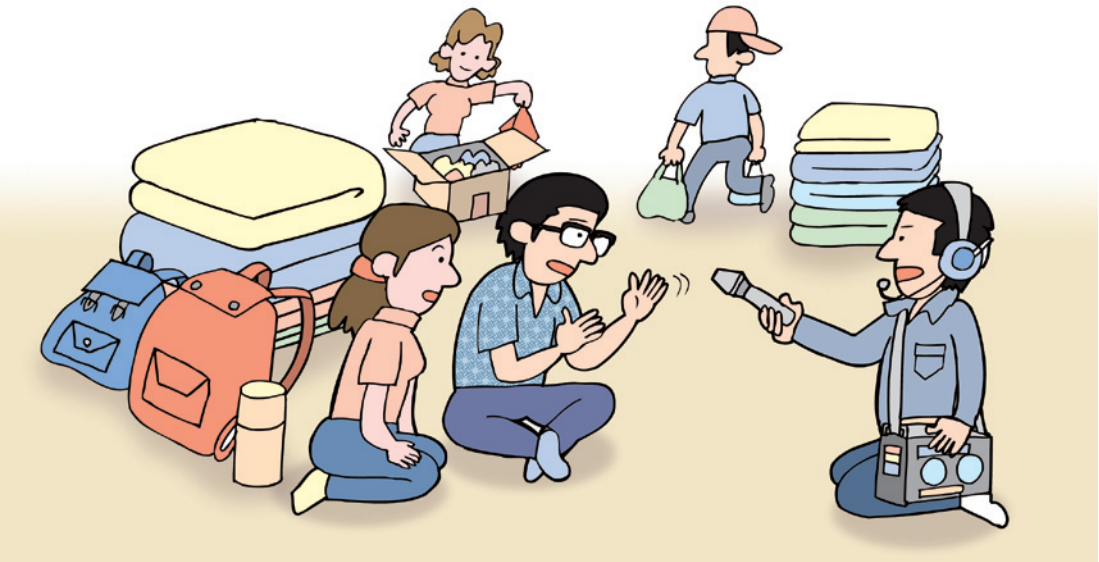
## 人の目が負担だった避難所生活

（栗原市 60代 男性）

私たちが避難したところは、役場の向かい側にある多目的建物でした。54畳の日本間が３つに仕切られて、寝るところと食べるところと、あとは日中、たむろっているというのはおかしいんですが、ロビーみたいなところがありました。寝る場合も、いびきがうるさくて迷惑だという人は、体育館のほうの板の間に仕切りをつけて、そっちのほうで盛大にいびきをかいてもらったという具合。

避難所生活というと、人の目のほうが多いんですよね。ボランティアの方々とか市や県の職員とか、われわれよりかえってサポートの人たちのほうが多いんです。やっぱり、人の目が自分たちにとってはいちばん疲れたなという感じです。

でも、ひと山全体が私たちの地区なので、全員仲間なんですよ。みんなでそのまま下りてきたもんですから、チームワークがとれていますので、他人とはいえ、気が楽でした。報道陣とかに囲まれるほうがつらかったというか、疲れましたね。



# ゲーム機、気になり、自宅に向かう

～ビー玉転がし異変知る～

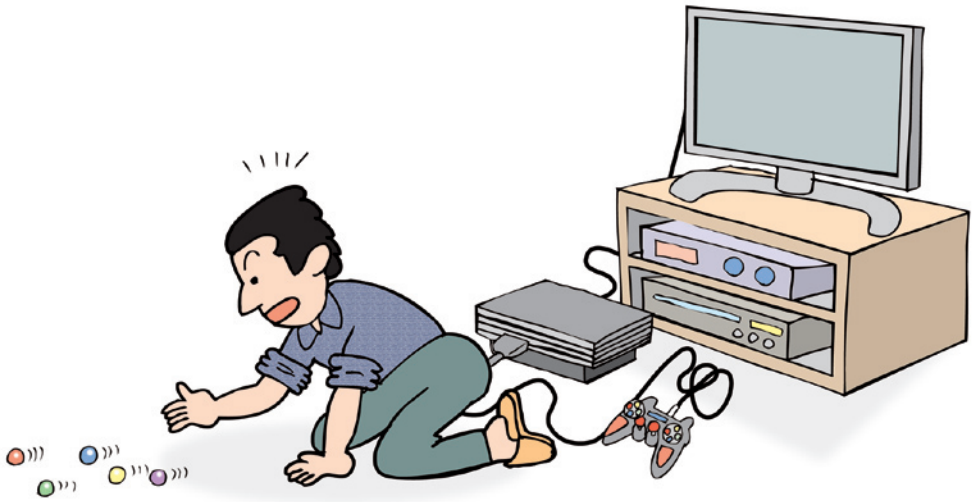
（米子市 20代 男性 自動車学校職員）

ちょっと恥ずかしい話ですが、当時僕は就職して初めてもらったお金でかなり高いゲーム機を買っていまして、職場で地震の復旧作業をしている間も、「これはやばい。潰されているかも」と心配でたまりませんでした。そのゲーム機は社宅の僕の部屋のテレビの前に置いてあり、テレビ台が古くてグラグラしていたからです。

「社宅のこともあるけん、ちょっと1回戻ってこい」って誰かに言われて、これ幸いに家に向かいました。ドアがなかなか開かずにあせりましたが、「入らんとどうしようもない」と全力でドアを開けました。運良くテレビは落ちてなくて、ゲーム機は無事でした。

しばらく部屋の中で壊れたものがないか探していると、気持ちが悪いというか何だか感覚が変なんです。「おかしいな、まさかな」と思ってビー玉を床に置いたら、コロコロコロって転がっていきました。地震のせいで床が斜めになっていたんです。

結婚した後でも同じ社宅に住んでいますが、今は転倒防止用ワイヤーでテレビが前に倒れないようにしていますし、子どももできたので、高い所には重たいものや硬いものは置いていません。



# 段ボールの切れ端片手に近所の安否確認

（鳥取県日野町 70代 男性）

隣町で仕事をしていて、「何だかゴロゴロいうな」と思っていたら、地震でした。気持ちを落ち着かせようとタバコを数本吸って、急いでやりかけの仕事を終えて、車で町に向かったけれど、途中の石垣が崩れて通れず、車を置いたまま歩いて帰りました。

家に戻ってから、家内に頼まれて保育園にいる孫を引き取り、小学校に連れて行って、午後7時過ぎまで預かってもらって、小学生の孫と一緒に家に連れて帰りました。

午後の8時ごろ、地域の皆さんがどこに避難しているか各戸を回って安否確認をしようとしたら、書きとめる紙がなくてね。家の中はガタガタで入れないし、結局、近くの酒屋さんから段ボールをもらって来て、それを破って、家内と2人、上から下まで回りました。

その晩は一睡もせずに、区域内を巡視して周りましたが、それは消防団のOBとして自発的にやったことです。災害が発生した時に行方不明の人が出ないようにすることが一番大事ですからね。

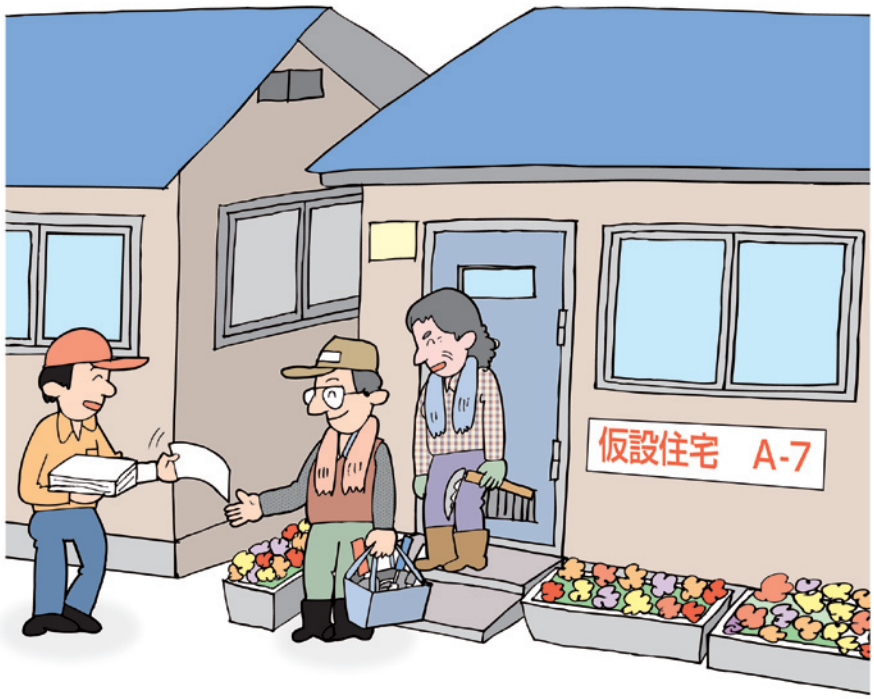
# 仮設のご近所がシルバー人材仲間に

（鳥取県日野町 70代 男性）

地震後しばらくして、仮設住宅に入りました。自分が昔役場におった関係で、「自治会長みたいなことをしとうせ」ということで、連絡用のビラを配ったり、みんなの意見を聞いたりという役目をしていました。

良かったのは、町中のものだけじゃなくて、農業をやっている生産者も入り混じって、仮設に入ったことですね。町のものだけじゃできないことも農家の人と一緒にやればわけなくできる。そういう気持ちで仲良く過ごせました。おかげで、仮設で知り合った人たちとは、シルバー人材センターの仲間として、今でも一緒に働いています。

ただ、新築して家に帰ったけれど、タンスに転倒防止のベルトをつけているかっていうと、悲しいかな、つけてない人が多いのです。うちはちゃんと転倒防止をしているし、あれから10年になりますが、毎年ナップサックの中のものを取り替え、それを背負って訓練に参加しています。地震の恐ろしさを忘れてはいけないと思いますよ。



## 家のことは二の次、消防団活動

（鳥取県南部町 40代 男性 消防団員）

事務所が禁煙になっていたので、外でタバコを吸っている時に、グラッと揺れました。池の水が外に溢れ出るぐらいの強い揺れで、すぐには歩き出すこともできませんでした。

食堂にかけてあった賞状とかも全部下に落ちて、「これはえらいことや」と。それでも全員無事が確認できたので、「一旦帰って、家を確認してきてください」ということになりました。

家に戻ると、隣の家のひさしが落ちたり、道の奥の方の石垣が崩れたりはしていましたが、思ったほどの被害はなく、会社に無事だったことを報告しました。

私は消防団員ですから、分団の役割が「給水」ということになって、井戸から給水ができるように工事したり、自衛隊の車に乗って水を配ったりしていました。

夜も消防車のエンジンをかけたままで明かりをとり、食事はおにぎり程度で、夜中に家に帰って寝るだけという毎日でした。家のことは何もできませんでしたが、消防団員としての責任は果たせたかなと思っています。

# 教習所のマイクロバスで温泉送迎

～できる範囲で地域貢献～

（米子市 60代 男性 自動車学校職員）

地震後1週間以内だったと思いますが、山奥の町で被災されたひとり暮らしのお年寄りたちが公民館に避難したのはいいけれど、お風呂も入れないし炊き出しで生活しているということを聞きました。

当時、皆生温泉旅館組合が温泉施設を無料開放したり、炊き出しをしたりされていたのですが、そのお年寄りたちを皆生温泉へ連れて行って、お風呂へ入れてあげて、あったかい食事をしてもらうというボランティアに協力してもらえないかという依頼がきたのです。

トップと、「こういう依頼が来ているけど、バスを出していいですか」っていう話をしまして、「誰が運転する?」、「いや僕がします」っていうことで、2日間ほど私がマイクロバスを運転してお年寄りの送り迎えをやりました。

ゆっくりお風呂に入って、座敷で用意された食事をとったお年寄りたちは、とても喜んでおられました。

## すごかった6年生

～下級生守り、先生励ます～

（鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者）

校庭の向かい側にある岩山が、地震とともにガラガラと音を立てて崩れ、大きな石が校庭まで飛んできました。石が校庭に落ちると砂ぼこりがバーッと舞い上がり、まるで学校の方にどんどん向かってくるような感じになりました。

それを見ていた1年生、2年生が泣き出したので、養護の先生に対応をお願いしようと思っていると、6年生の女子がその泣きじゃくっている子を、「大丈夫、大丈夫」って言いながら抱えてやっていたのです。

6年生といえばまだ子どもですわね。それが自発的に下級生をかばい、勇気づけている姿に感動しました。

全校生徒が126人ぐらいの小さな学校で、1学年1クラス。運動会とか掃除とかもみんな縦割りで活動してますし、毎日の登下校時には6年生が先頭と最後に立って、下級生と一緒に学校に通っています。そういうことが、いざという場面で生かされたんだなっていう気持ちですね。

## 学校中に明かりつけ、地域の目印に

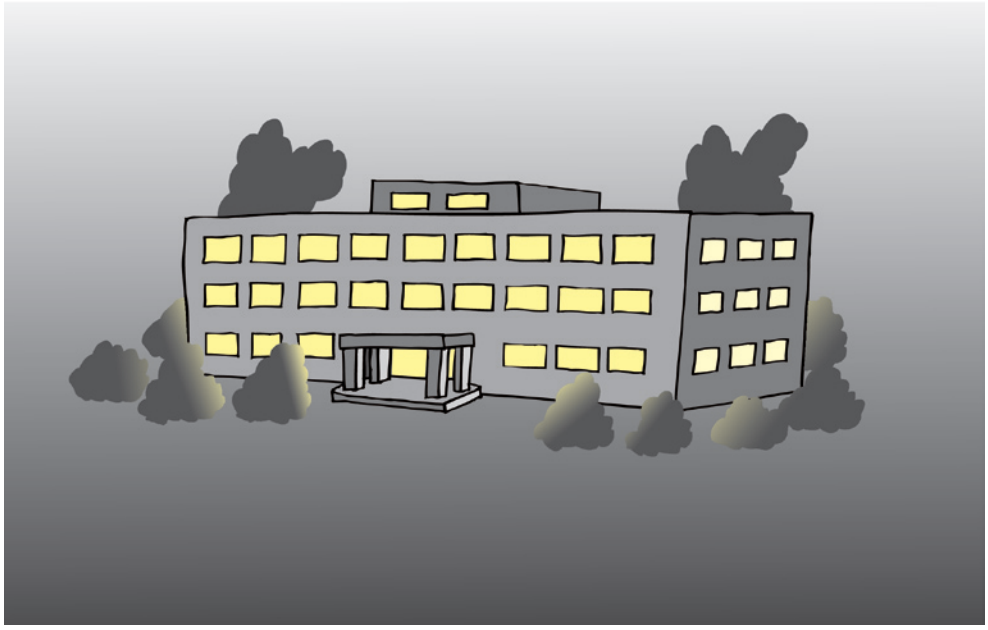
（鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者）

地震後に校庭を開放しました。周辺の人が避難してきた時のための仮設トイレを設置してもらい、校庭を避難場所として使ってもらうことになったのです。校庭はボランティアの休憩場所や資材置き場にもなりました。

車に乗って、「今夜寝させてくれ」という人がやってきましたし、「家族が避難所におると聞いたけれど、ここじゃありませんか?」と、安否確認にくる人もいました。

そこで、一晩中、3階建ての校舎の全部の教室に電気をつけておくことにしました。明かりをつけておけば、「職員がおるんだよ」ということになるし、「誰でも来られた方には対応しますよ」というメッセージを伝えようということでね。

やっぱり暗くしていたら近所の人も来られないですよね。道路も大変な状況になっていて、どこに行っていいか分からない人たちの「灯台」になれたらという気持ちでした。



# 友だちにはビデオメッセージ

～休校中に児童を訪問～

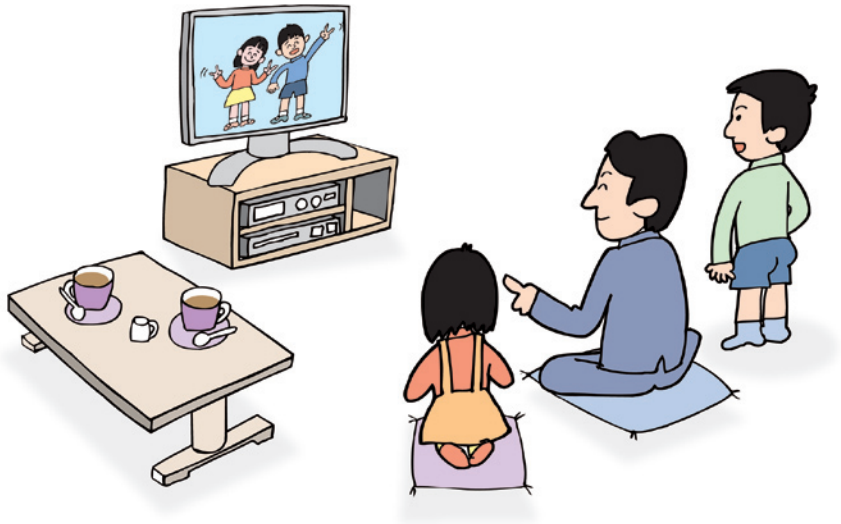
（鳥取県日野町 60代 女性 学校関係者）

地震が起きたのが金曜日で、次の日の土曜日には家庭訪問をしました。学用品を置いたまま家に帰っていますからそれを届けて、家庭がどんな様子なのかを聞き、通学路の点検をしました。

臨時休校の間は、毎日のように電話で「今、どんなことをしてる?」とか「どんな気持ち?」「お風呂に入れてる?」「心配なことはない?」というふうなことを聞きました。なんせ生徒が少ないですからね。家庭訪問も毎日のようにして、時には勉強してる子と一緒に課題を考えたりもしました。

それから、「友達へメッセージを持って行こう」ということで、子ども達の様子をビデオに収めて、みんなが元気にしているよということを知らせて回りました。

阪神・淡路大震災で心のケアが問題になりましたから、先生方もそのことを意識して行動していたと思います。



# おじいちゃんと一緒に笑顔の女児

～ポスターで地域励ます～

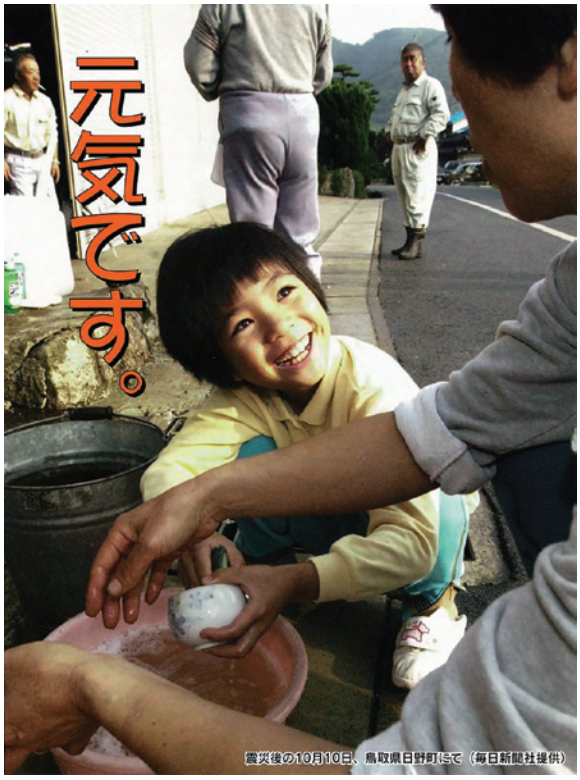
（鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者）

学校再開の日、子どもが教室に来たときに誰もおらんじゃ寂しいもんだから、担任がおるようにしました。「校門とか通学路はほかの教員でやれるけど、教室には担任がおらないかん。子どもにとって我が家だよ」と言ってね。

1週間ぐらいは特に集団遊びを入れましたが、子どもたちは「校庭が割れる夢をみていけん。自分がその底に落ちていくような夢をみる」などと言っていました。きっと、近くの岩山が崩れたときの衝撃がすごかったんだと思います。

「不安だ、不安だ」って言いよる子どもたちには、カウンセラーの方や地域の人たちから声をかけてもらい、少しずつ元気を取り戻していきました。

そんな中、2年生の女の子がおじいさんと一緒に地域ボランティアで茶碗を洗っとる写真が報道され、それがポスターになって、街のいろいろなところに貼られるようになりました。女の子の笑顔がとても自然でね。子どもが安心してその地域の中で生活できていることが伝わってきて、すごく感動して、元気をもらったような気がしました。




鳥取県ポスターより

# 化粧鏡の前で大揺れ

～割れずにけがせず良かった～

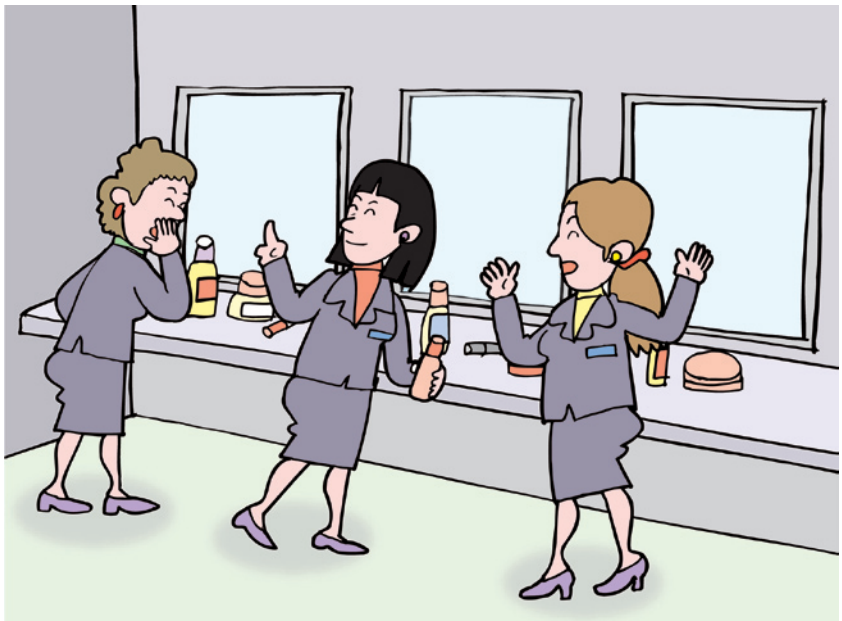
（鳥取県南部町 50代 女性 百貨店職員）

昼休憩が終わるころ、職員用の化粧室の大きな鏡の前でみんなズラッと並んで化粧直しをしている最中にグラッと来ました。「そんなたいしたことはないだろう」と一瞬思ったんですけれど、その後にすぐ大きいのがグラグラっと来たので、動くこともできずにしゃがみこんで、女性ばっかりですから、ただただキャーキャー騒ぐだけでした。

落ち着いてから自分の持ち場の事務所に入ると、立て掛けてあった鏡がひっくり返って割れていたので、そのときに初めて「さっきの鏡が割れなくてよかったな」と思いました。

あれが全部割れてこちら側に倒れていたら、きっと大変なケガをしただろうということで、みんなで「よかったね」っていう話をしました。

当時店内は、お昼時でそれほど混んでいなかったこともありますが、建物の中の方が安全だという意識がお客さんにも従業員にもあって、大した混乱もなかったことは幸いでした。



## 車がみんなでダンスを踊っているよう

（米子市 60代 男性 自動車学校職員）

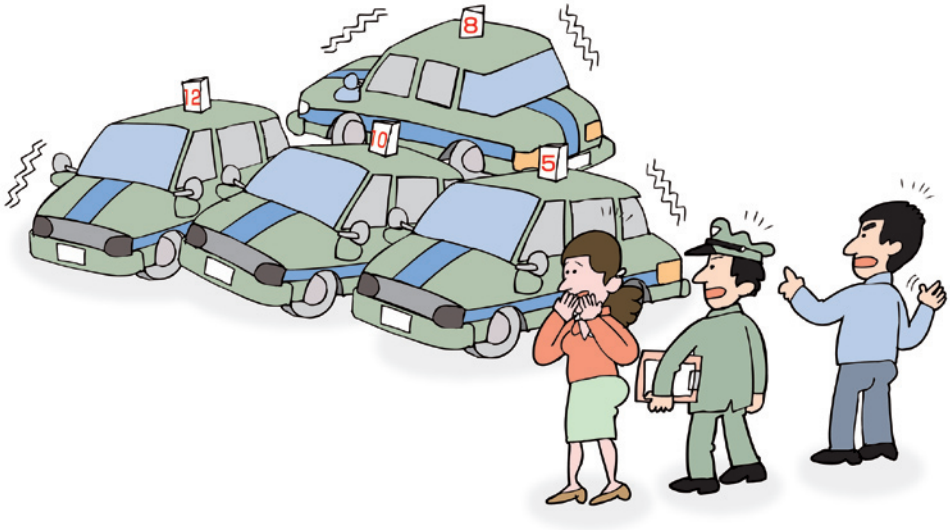
ドーンと来たのは、午後1時半から始まる教習の少し前、教習車の横に立ってお客さんに声をかけながらお迎えしている時でした。

それこそ本当に地面が波を打って、そこらへんにある車がみんなダンスを踊っているような感じで揺れていました。その光景は、10年経った今も鮮明に頭に残っています。

その後で私がどう行動したかは良く覚えていませんが、本校舎の前の教習コースに生徒さんに並んでもらって、職員が手分けして「校舎の中に残っていらっしゃる方はいませんか」と、お手洗いとかいろんなところを回って声をかけていきました。

その日の教習は一切中止ということにしましたが、途中でやめると受けたことにならない初心者講習だけは、最後までやりました。

急きょ引き返して来た送迎バスの運転手も、「川が揺れるのを初めて見た」と興奮気味に話していました。とにかくものすごい地震だったけど、校長からてきぱきと指示が出て、生徒さん全員をバスで家まで送り届けることができたことは良かったなと思います。



# Yシャツ姿でつるはし、スコップ

～一気に仮復旧し、翌日営業再開～

（米子市 60代 男性 自動車学校職員）

その日のうちに早急に復旧しようということで、男性陣がまずつるはしやスコップを持って、液状化*でめくれた教習コースの表面のアスファルト*を剥がす作業を始めました。

「え、つるはしってどう使うんだ」っていう人がほとんどでしたけど、教え合ったりするヒマもないから、「とにかく掘りなさい」ということでね、みんな懸命にやりました。

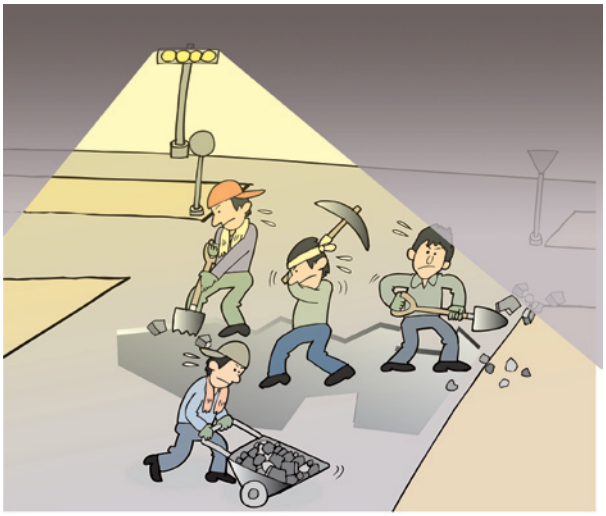
幸いに学校の方に舗装用の石が残っていましたので、掘ったところにその砕石を入れて、それ用の機具もありませんから、教習所にある重い大型車とかで踏み固めました。

早めにアスファルト業者に電話をして、「今日出してもらえるか」って言ったら、「出せる」と。「遅くなってもいいか」って言ったら「今日は1日かかってもやる」って言うけん、「じゃあ頼みます」っていうことでね。その日のうちにアスファルトを持ってきてもらい、舗装を終えることができました。

10月と言ったら日が短いですからね、暗くなってからは照明をつけて作業をしました。その甲斐あって、あくる日からもう営業を再開できたのです。

＊液状化とは、地震の際に地下水位の高い砂地盤が、振動により液体状になる現象のこと。

＊アスファルトとは、石油精製の際に残留物として得られる黒色の固体または半固体物質のこと。砂利と一緒に混ぜて道路の舗装に使われます。



# 博多駅前は一面の泥の海

～通勤客は靴を片手に、水の中を歩く～

(福岡県大野城市 70代 男性 タクシー運転手)

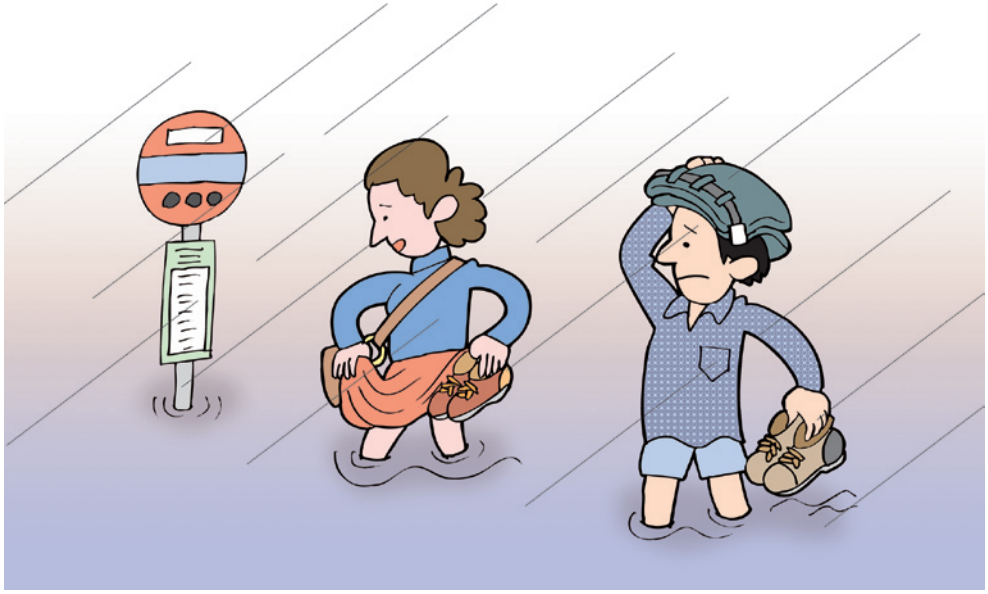
あの日の朝6時ごろ、「雨雲が異常に黒いですね」なんて、お客さんと話をしていたのを覚えています。それから雨がだんだん激しくなっていきました。

私らタクシー運転手にとっては、急に雨や雪が降ってきた時が一番の稼ぎどきですからね。「えらく降りよるな」と思いながらも、あちこちに車を走らせていました。

しばらくして博多駅の方へ行くと、あたり一面茶色の濁った水で覆い尽くされ、まるで海のようになっていました。

ちょうど通勤の時間帯だったので、タクシー乗り場にはサラリーマンや学生さんたちが長い列をつくっていました。電車もストップしてしまい、みんなそこから早く逃げ出したいと思っていたのだと思います。でも、車が列の近くを通れば、それが大きな波になってザブリと水がかかってしまいます。かえって並んでいる人たちに迷惑をかけることになるし、自分の車もこれ以上進んでは危険だと判断して、引き返しました。

中には、脱いだズボンを頭の上に載せ、靴を片手に、ハダシで道路を渡っている男性もいました。靴を濡らしたくないのは良くわかるけど、泥水はバイ菌だらけですからね、もし足でも切ったら大変だなと思いました。



# アクセル踏みつづけ、必死の運転

～車はマフラーに水が入ったらおしまい～

（福岡市 50代 男性 タクシー運転手）

空港通りを行くと、博多駅前は大雨のために既に『通行止め』となっていました。「やばいな」とは思ったけれど、空港まで人を迎えに行くことになっていたので、違うルートで行くことにしました。

車の心臓部は電気で動くコンピューターのようなものですから、水が入ったらおしまいなんですよね。万一、マフラー*から水が入ったら、車はすぐにストップしてしまいます。

だから、アクセル*ペダルを離さずに踏み続け、クラッチ*で調整をとるというやり方で、タイヤの半分ぐらいまで水に浸かった道路を運転してゆきました。ちょっとでもブレーキを踏んだら終わりですからね。もう、必死ですよ。

でも、これはマニュアル車(手動運転)だったからできたことで、オートマチック車(自動運転)が主流の今では、そういうやり方は通用しません。構造的にできませんからね。

だから、普段から水が溜まりやすい道路かどうかといったことを頭に入れておき、少しでも危険を感じたら、引き返す勇気も必要だと思います。

＊アクセルとは、自動車の、足で踏んで速度を調節する装置(加速機)のこと。
＊マフラーとは、オートバイ・自動車などの消音装置のこと。
＊クラッチとは、エンジンの回転する力をタイヤへ伝えるのか、伝えないのかを選択する装置のこと。

# 大雨の中の運転はプロでも命がけ

～経験と判断で身を守る～

（福岡県大野城市 70代 男性 タクシー運転手）

大雨が降っている時の運転は、プロの私たちでさえ命がけです。特に夜の運転は、ヘッドライトの光が雨に当たってはね返されてしまうので、先が全然見えなくなってしまいます。そういう時は前を行く車のテールライトを頼るほかありません。

それに、ワイパーで処理しきれないほどの激しい雨になると、一瞬、前が見えなくなってしまいます。そんな時、驚いて急にブレーキを踏んでしまいがちですが、あとからくる車が追突したりしてとても危険です。フロントガラスに水をはじく撥水（はっすい）処理をしておくと、雨がストンと下に落ちて見えやすくなるので、できればそうしておくと良いですね。

以前、高速バスが自分の車の横を通った途端にものすごい水しぶきがかかり、一瞬前が見えなくなって怖い思いをした経験もあります。

だから、「雨が降っている時はスピードを出さない」、「道路に水が溜まってきたら、自分の目でセンターラインの白い線が確認できなければ前には進まない」、ということを心がけて運転するようにしています。

## 前の晩「おかしいね」と言いながら いつものように就寝

（清須市 60代 女性）

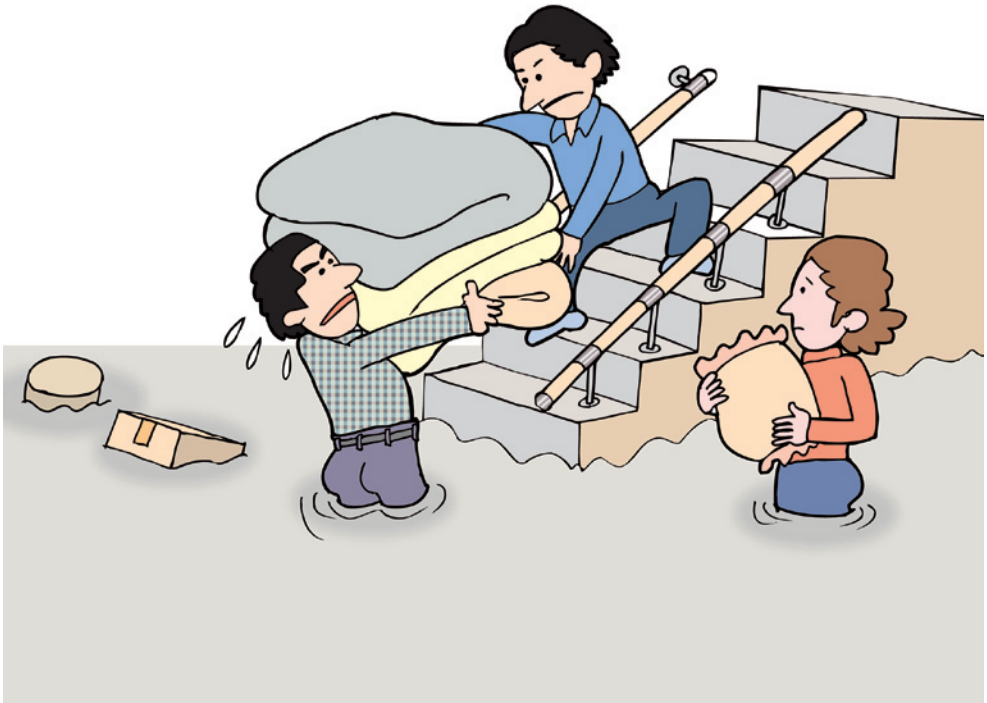
あの日の朝、新聞を取りに行った主人に、「玄関まで水が来ているぞ」と言われ、飛び起きました。私たち夫婦が1階で、80代のおばあさんと息子が2階で寝ていました。

水はみるみるうちに増えてきました。

バタバタしているのに気づいた息子が下りてきたので、「早く荷物を上に運んで!」と言って、布団とか着替えとか、目の前のものをほとんど2階に上げました。仏壇は気がつくのが遅れて、水に浸かっちゃいましたけれどね。

前の晩、雨の音にまじって何か聞こえた気がして戸を開けると、北の方に市の広報車みたいなのが見えました。うちの周りは排水が悪く、もうその時点で道路に水がたまっていたせいかこっちまでは来なくて、「あ、やっぱりなんか回っているよ」って感じでした。

ニュースでも言っていたし、雨がすごくて、「おかしいね、なんかすごいね」って話をしていたのに、堤防が切れるなんて想像もしていなかったので、いつものように寝てしまったんです。



## おばあさんが備えておいた缶詰で助かる

（清須市 60代 女性）

うちの玄関は道路から1メートルぐらいの高さにあるんですけど、気がついたらもう玄関の入口まで水が来ていました。で、「外に行くのは、やめた方がいい」ということになり、2階に避難しました。

年寄りは準備がいいんですね。2階のおばあさんの部屋には缶詰などの保存食がいっぱいありました。それに、避難する際に米ビツから水に浸かっていない上の方のお米だけをかき出して運んでおいたので、「今、まだ大丈夫だから」って、すぐにガスでご飯を炊いて、おにぎりをたくさん作りました。

前の日に買ってあった揚げ物とかもあって、食べ物には苦労しませんでした。ご近所の皆さんに悪いなと思ったぐらいです。

やっぱり万一の時に備えて食料を確保しておくことは、必要なんですね。

# 水害はドロの災害

～後始末に四苦八苦～

（清須市 60代 女性）

水害っていうのは水だけが来ると思っていたのだけれど、泥が来るんですよ。これは予想外でした。まさにヘドロですね。

水が引いたあとには、家の障子の桟にびっしり泥がついていて、拭いてもあとからあとから茶色い水が浮き出てくるんです。木の目の中まで泥水がしみ込んでいるから、乾くとまた泥が噴いてきて、拭くとぞうきんが茶色になりました。

水が引いて、皆さん家の前へ家財道具を出したでしょ。道路っていう道路の両側がゴミの山で、車が1台やっと通れるぐらいになっていました。当時、電化製品は水にぬれるとダメになると思い込んでいたので、水で洗えば使えるものまで捨てていました。生活の臭いがする道具がゴミとなり、山と積まれている光景を見るのはしのびなかったです。

乾いたら乾いたで、今度はほこりと粉塵。風が吹くと砂ぼこりがブワーッと立って、マスクをしないと咳き込んだり、気持ちが悪くなったりするほどでした。水害って本当に後が大変なんです。

## 女性が一番困ったのはトイレ

（清須市 60代 女性）

隣近所5世帯ぐらいが近くのホームセンターの屋上に避難していました。避難所に行く時間の余裕がなかったのです。小さい子どもがおったり、妊婦さんがおったり、重度の障害児がおったり、それぞれに家庭の事情がありました。

屋上にある駐車場ですから屋根もなく、もちろんトイレもありません。雨がジャアジャア降り、コンクリートに叩きつけられては水しぶきとなっていました。

食べる物がなかったのも辛かったけれど、何と言っても一番困ったのは、トイレでした。

男性はあっちこっち、雨の中で用を足していたけれど、女性はそんなわけにはいかんもので、うちの娘も「いい、いかない」って。体に良くないと言っても、夜中の2時から翌日の夕方の4時ごろまでずっと我慢をしていました。

ようやく自衛隊のボートが回ってきて乗り込む順番を決める際に、みんなが「あんたのとこ一番でいい」って言ってくれて、嬉しかったです。

## 水没した車に当たりながら進んだ救援ボート

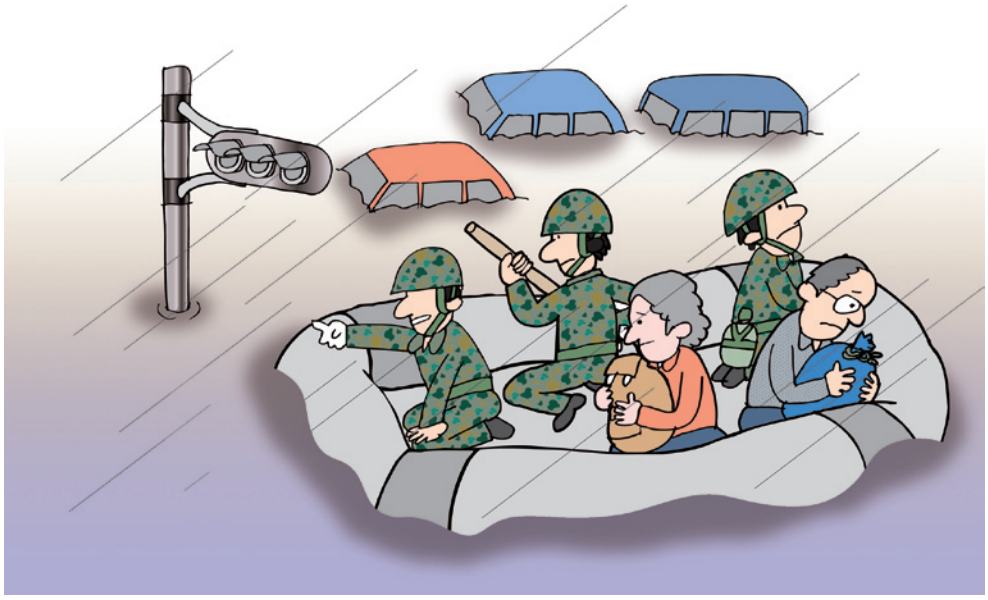
（清須市 60代 女性）

交差点のところに自衛隊の大きなバスとかトラックが待機していて、私たちはそこまで救援ボートに乗せていってもらいました。

今でも忘れんけど、ガチャンガチャンとボートが何かにぶつかるんです。「あ、ここに車がある」と自衛隊の人が言ってね。

姿は見えないのだけれど、泥水の下に自動車が何台も沈んでいるということで、アンテナみたいなのがチラチラっと見えていました。それに、車の警笛みたいな音が、どこかでピーピーと鳴り続けていたりして、誰かが「車が泣いている」って言っていましたけど、本当に不思議な気がしました。

こんなにすごい状況だったのに、車で庄内川をわたったら、「まいどおなじみの・・・」って、ちり紙交換の車が通っていました。対岸で何が起こっているかなんて関係ない。その差にすごいショックを受けました。



# 小学校へ避難途中に福祉施設へ緊急避難

（名古屋市 80代 男性）

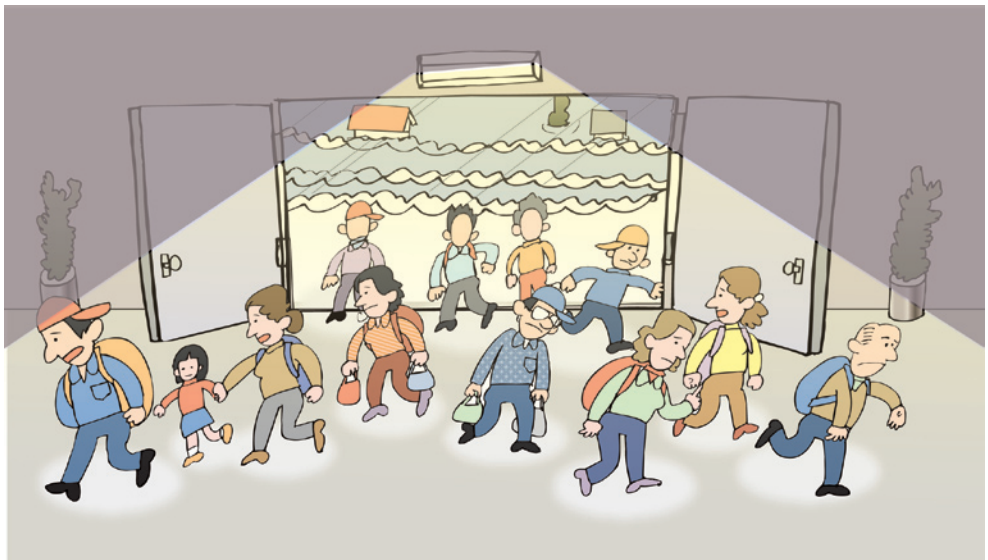
夜中の1時半ごろ、パトカーが「避難してください」って、サイレン鳴らしながら来て、飛び起きました。

いつも自分の住む地域が低く堤防が切れたら水没するなと思っていたものだから、「ともかく2階以上の場所へ避難せにゃいかんな」と。避難場所は小学校になっているんですけど、一緒に生活していた障害者の息子を車椅子に乗せて、自分も経営に携わっていた近くの福祉施設に行きました。その時はまだ施設内に水は入っていませんでした。

灯りをつけ、ドアに鍵をかけずにいたら、南へ避難する大勢の人たちが、水がどんどん下から上がってくるので、たまらず施設の中に避難してきました。50人位いたと思います。

施設は、1メートルはいかなかったけれど水に浸かりました。避難された方たちが施設内のものを全部テーブルに乗せるのを手伝ってくれました。

とにかく水の勢いがすごく、ドラム缶なんかも流れてきたほどでしたから、通りがかりの人たちが緊急的に施設に避難されたのは賢明だったと思います。



## 災害時の助け合いは普段のつき合いがあってこそ

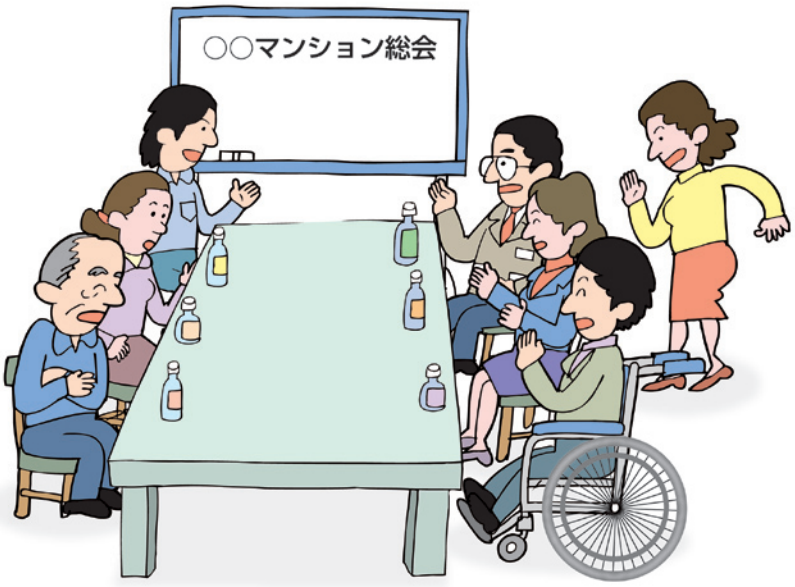
（名古屋市 50代 男性 音楽家）

私の住んでいる分譲マンションでは、1階が床上40センチぐらいまで浸水しました。明け方に水が来た時は、1階の人も一緒に2階のベランダ越しに外を見ていたんです。

水が入ったために停電になり、エレベーターが止まってしまったので、9階に住んでいるひとり暮らしの障害をおもちの方は、移動手段がなくなって、大変苦労されていました。で、そのお向かいやお隣の方が食料の調達とか、いろいろ面倒をみていました。

その障害のある方はマンションの年1回の総会にも必ず出てくるんですよ。だから、彼が車椅子で入ってこられるよう会議室の出口を広げたりしていて、ほとんどの住民が「がんばっている人だな」という認識がありました。

やっぱり、ふだんから近所つき合いができていたから、自然に手助けができたのだと思いますよ。連絡は取れない、総会にも来ないという人には手助けのしようがないですからね。



## 地域で緊急避難場所の提供を考えよう

（名古屋市 80代 男性）

避難場所に学校とか公共施設だけを指定するのでは、とても収容能力が足りないと思いますね。

あの時、緊急的に近くの施設に避難した人たちがいましたが、水害の場合には、隣でもいいし、何階でもいいから、地域で共存して助け合って生きるという考え方から、民間にも避難場所の提供をあらかじめお願いしておくことも必要ではないかなと思っています。

断る人もあるだろうけど、3軒に1軒は協力してくださる方もいらっしゃるからね。そういうことを行政や自治会が積極的に声掛けしてやったらどうかと。

車椅子の人は、腰まで水が来たら、移動はできません。

近くの川の堤防が決壊して5メートルの濁流が来たら、遠くの避難所へは逃げようがないわけで、そういう時はやっぱり隣の2階、3階の家へ緊急避難っていうこともやらないといけないと思います。

# 必死で喫茶店のゴミ出し、清掃

～水害後13日ぐらいで店再開～

（名古屋市 60代 男性 喫茶店経営）

3日目ぐらいに消防団の仕事が一段落したところで、店に戻りました。店内にはまだ椅子の高さぐらい水がありました。

完全に水が引いていないので、満ち潮になると、さっき外に出したゴミがまたこっちに流れてくるんですよ。潮の満ち引きのたびに行ったり来たり。それを2、3回やっとるうちに、ダーっと一気に水が引きました。

クーラーの室外機は流れてきた車と一緒に押し流されて壊れちゃったし、冷蔵庫も使いものにならなくなって、店内にあるものすべてがゴミとなってしまったのです。

残ったヘドロが30センチぐらいあって、シャベルなんかではどうにもならず、機械で上げてもらいました。

とにかく店中を水で洗って、何とか乾いてっていう感じ。復旧工事の人たちに休憩場所を提供したくて、がんばって12日か13日目ぐらいにはお店を再開させました。

# 網の目フェンスにゴミが詰まって水はけず

～まるでビーバーのダムみたい～

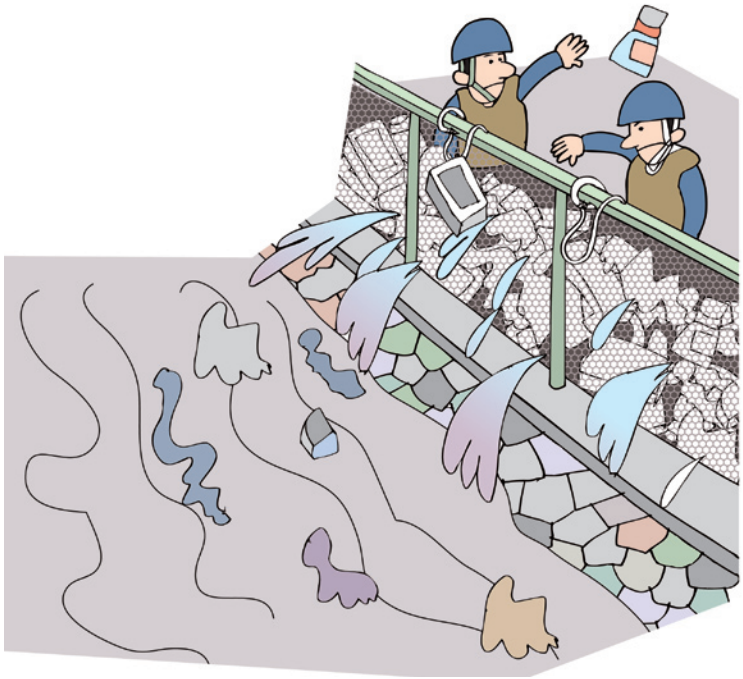
（福岡市 60代 男性 消防団員）

御笠川の上流で1時間100ミリの豪雨を記録したということでね。その川が源流から河口まで非常に短いことは承知していたし、上流で大雨が降れば即洪水になるっていう理屈は聞いとったけど、体験したのは初めて。早朝の4時過ぎに川が溢れ出してからは、もう一気に、手のつけどころが無いというか、土のうなんかが全く役に立たないという状況でした。

川の堤防が決壊した地域では、約500戸の住宅に土砂が入り、消防団が現場にかけつけた時には乗用車が何十台も天井が少し見えるか見えないかぐらいに水没していて、車の中に人が入っているかどうかは、高い橋の上から見て確認しました。

その際こまったのは、人が落ちないように水路に沿って張られていた網状のフェンスに、流れてきた発泡スチロールやゴミなどがひっかかり、ビーバーがダムを作ったみたいになってしまったことです。水が全然はけず、フェンスの高さ1メートルぐらいまで水が溜まってしまい、消防団員が命綱をつけてゴミを取り除きました。

で、災害後に区役所と協議して、ゴミが詰まらないようフェンスの網の目部分を柵状のものに替えてもらいました。こういうことって、実際に体験してみて初めてわかることなんですよ。



# 流れの速い川には近寄るべからず

～消防団員の経験から言っておきたいこと～

（福岡市 70代 男性 消防団員）

消防団に入ってもう55年になりますが、最近の雨の降り方の異常さは感じています。台風に付随した豪雨は過去にもたくさんあったけれど、近ごろは完全に雨だけやもんね。

雨粒の大きさが違うような気がするし、トタン屋根とかじゃない家の中にいても雨音で恐怖を感じることもあります。そんなことって、今まではそうそうなかった。

それから、長年の経験から言えることは、「流れの速い川のそばには、絶対に近寄っちゃいかん」ということですね。よく老人が田んぼや畑を見回りに行って、小さな水路に落ちて流されたって話を聞きますが、普通は「なんで、そんなところで」って思いますよね。

でも、それはちっとも不思議なことではなくて、水の流れを見ているうちにめまいを起こすんじゃないかと思うんです。自分たちでさえ、増水した川をじっと見ていると、思わず体が引きずり込まれるみたいになりますからね。

# 消火栓でヘドロを洗い流す

～二次災害防止で分団と地域が決断～

（福岡市 60代 男性 消防団員）

水害の後は、道路が乾く前にヘドロを完全に洗い流さないと、あとで車が通るたびに粒の細かい粉末のような砂ぼこりが舞ってスモッグ状態になり、歩くことさえできなくなります。

ヘドロを普通の水道で洗おうとしても勢いが足りません。消防のホースを消火栓につないで一斉にダーっと洗ってしまえば早いんです。でも、水道水を使うことになるから経費が高くなるし、消火栓を火災の消火活動以外に使っちゃいけないという法律もあるから、最終的には市長の判断が必要になります。

ただ、大規模災害のときは、消防団の分団長または副分団長の判断で活動できる部分もありますから、私たちは地域の自治会長さんと相談して、「お金ですむことならば」ということでやりました。

そうしなかった地域から、「何とかしてくれ」っていう苦情が市の方にたくさん寄せられたそうですが、これからはこういう事もあらかじめ検討しておく必要があると思いますよ。水害の場合は、とにかく汚れが乾く前に洗い流すこと。後片付けも、初動活動が大事なんです。

# 地域に頼られる消防団

～これからは若い人の力にも期待～

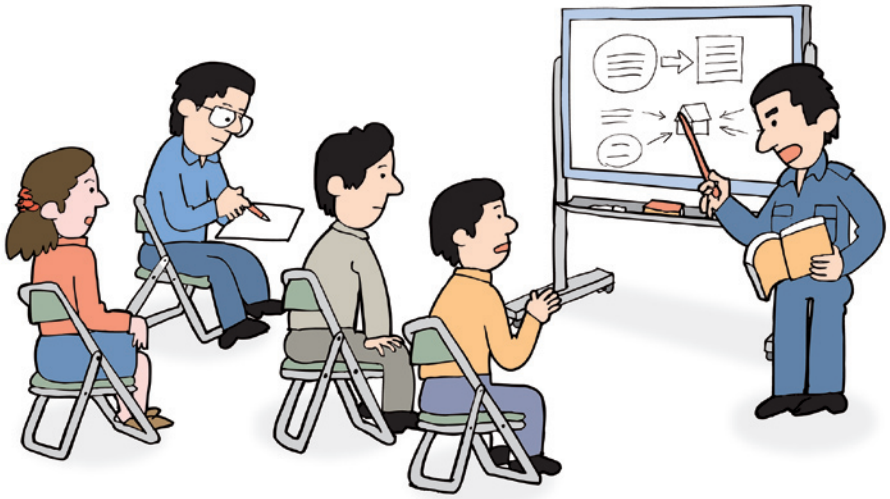
（福岡市 60代 男性 消防団員）

去年だったか、市の広報車が街の中をスピーカーで避難するように流して回りましたが、避難できない人が多い。「自分たちだけではどうにもならんから、消防団、加勢してくれ」っていうことですよね。

だから、地域に密着しとる消防団の価値っていうのはそこにもあると思うんです。「あそこはお年寄りやから」とか、「足が悪いから」っていうのを知っていますからね。民生委員さんがそういう情報を持っていても、かなり年長の方が多いけん。

自治会長さんや自主防災の責任者にしても、自分とこにも水が来そうな時に、避難していない人のところに行って確かめるっていうのはなかなかできませんよ。普通の人やけん。

自分のことを放ったらかしても出らないかんというのが消防団。全国的にみれば福岡市は消防団に入る人の率は高い方だと思いますが、まだまだ足りません。最近は、直接大学に行って講義をするなど、学生さんたちと接点を持って消防団への理解を深めてもらう活動に取り組んでいます。やってみると、若い人は意外と防災意識が高いんですよ。



# 土のう積みは消防団が災害出動。片づけは住民の手で

～役割分担を理解して～

（福岡市 70代 男性 消防団員）

水害の危険がある時に、私たちが土のうを築いていると、「うちの裏の方にも」って言われます。水害の場合は範囲が広すぎるから、なかなか手がまわりません。「待ってください。ここを積み終わらないと動けません」と言うと、「いや、何人かでもいいから」って。でも、やはり10人単位で行かないと、土のう積みなんかもさばけないんですよ。で、「何で早くやってくれなかった」って、後で文句を言われます。

逆に、水が引くと、「邪魔になるから、土のうを早く片づけてくれ」と言ってくる。きれいだったら自分のとこに置いとって、汚れていたら中の砂は何かに利用して、袋だけゴミに出してくれればいいんです。

私たちも「土のう積みは災害出動でしますが、片づけは自分たちでするんですよ」ということを、住民の皆さんへ意識づけをせないかんと思っていますが、自主防災の役員の人たちもこういうことを理解して、次の人にちゃんと引き継いでくれたらいいなと思いますね。

# 100メートル以内、すぐに行ける避難場所が欲しい

～近くのアパートやビルを事前に指定～

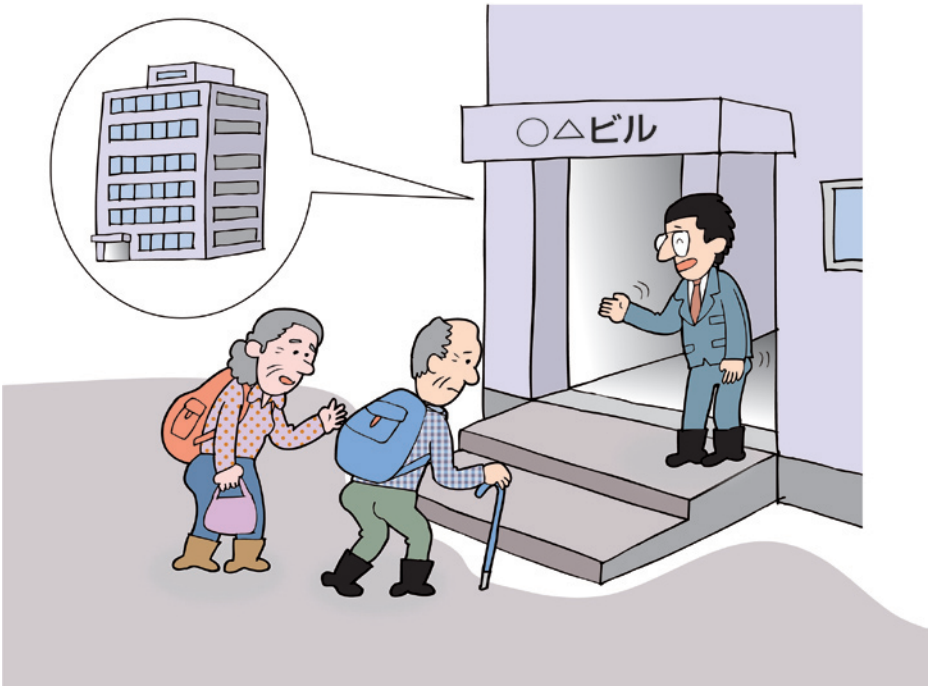
（福岡市 60代 男性 消防団員）

避難場所が指定されとっても、大水の場合は、そこの場所に避難する途中で危険箇所がたくさんあるというのが問題ですね。

早い段階で避難場所に行ってもらえればこちらもだいぶ助かるんだけれど、実際には水が出てからあわててという人が多い。だから、500メートルも600メートルも歩いて避難するんじゃなくて、100メートル範囲内で避難できるようなアパートとかビルなどを避難場所として自治体が要請するというような、きめ細やかな避難場所の設置がこれからは必要だと思いますね。

何も知らないところにいきなり避難してって言われても困っちゃうけど、前々からそういうことが決まっていれば問題ないと思います。水害はいっときの間ですからね。水が引いてきれいに洗い流したら、「ここんところまで水が来たと?」っていう感じ。

だから、ほんの数時間、安全な場所に避難することが重要なんだと思います。



# 止水板でどうにか被害食い止める

～4年前の水害の経験生かし早めに準備～

（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

博多駅近くのホテルでは、平成11年の水害で駐車場に水が入って電気設備がだめになり、何日間も営業停止に追い込まれました。その苦い経験を踏まえて、止水板*を備えていました。

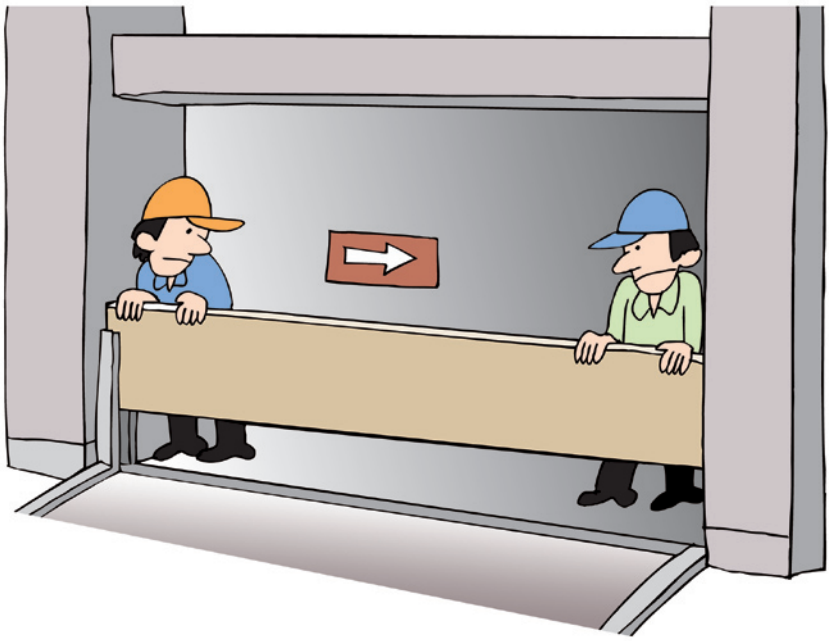
あの日も朝早くから関係者が河川の情報を入手して、浸水する可能性があるという判断で、事前に止水板を設置していたそうです。

当時は川があふれたんじゃなくて、堤防が決壊したんですよね。だから、まさに想定を超える水の量だったわけです。

水はその60センチの止水板を超えてやってきたけれど、止水板を立てておいたおかげで、なんとか大きな被害にはならなかったとのことでした。

事前にできることは全てやっておく、そういう姿勢が大切なんだと思います。

＊止水板とは、建物や構内の出入口に設置して、水の浸入を防ぐ板のこと。



# 地下浸水防止は地域ぐるみで

～駅周辺のビルと連携、訓練も～

（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

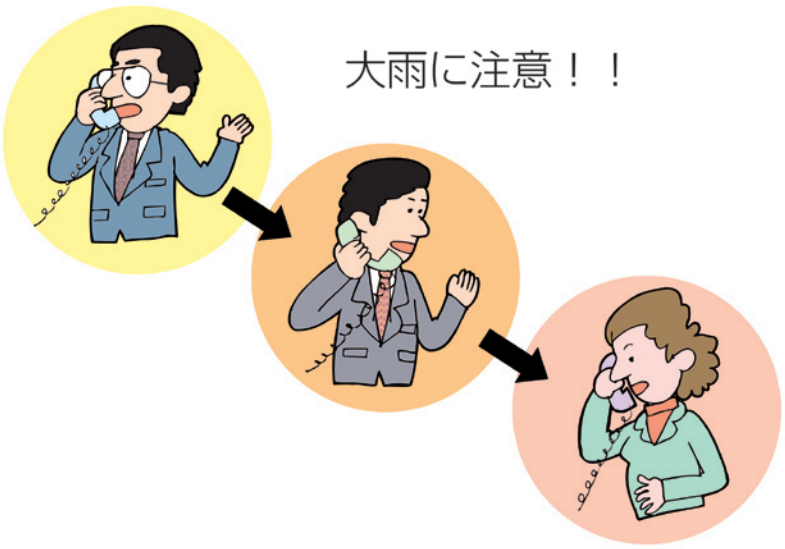
博多駅は、地下道でつながっている『接続ビル』が多い駅なんですよ。地下鉄の入口は止水板*とかで水の浸入を防ぐことはできるけど、隣接したビルの一ヵ所でも水が入ったら、地下鉄はどうしようもありません。当時も隣のビルの駐車場に入った水がドッと押しよせてきました。

で、「地下鉄が一番低いんだから、そっちへ水やっとけ」っていう考え方じゃなくて、「何かあった時にはお互いに連絡をとりながら対応しましょう」ということで、周りのビルとのネットワークを作りました。地下街はもともと防火に対する意識が高く、防火管理協議会という組織ができあがっていましたから、それに水害対応を加えたかっこうです。

「洪水になりそうだよ。うちは止水板をするから」という情報を流したら、皆さんが「そういうことなら、うちも止水板をたてよう」っていうような、情報交換のシステム作りを進めていますし、緊急事態になると人はどうしても慌ててしまいますから、こういう場合はどこに何を連絡するかといった訓練も合同でやっています。

１ヶ月に1回の訓練でも、やれば少しずつ身に付いていくものだと思っています。どこの都市でも地下空間がどんどん拡がっていますから、連携して水の浸入を防ぐことがますます大事になると思いますね。

＊止水板とは、建物や構内の出入口に設置して、水の浸入を防ぐ板のこと。



# 地下鉄入口の止水板設置のタイミング

～お客さまに不便をかけたくないと悩む～

（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

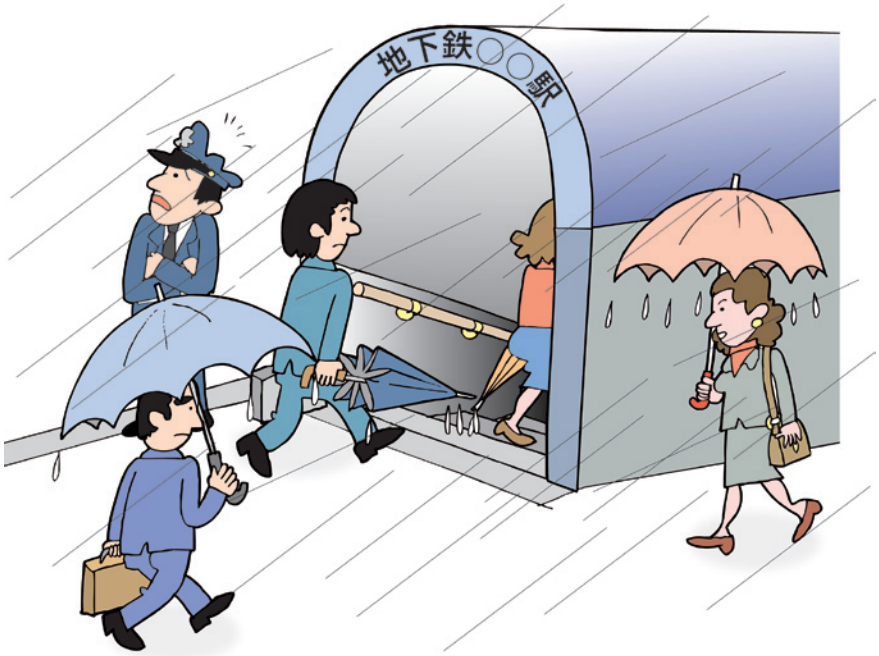
水が来てからじゃ遅いので、水が来る前に止水板*を取り付けるとなると、今度はお客さまに不便をかけることになります。

低い止水板だったら「通ってください」って案内はできるんだけど、45センチ以上の高さの板をまたいでもらうとなると、そこに椅子とか踏み台みたいなものを置くことも考えなくちゃいけないし、そばに人を配置しておかなければなりません。

早めに設置する方が良いことは分かっていても、電車が動いているのにお客さまがホームに入れない状況にはしたくないという気持ちがあります。

電車の運行に関しては、線路がどこまで水に浸かったら止めるっていうような基準はありますが、止水板の設置は現場に任されていることが多いのです。営業時間中に止水板の設置をするかどうかの判断は、本当に難しいと思いますね。

＊止水板とは、建物や構内の出入口に設置して、水の浸入を防ぐ板のこと。



# ボランティアを受け入れてもらうのも大変

～お年寄りの警戒心高く～

（岩国市 40代 女性 看護師）

被災したのは、川沿いに家がポツポツと20軒ぐらい点在している集落でした。当時、ボランティアさんたちが片づけに来てくれたんだけれど、「ありがとうございます」って、丁寧に断ってるの。目が「お家に入らないで」って言っている。助けが無かったら片づく訳ないのを分かっているのに。

「でも、お婆ちゃんどこで寝るの?」と言うと、「2階はかつかつ無事やから、濡れてはおるけど、ちょっと濡れてないスペースに布団敷いて寝る。土日になったら、東京と大阪から息子らが来るから」って。土日までまだ5日間ぐらいあるのに。

40代のご夫婦と70代の老夫婦では全然違うんですよ。人手が来たら、「ほんなら片づけてもらおうね」って前向きに言われるのは50代ぐらいまで。70代になると、放心状態になっている上に、よそから来た人に対する警戒心が強いんです。

幸い、私はこの地域で育った身ですから、「ああ、あんたあそこんとこの娘さんかね」という話から、お掃除を始めることができました。身近な人の顔が無かったら、ボランティアさんたちも片づけに入れんことも多いのです。

# 高校生を話し相手に笑顔のおばあちゃん

～集落総出でボランティア～

（岩国市 40代 女性 看護師）

被災した集落では、そこに住む人たちが総動員で水害のあと片づけをやりました。家がどっぷり水に浸かっているのに、毎日毎日救援物資を配る手伝いをしてくれたおばあちゃんもいました。配って歩いているから、自分の家に救援物資が来たときに受け取る人がいなかったというおまけ付きでね。

中学生、高校生も手伝ってくれました。「もう、あんたら一緒にお茶飲もうや!」と言って、高校生とお茶を飲んでいるおばあちゃんが一番嬉しそうでした。私たちが泥かきするよりもずっと。

やっぱり、しゃべりたかったんです。命はかろうじて助かったものの、家中泥だらけになって何から手をつけたら良いかもわからず不安がいっぱい。そんな時、孫みたいな高校生と話をするだけで、すごくホッとしたんだと思います。

# 入れ歯流され、体調こわすお年寄り

～同じ目線で気持ち汲みとる～

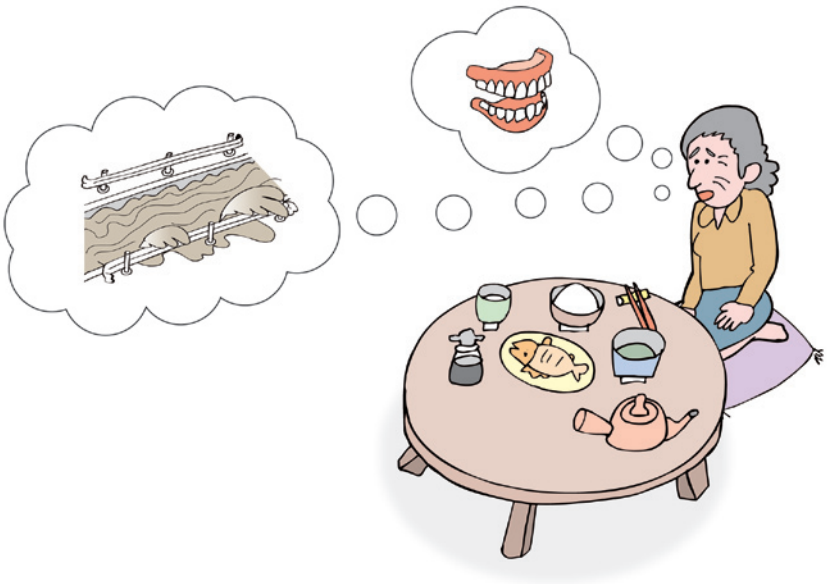
（岩国市 40代 女性 看護師）

私は看護婦ということは前面に出さずに、「同じ地域の住人ですよ」という姿勢で活動していました。「薬が流れた」っていう話が出れば、「何の病気なの?」と聞く。たまたま免許を持っていたという感じで。

食べる所は1階、寝る所は2階でしょ。洗浄液に浸けた入れ歯は下の洗面に置いてあるから、水で流されてしまって、食べようと思っても歯がないっていう人たちもいました。

2～3日で歯が入れば問題ないかっていうとそうじゃなくて、その2～3日のあいだに食べる物がいつもと違うとなると、私らが体調を取り戻すよりも高齢の方はかなり時間が掛かるし、実際にそれがきっかけになって後々体調を崩すおじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいました。

「食べれんかもしれん。よう食欲は無いけぇ」、「でも、食べにゃいけんよ」という会話の後で、よく事情を聞けば入れ歯が流れたということでね。同じ目線に立たないと被災者の方からなかなか近づいてくれません。気持ちを汲んでやるのが精一杯でした。



# 「避難勧告」発令で、企業の社宅に避難

～地域応援協定がさっそく生きた～

（平塚市 60代 男性）

当時私は現役で、地域と応援協定*を結ぶ会社側の代表として、自治会長さんと話しをする立場でした。「40年間住んでいて一度もなかったから」と言うか、4つもダムが整備されているわけですから、水害なんて想像したこともありませんでした。

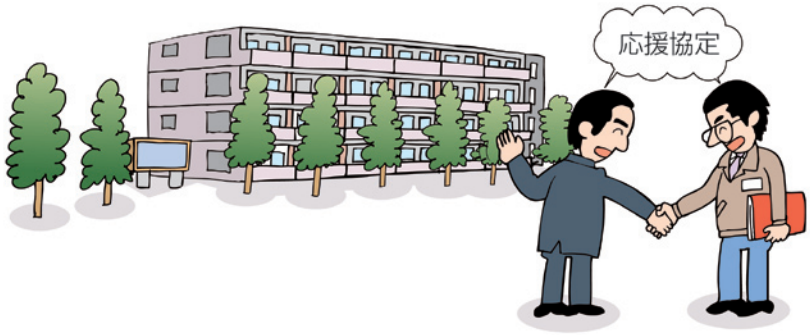
でも、その数年前にインド洋などで大津波が発生し、大きな被害が出たのをニュースで見て、自分たちの地域に津波が来たらお手上げだなと思いました。海と川に近いだけでなく、回りは平地ばかりですからね。津波に襲われたら逃げ場がないぞということで、コンクリート造の4階建ての社宅の2階以上を避難場所としてはどうかと考えたわけです。

当時の市長からも、企業のマネジメントのノウハウとか、資産とかを地域にどんどん提供してくださいと言われていたこともありましてね。防災管理課の課長さんと相談しながら半年で協定の締結にこぎつけました。

それが企業と市と地域で交わした協定の第一号となりました。もし、協定がなかったら、避難勧告*発令と言っても、どこに避難するか、みんな迷っただろうと思いますね。雨の中を1キロ先の中学校に行きなさいと言っても、数人避難するかどうかでしょうね。協定を知っていたから、百数十人というたくさんの人が迷わず社宅に避難できたのではないかなと思います。その年の1月に調印して、9月に台風。タイムリーでした。

＊応援協定とは、行政機関と民間事業者又は他の行政機関等との間であらかじめ協定書を交わし、災害時における人的・物的支援についての協力を確保するためのもの。

＊避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。



# 「とりあえずの避難」でも、必需品は持参して

～夏でも必要だった毛布～

（平塚市 60代 女性）

避難勧告*が出て、私たちは応援協定*を結んでいる社宅に避難させてもらったわけですが、社宅には人が住んでいらっしゃるので、2階と3階の廊下や階段で避難勧告の解除を待っていました。

中には、生まれたばっかりの赤ちゃんもいて、民生委員の私としては、ちょっと心配だったのですけれど、社宅の組長さんの好意で家の中に入れてもらえました。

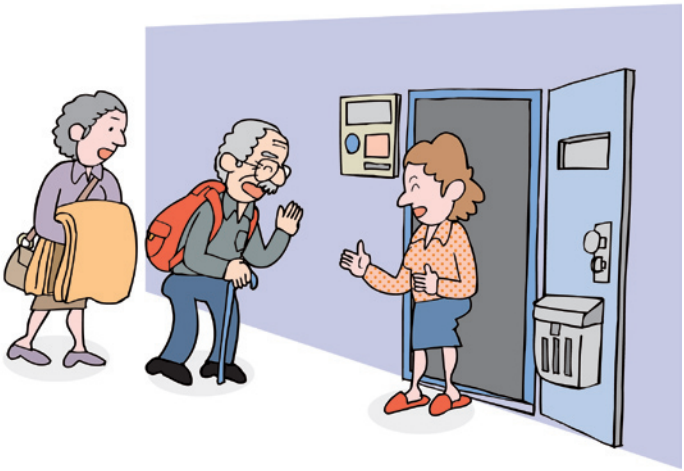
それから、血圧の高いお年寄りがいらして。夏とはいえ、だんだん冷えてくるんですよ。毛布とかもないし、イスもありませんから。かろうじてタオルケットは持っていたので、「これをかけておいてください」とお渡ししましたが、気が気ではありませんでした。

そのうち、社宅に住んでいる方が「赤ちゃんとかはどうぞ」なんて、声をかけてくださったので、そのお年寄りも部屋の中に入れていただきました。廊下にはお手洗いがないので、トイレもちょっとお借りしたりね。親切にしていただいて、本当に助かりました。

それにしても、夏でも毛布が必要だなんて、実際に避難してみないと分からないものだと思います。

＊避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

＊応援協定とは、行政機関と民間事業者又は他の行政機関等との間であらかじめ協定書を交わし、災害時における人的・物的支援についての協力を確保するためのもの。



# 「避難勧告」を知らせても、誰も避難しなかったアパートの住民

（平塚市 50代 男性）

避難勧告*、避難指示*、僕はそういう区別もわからなかったし、避難勧告が出るなんて思いもしなかった。避難に関する協定を地元の企業と結ばせてもらったということは知っていても、台風が来たから避難しなきゃいけないなんて全然考えてなかったので、電話が来たときには驚きました。

うちはアパートを経営しているので、真っ先に、「アパートの人に知らせなきゃ」と思いました。自分の判断ですけれど、水がくるとすればこの方向。だから、1階の人だけには知らせておこうと、ウインドブレーカーを着、傘をさして家を出ました。

玄関ドアを「コンコン」とたたいて、1軒1軒知らせて回ったけれど、アパートの1階の8軒あるうちの3軒ぐらいは、居留守を使ったか、そもそも出てこない。その他は一応出てきたんだけれども、時間が夜中の3時半でしょう。結果的に、1人も避難には参加しなかったですね。みなさん若くて、お一人の方ばっかりですから、自治会の活動とか、ゴミの件とか、集合住宅でよく問題になるけれど、その端的な例かなという感じはしました。

その後、相模川の水位がインターネットで分かるようになったので、雨が降るとすぐに、今は1メートルだとか、2メートルぐらいだとか、注意して見るようになりました。

＊避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

＊避難指示とは、被害の危険が目前に切迫している場合等に発せられ、「勧告」よりも拘束力が強く、居住者等を避難のため立ち退かせるための行為のこと。

# 「避難勧告」ってどこから来たの?

～情報の出所わからず、どうしてよいか迷う～

（平塚市 60代 女性）

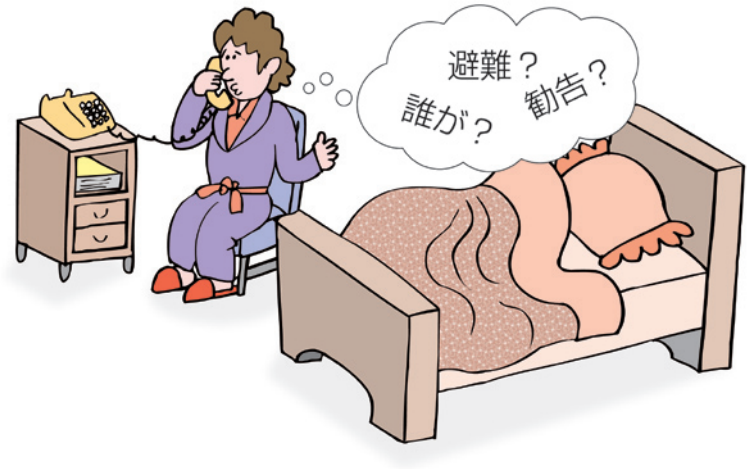
電話がかかってきたのが午前3時半ぐらい。夜中ですからいたずら電話かなと1回は無視しました。でも、台風が心配で遅くまでテレビを見ていたこともあり、2回続けてかかってきたので、「もしや」と思って電話をとりました。

電話はご近所からでした。班単位でかけてきたようで、「台風が来ているから、避難するように言ってきましたよ」とのことでした。「避難勧告* って、どこから連絡が来たのですか?」と訊いたら、「わかりません」と。だれが言い始めたのか、正式な情報なのかどうかもよく分かりませんでした。

最初に、隣の茅ヶ崎市の広報車がやってきたんですよ。隣の市との境界が入りくんでいるからすぐ近くに聞こえるんです。だから、ご近所の中にはそれを聞いて慌てて隣の市の避難場所に行った人がいたそうです。次に、平塚市の広報車も来たので、「ほんとうだ、じゃあ行かなきゃ」と、いつも用意してあるリュックを背負って、広報車が言っていた避難場所に行きました。

まだ数名しか避難してきていなかったので、民生委員をしている私はすぐに引き返して、ひとり暮らしの方の戸をトントンと叩いては、「とにかく起きていてくださいね」、「もしかして行かなきゃいけなかったら、必ず連れに来ますから、1人で出てこないでくださいね」と言ってまわりました。

＊避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。



# 避難の経験が地域の人を結びつけた

～若いお父さん、お母さんも地域の活動に参加～

（平塚市 60代 男性）

あの時、「避難勧告」*が出て、応援協定*どおりに近くの工場の社宅に避難し、「解除」になるまで地域の人たちが一緒に過ごすことになったのですが、そのことが防災を意識するきっかけになったかもしれないなと思っています。

実際、若いお父さん、お母さんが防災訓練などへ参加するケースも多く、子どもさんも連れて来て、子どもの前でいい格好をしたいということもあるのか、意外と積極的に動いてくれるんですよ。自治会としても子供さんにはお菓子もちょっと用意しています。

僕は自治会長の立場ですが、公園の掃除は単に公園をきれいにするためじゃなく、助け合うことを目的にしているものだと考えています。きれいにするだけなら専門の人がすればいいことですよね。清掃は月2回で年間10回、あと大そうじもやっていますが、延べにすると二百何人が参加しています。

その公園は、10年ぐらい前に市に頼んで作ってもらったもので、記念に植えた桜の木の下で毎年お花見をしています。そうやって、コミュニケーションを深めていけば地域の力が上がって、当然防災にも役に立つ。防災の行事だけを一生懸命やろうとしたって無理で、日ごろからどうやってつき合っていくかだと思いますね。

＊避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

＊応援協定とは、行政機関と民間事業者又は他の行政機関等との間であらかじめ協定書を交わし、災害時における人的・物的支援についての協力を確保するためのもの。

# 前もって避難の方向を決めていた

～山崩れに迷わず避難、命助かる～

（宇部市 40代 男性 行政職員）

あるお宅の話なのですが、ご夫婦でお住まいで、お昼ごろお膳にご飯とおかずを並べて、「さあ、ご飯食べよう」って言っていたら、山の方で音がしたんですね、ゴーンゴゴーって。「あれ?何でなんだろう?」と思って見たら、まさに山が崩れてきていて、土石流がダーッと押し寄せてきていたのです。

で、「こりゃいけん」と思って、ご主人はステテコとランニング一枚だったんですけど、パッとシャツをつかんで、奥さんと一緒に道の無い裏山に逃げ込んだんですよ。「何でそっちに逃げたんですか」って聞いたら、「家を建てた時に、何かあったらどこに逃げるか?ひとつは裏山もあるな」とご夫婦で話し合っていたとのこと。

道ばたに車を置いていましたが、そこは土石流の流れる方向にありました。もし道の方に逃げていたら、絶対命はなかったと思いますよ。

今自分がどんなところに住んでいて、どういう危険性があるのか、過去に地域でどんなことがあったのかなどをそれぞれが学んでおけば、そのために何を備えるか、どこに逃げるのかを具体的に考えていくことができますよね。大切なのは、具体的に考えるということと自分の身は自分で守るという姿勢だと思います。

# 受話器を置いた途端にまた電話

～ 1本の木が倒れても何件も通報～

（宇部市 50代 男性 行政職員）

当時は、受話器を置いた途端に電話が鳴る状態でした。119番とか110番とは違って、受けたら自動的にその場所の地図が出るわけではありませんので、まず住宅地図を開いて、住所や電話番号を訊き、「お近くの目標物はありませんか」と言って、お店とか病院とかバス停とかで場所を確認し、『災害対応票』に記録していきました。

「道路の木が倒れて通行の妨げになっている。何とかしないと」という電話を、見る人見る人がかけてくるので、木が1本倒れただけでもその通報が何件にもなります。結果的に通報記録は1200件にのぼりました。

「裏山が崩れた」という通報も、ほんの少し崩れた場合もあるし、土砂がドーンと家に当たっているというケースもあります。どの程度重要なものなのか、十分聞き取ってから判断しなければなりませんから、1件の電話にかなり時間がかかります。

こういった電話対応に追われ、河川の水位や雨量の監視業務がどうしても疎かになりがちですので、これ以降、応援職員に主に電話対応をやってもらうといった役割分担を明確にしました。それが今年の大雨の時に役に立ったというか、我々は冷静に監視にあたることができました。

# 「来る、来る、来る」路地はまるで川のよう

～川の氾濫の大変さ実感～

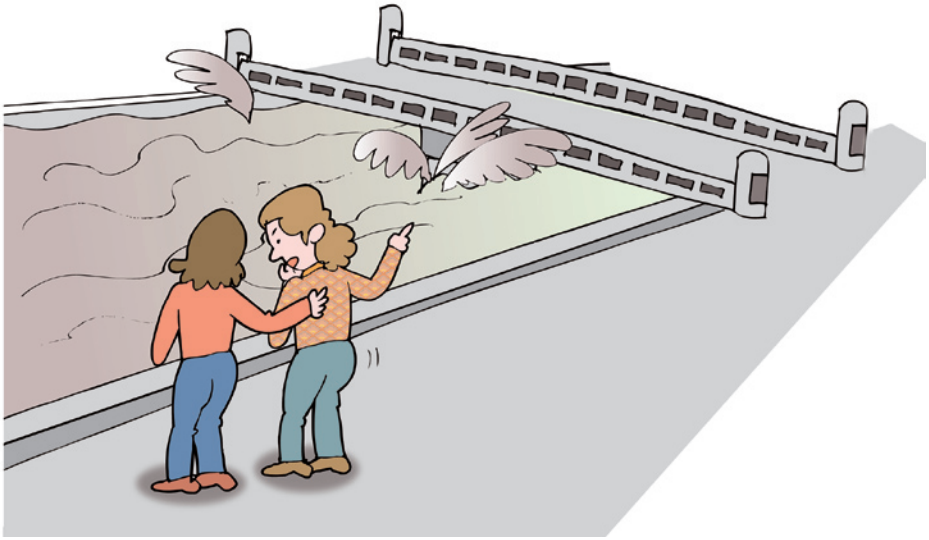
（山陽小野田市 50代 女性 菓子店経営）

朝起きたときに川の水の音を聞いて、「あ、違う」って思いました。で、姉と川の様子を見にいくと、水の勢いは今まで見たことがないほど速く、川の水が橋にぶつかって跳ね返っていました。

そのうち、橋の欄干のすき間から水があふれ出し、かまぼこ状の橋の上を川のように流れ出したのです。「来る、来る、来る」って感じでね。私たちは水に追いかけられるように家に戻り、とりあえず母と犬を2、3軒先の敷地がちょっと高い知り合いの家に避難させました。結局、我が家に水が浸入してくるのを止めることはできませんでした。

川からどんどん水が上がって来るし、側溝は水がはけない状態になっていますから、川と道路の差がなくなってきて、細い路地はまるで川のようにダーっと水が流れていました。

長いこと住んでいて今まで水に浸かったことが無かったので、「水は来ない」と思っていました。被災して初めて「川が氾濫するって大変なことなんだな」って思いました。



# 「休んでね」と言ってる自分が休んでない

～ボランティアもスタッフもついつい熱中しがち～

（山陽小野田市 30代 女性 看護師）

猛暑でしたから、冷やしたタオルを入れたクーラーボックスを肩にかけ、配って回りました。もっと遠くまで届けたかったけれど、やっぱり徒歩しかありませんから、ボランティアセンターから行ける範囲ってすごく限られてしまうのです。それに、ある種の力仕事ですから、女性の私たちには体力的にきびしいものがありました。そういう時は、もっと男性のサポートがあったらいいなと感じました。

ボランティアさん達の健康管理も仕事のひとつでしたから、センターに戻ってきたボランティアさんには、すぐに涼しいところで休むように言いました。「建物の中にいても熱中症になりますからね」って言いながら。

休憩をとったボランティアさんを送り出してから、「あ、自分もご飯食べてない」って気づくこともありました。みんなには「休んでね」と言っておきながら、「自分が一番休みをとってないな」って思うことも。

ついつい一生懸命になっちゃうのはボランティアさんも同じだと思いますが、反省しなくちゃいけませんね。

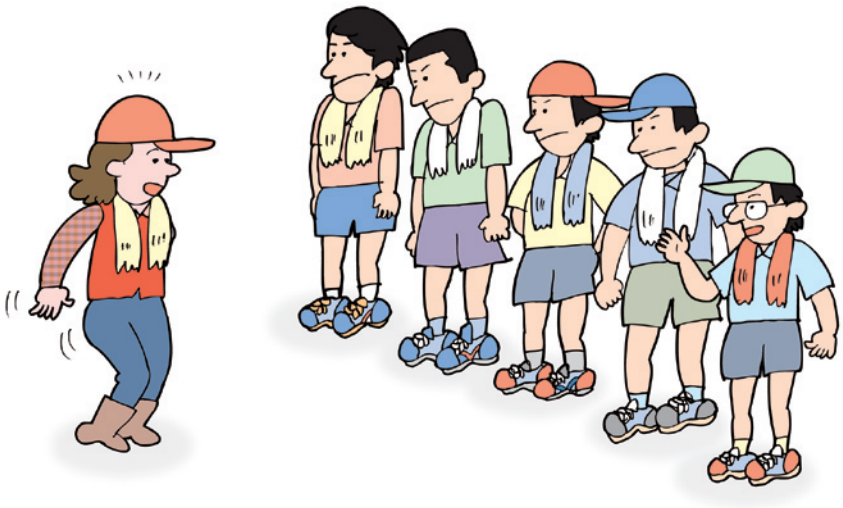
## 軽装での復旧作業は危険がいっぱい

（山陽小野田市 30代 女性 看護師）

高校のサッカー部らしき一団がボランティアに来てくれたのですが、夏だから涼しそうな格好で、半袖、短パンなんです。サンダルはさすがにいなかったですけどね。私は「ちょっと待ってください」と言って、センターの人に相談に行きました。「来られたものを帰すことはできません」と言うので、「それはそうですね。じゃあ、作業場所をちょっと考えてもらえますか」という話をしました。

また別の方で、思いっきりサンダルっていうかミュール、ヒールのある靴で来られた女性に「履きかえられるんですか」って聞いたら、「いえ、もうこれ捨てますから」って。そういう人をつかまえては、「あそこで長靴借りられますから、必ずお願いします」と伝えました。

初めてボランティアをする人は、どういうことをするのかも分からずに、「早く行きたい、早く力になりたい」という思いで来られるから無理もないなぁとは思いますが、軽装で災害の復旧作業をすることは、ケガや病気の危険が高まるんだってことを知っておいてほしいなと思います。



# ボランティアの健康管理にひと役

～災害支援ナースは、被災者にも勇気を～

（宇部市 40代 女性 看護師）

私は、昨年『災害支援ナース』*に登録して、防府市の災害支援を経験しました。今年は山陽小野田市で、主にボランティアさんに目を向けた活動をしてきました。「定期的に水分を摂られていますか?」、「お弁当は風通しが良い、涼しい場所に置いていますか?」と声をかけて回ります。ケガをされた方がいると聞けば、すぐに手当に向かいます。

ボランティアの方って、ついつい一生懸命になって、自分の健康管理をおろそかにしがちですから、そこが私たちの出番なんです。

ボランティアさんのいるところには当然ながら被災者の方もいらっしゃるので、線引きはせずに、被災者の方へも声をかけます。今回は記録的な猛暑でしたので、ギンギンに冷やしたおしぼりや飲み物をクーラーボックスに入れて、配って歩きました。

家の中は泥だらけで、とても住めるような状況じゃありません。中には、私たちの顔を見て涙を流される老夫婦もおられました。子どもさんは県外に出ていて、今は2人暮らし。きっと心細かったのだろうと思います。

＊災害支援ナースとは、看護協会の研修を受け、災害が起こった際に支援活動をする旨を登録しているナース(看護師)のこと。

# マンホールに片足バコーン

～泥水で蓋が浮いているのに気づかず～

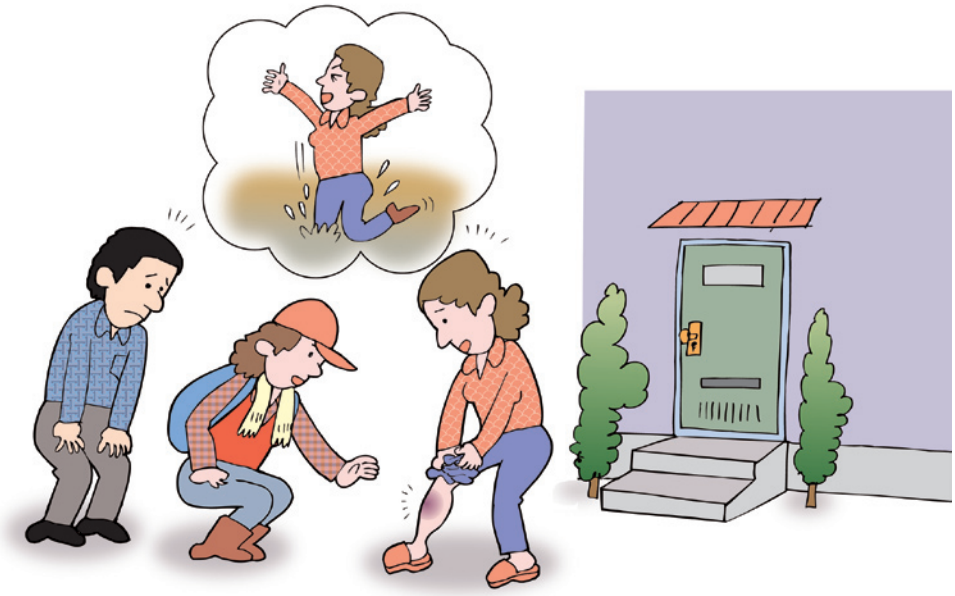
（山陽小野田市 30代 女性 看護師）

庭先に犬がいたのでつい声をかけると、飼い主さんが「実はこの犬、川が氾濫した時に流されたんだけど、泳いで帰ってきたんですよ」って。「偉いね」なんて話をしていると、そこの奥さんが出てきて、「ちょうど良かった。看護婦さんなら診てもらえる」と言いながら足を診せたのです。

足の付け根まで一本丸ごと、すごい内出血でした。「どうしたんですか?」って言ったら、「マンホールの蓋が浮いていたのに、泥水で見えなくて、落ちちゃった」と言うのです。「バコーンッと片足落ちて、『マンホールだ!』と思って自力ではい上がった」とも。表面上傷は無いけれど、ものすごく赤く腫れていて、ちょっと熱があるような感じだったので、足を冷やしてあげてから、病院に行くよう勧めました。

お母さんって、被災して片づけをしながらも、ちゃんと家族に3食食べさせなきゃいけないっていうことがあるから、気にはなるんだけど自分のことはさて置いて、という感じになっちゃうんですね。

痛かったと思いますよ、本当は。けど、耐えとったんよね。別れ際に、「ちょっと安心した」と、奥さん。そのひと言が心に残りました。



# 重い長靴を引きずって歩く

～軽い長靴、あったらいいな～

（宇部市 40代 女性 看護師）

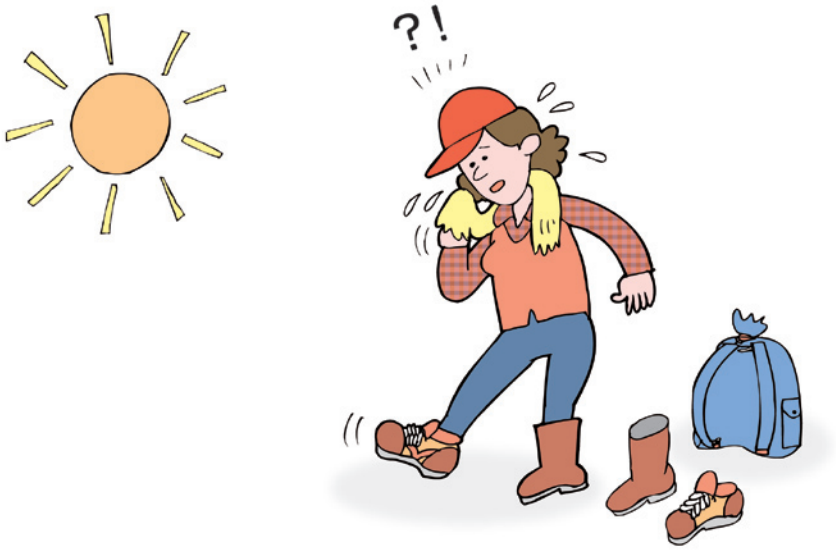
今回の水害は、猛暑の中でのボランティア活動となりましたが、これが寒い冬だったらどうなのかなって考えちゃいますね。地震と水害では全然対応が違うし。

水害の場合は長靴が基本中の基本なんだけど、水が引いた後は、歩くのに一番疲れるアイテムになってしまい、重たそうにカポカポ引きずって歩いていました。

「意外にスニーカーが要るよね」って、「水が引いたらスニーカーじゃないと歩けないよね」って仲間同士で話をしていました。

でも、やっぱり足元までちゃんと気を配っている自分の装備を、被災者やボランティアの方に見せるっていうことも必要だから、重いけど履いとこうかなっていう気持ちがありました。

スニーカーとかで作業しているとつま先から水が染みてくるでしょ。するといつの間にか雑菌が入って、爪の皮が剥がれてしまうこともあるんです。だから濡れている所に入るときには、絶対長靴。願わくば、もっと軽い長靴があるといいなと思っています。



# 紙おむつがプカリプカリ

～水の浸入防ぎきれず～

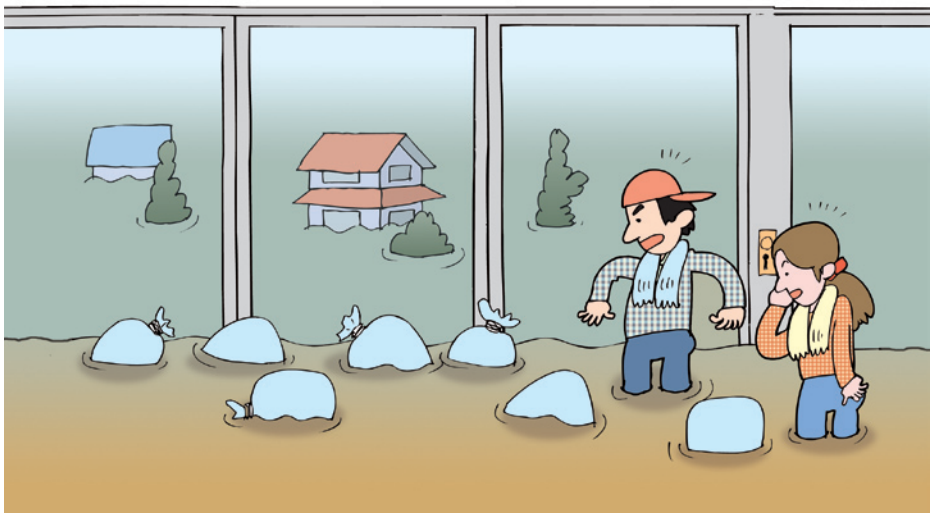
（山陽小野田市 40代 男性 保健施設職員）

今年は川があふれたので、昨年とは比べものにならないほどの水が来ました。玄関の外からブルーシートと土のうで水の浸入を防ぐわけですが、想定していた土のうの高さよりさらに上に水が来たせいか、残念ながら完璧にくい止めることはできませんでした。

男性のモモのあたりまで水が来ましてね。玄関のガラスの向こうは、もう水族館状態なんです。外から水圧がかかりますから、シートがドアのすき間に密着するようになってある程度はカバーできるはずなのですが、水が入り始めました。

「じゃあ、どうしようか」ということで、ありったけの紙おむつを出してきて、玄関とエレベーターの周りに置きました。

「とにかく満潮までがんばったら何とかなる」っていう頭でおったのですが、どういうわけか満潮になっても水が引かないんですよ。そのうちに、「あっちに水が入った。こっちに入った」というかたちになって、紙おむつがいっぱいプカプカ浮き出したのです。水を吸えば土のうの代わりになると思ったのですが、悲しいかな、そうはいきませんでした。



## 経験踏まえ、復旧業者を早めに手配

～従業員のケアも忘れずに～

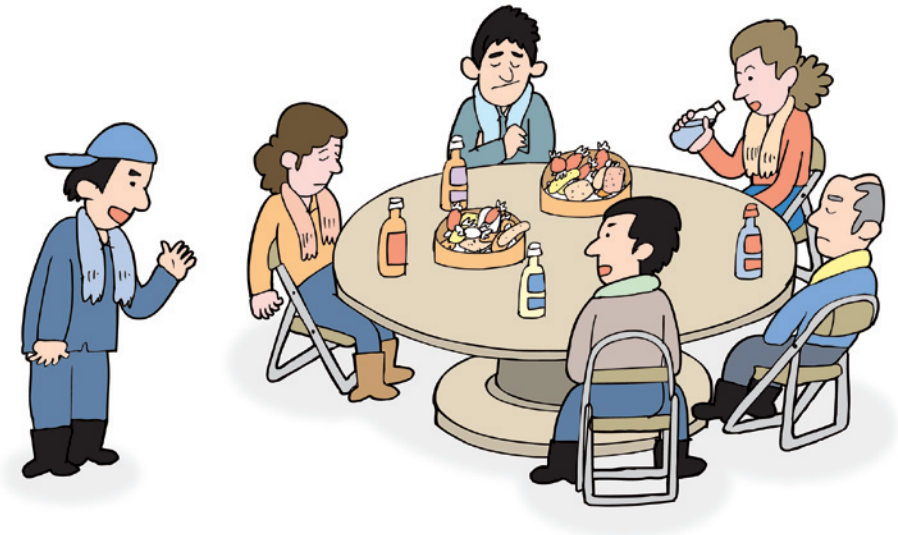
（山陽小野田市 60代 女性 保健施設経営）

昨年は水が入ってから復旧業者等の手配をしましたので、どこも引っ張りだこで、連絡が1分でも遅れると順番がだいぶ後になるということで、施設の復旧も遅れました。

その経験がありましたので、今年は水が引かないうちに皆スタンバイの状態。水が来る前から「これは来そうだ」ということで連絡を入れ、待機してもらっていましたから、すぐに復旧作業にとりかかってもらえました。

それから、従業員の皆さんには、2時間おきぐらいにロビーに集まって手を休めてもらい、復旧作業が続いて疲労がたまっていないか、ご自宅の被災状況はどうかといったことを確認し、「残れる方だけ残ってください」というかたちにしました。

このやり方は従業員に無理をさせないという点で、とても優れたやり方だと思いますね。早く業者さんの手が入ったこともあって、手際良く片付けが進み、休業は当日と翌日の復旧作業の2日間だけで、その次の日からは営業を再開することができました。



# 1階のお年寄りはゆっくり2階へ

～情報収集して早めの判断～

（山陽小野田市 60代 女性 保健施設経営）

その朝、デイサービスの方の迎えの車から水が出て走れなくなったという報告がありました。急いで確認に行くと、近くの川が今にも氾濫しそうな状態でした。で、デイサービスはお休みということにしました。

施設の1階には、グループホームの2ユニットの18人の方だけが住んでおられるんですけど、ゆっくり朝食を食べていただいてから2階の方へ移動していただきました。スタッフもついて、いつものように食事も出せましたので、歌を歌ったりして、階下が大ごとになっているのも分からずに過ごされていたと思いますよ。

落ち着いてそういうことができたのは、前の晩から気象台や市の危機管理室との連絡をずっと続けていて、「これはもういけない」という思いが強くなっていて、判断がし易かったからだと思います。

県の防災メールも施設の主要なパソコンや私の携帯電話に入るように設定しておりまして、川の水位情報なども入るようになり、役に立ちました。

近くの川が氾濫したのは想定外でしたけれどね。

編集後記

平成 23 年 3 月 25 日

# 一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？

NPO 法人 東京いのちのポータルサイト 副理事長 鍵屋　一
防災リスクマネジメント Web 編集長　中川　和之
東京 YWCA 副運営委員長　池上　三喜子

一日前プロジェクトの物語をお読みいただいて、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

自然災害に遭遇して体験したことや感じたことなどを語り継ぐことは、災害体験者や被災者の重要な使命であると言えるでしょう。なぜなら、多くの市民は被災経験や災害体験を持たないため、災害に事前に備えることの大切さを頭で理解はしていても、実際に自分が被災したらどうなるかをイメージできず、何も対策を講じていないからです。

災害体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃいます。その方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうことが多々ありますが、ここでご紹介する一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

一日前プロジェクトでは、被災された方々のさまざまな「思い」や「本音」を物語にして、災害体験・被災体験を持たない人たちに、災害が身近で、恐ろしいものであることに気づいてもらうことを本来の目的としています。今年度からは本プロジェクトの新たな担い手作りを始め、ジャーナリストの皆さんや地域の防災に携わっている方々と一緒に物語作りを行いました。今後も新たな担い手が増えることが期待されます。

一日前プロジェクトで作られた物語は、研修やワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部として使うこともできます。文字だけでなく、添えられている気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの替わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともありますし、ホームページでエピソードを紹介している自治体もあります。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法のポイントを以下にまとめましたので、参考にしてください。
※詳しくは、内閣府のホームページ http://www.bousai.go.jp/km/imp/index.html をご参照ください。

## □物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる物語を集める時のポイントは次のとおりです。

### 1.「物語」を拾い出す

（1）話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2-4人集まっていただいて、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出して再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。最近の出来事だけでなく、時間がたった災害についても振り返って取り上げることもできます。

（2）物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。ただ、減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

（3）見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記（2）で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの物語ごとに300字から500字程度にまとめると読みやすいでしょう。一つの話題から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話を切り分けるのではなく、重なっても単独の物語で流れが分かるようにします。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう？」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

### 2. 物語を拾い出す場を作る

これまで、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探す聞き取りを実施してきました。今年度からは、いろんな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すために、聞き取りの場をさらに増やそうと、聞き取りの担い手を増やす試みも始めています。

災害列島である日本では、不幸なことに毎年のように災害が発生します。その体験は、同じように見えても、一人一人にとっては厳しい経験です。その過程で辛い思いをした被災した人々の声を、一日前プロジェクトとして継続的に後世に伝えていくために、物語を聞き取る場を作り続けていきましょう。

# 一日前プロジェクト みんなでやってみよう！
## －簡単な手順を紹介します－

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ

↓

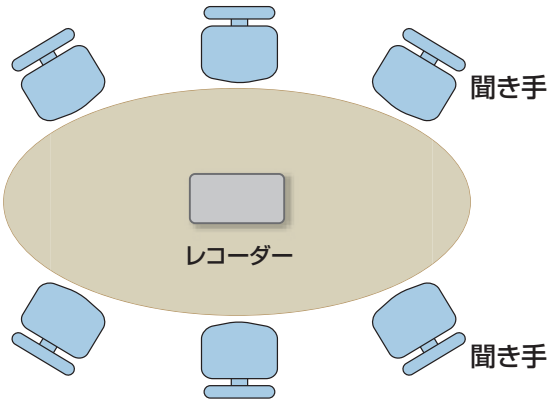
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

↓

みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間

↓

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらう ※話し手は、2人～4人が適当




「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

↓

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする
※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的

↓

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき　共 感　反 省

■発行　内閣府（防災担当）
〒100-8969　東京都千代田区霞が関1-2-2（中央合同庁舎第5号館）
TEL.03-3503-9394　http://www.bousai.go.jp